

IV. 国内連携

IV-1. MOST

1. はじめに

MOST (Mutual Online System for Teaching & Learning) は、本センターが2009年11月に提供を開始したオンラインFD支援システムで、大学の教職員、大学院生を対象とした招待制のサイトである(図1)。2014年1月1日現在、登録者数581名(+101)、スナップショット数2,092件(+691)、コミュニティ数87件(+4)となっている(括弧内は2012年12月1日以降の増加数)。本節では、MOSTの取り組みやシステム改良の内容を中心に報告をおこなう。



図1 MOST トップページ (https://most-keep.jp)

2. MOST における取り組み

MOST のトップページからリンクされた「MOST ギャラクシー（旧スナップショットギャラリー）」のコンテンツを充実させるために、関西地区 FD 連絡協議会の「FD 活動報告会」において作成された個別大学で取り組まれている組織的な FD 活動に関するスナップショットや、MOST フェローの活動成果などを中心に MOST 上に掲載してきた。今年度も引き続き公開コンテンツの充実を図った。

2-1. MOST フェローシッププログラム

本センターでは、これまで提供してきた MOST の活動をさらに推進・活性化させるため、全国の大学教員を対象とし、MOST を利用した授業実践の見直しや教育改善の活動に取り組む「MOST フェローシッププログラム」を 2011 年度に開始した。今年度は第 2 期 MOST フェローを募集し 10 名が選定された。第 2 期 MOST フェローと各テーマを資料 1 に示す。

MOST フェローは、1 年間かけて、対面でのミーティングや MOST を利用することで、フェロー同志で活動のプロセスや成果を共有しながら、各自の教育実践をよりよくするとともに、教員コミュニティとしての成長も目指している。第 2 期 MOST フェローの活動スケジュールを資料 2 に示す。このプログラムは、MOST フェロー運営委員会として、飯吉、田口、酒井が中心となりプログラムの運営を担当した。以下、本プログラムにおける、2 度の対面ミーティングを中心に報告する。

(a) 第 1 回ミーティング

2013 年 3 月 15 日、第 2 期 MOST フェローシッププログラムの第 1 回目ミーティングが京都大学で開催された。プログラムを資料 3 に示す。第 1 回ミーティングでは、フェローの自己紹介や 1 枚の画像を提示しながらの実践紹介をおこない、活動の第一歩を踏み出した。

ミーティングの冒頭で、まず、飯吉・田口から本プログラムの趣旨説明がおこなわれた。ここでは、個人の授業改善だけでなくディシプリンを越えた教員コミュニティとしてもその質的向上を目指すというプログラムのねらいや、MOST を利用して実践を可視化・共有することの意義などについて説明がなされた。

続いて、事前に提出された自己紹介シートを元に、各フェローによる自己紹介がおこなわれた。1 人 2 分程度で、自身が担当する授業を紹介するとともに、選定したテーマや改善したい内容、そのきっかけや現状と課題などについて共有された。

次に、酒井より、この取り組みで各フェローが作成する MOST とコースポートフォリオ（スナップショット）の紹介、年間スケジュールの説明がおこなわれた。本プログラムでは、1 年間で各自のスナップショットを作成するとともに、翌年の第 20 回大学教育研究フォーラムで成果発表することが最終目標であることが示された。

オフィシャルなミーティングの終了後、別室に移動し、第 1 期 MOST フェローの修了式がおこなわれた。本プログラムを終了した 9 名の第 1 期 MOST フェローに修了証が授与された。第 1 期 MOST フェローは、この日までにそれぞれ 1 年間取り組んできた授業開発・改善の成果をスナップショットとして作成し、MOST 上で公開するとともに、第 19 回大学教育研究フォーラムでもその成果を発表した。スナップショットは下記の URL で閲覧可能である。

https://most-keep.jp/most/gallery-most_fellow_01/

引き続き、第1期 MOST フェローも合流し、第2期 MOST フェローの教育上の取り組みについてのアピールタイムが設けられた。事前に提出された取り組み内容をアピールするような1枚の写真、図、イラスト（自己PR用画像）をスクリーンに投影し、各自の教育に関するアピール点が各2分程度で発表された。本ミーティングは非常に盛況で、終了時刻が過ぎるまで活発な議論や意見交換がおこなわれた。

なお、本ミーティング後、2週間の期間を設け、ミーティングや公開研究会の感想を掲示板へ投稿することを各フェローに求めた。また、「プロポーザル」スナップショットのテンプレートを送信し、「(1) テーマ」「(2) 対象となる実践、時期」「(3) エビデンス、データの収集方法、協力者、ピアレビューの計画」「(4) 目標」などを1枚のスナップショットにまとめ、後日、オンラインコミュニティ上でフェロー間で共有した。

(b) 第2回ミーティング（合宿）

2013年8月27日（火）～28日（水）、KKR ホテル大阪において、第2回ミーティングを合宿形式にて開催した（資料4）。この合宿では、前期に取り組んだ各自の授業実践について、作成途上のコースポートフォリオ等を使って活動報告がおこなわれた。初日は、各自の活動経過報告の後、ディナーセッションとして飯吉によるトーク、及び第1期 MOST フェローから勝又あずさ先生（成城大学）と木村修平先生（立命館大学）によるトークがおこなわれ、講演内容について全体で議論をおこなった。2日目は MOST フェローシッププログラム後半の活動や、プログラムの今後の展開について、グループディスカッションをおこない、最後に議論内容を全体で共有した。

第2回合宿以降の活動は、本原稿執筆時点では未実施であるが、今後予定されている MOST フェローの活動と今後の予定について述べる。

2014年1月には、作成途上のコースポートフォリオの質を上げるため、スナップショット作成の進捗状況や問題点の報告、共有の機会をオンラインでおこなう。このフェロー間での相互チェックを通じてスナップショットを完成させ、3月の大学教育研究フォーラムまでに MOST 上でスナップショットの一般公開をおこなう。これが本プログラムの一つめの成果である。また、3月に京都大学で開催される第20回大学教育研究フォーラムにおいて、各フェローはそれぞれ1年間かけて取り組んできた活動成果に関して個人研究発表をおこなう。これが二つめの成果となり、第2期 MOST フェローの活動は終了することとなる。

MOST フェローシッププログラムは、次年度以降も継続すべく準備を進めている。3月の第20回大学教育研究フォーラムの期間中に、第3期 MOST フェローの第1回ミーティングを予定している。

2-2. コースポートフォリオ実践プログラムの実践事例の提供

2010年度後期に開発した「コースポートフォリオ実践プログラム」を、カリキュラム改善を目的としたプログラムとして発展させ、2013年度前期より、同じ学科に属するすべての教員が参加する実践プログラムを実施している。この取り組みは、2011～13年度科学研究費補助金基盤研究（B）「コースポートフォリオを活用した大学カリキュラムの質保証モデルの構築」（研究代表者：田口真奈）に引き継がれている。

2013年度には、某大学における学科全体の取り組みとして、カリキュラム改善を視野に入れた本プログラムの実践がおこなわれている。当該学科の全教員、全科目を対象としてコース

ポートフォリオを作成し、カリキュラム改善のための基礎資料とすることがねらいである。ここで作成されたカスタマイズ版のスナップショットのテンプレートや、カリキュラム改善に関わる知見を将来的に MOST 上で公開する予定である。

2-3. 関西地区 FD 連絡協議会の「FD 活動報告会 2013」

上記のほか、関西地区 FD 連絡協議会の「FD 活動報告会 2013」向けに作成されたスナップショット 28 件を、個別大学でおこなわれている組織的な FD 活動の事例として掲載した (III-2 参照)。

3. システムの開発と改修について

利用者の要望などを受け、今年度中に MOST および KEEP Toolkit に対しておこなった改修項目を以下に列挙する。原稿作成時点で多くの項目が未完成であるが、今年度内に完成予定である。

(a) KEEP Toolkit 関連

- ・ダッシュボードの開発…画面レイアウトの再設計・実装。「名称変更機能」「ポートフォリオ・ソート機能」「フォルダ機能」を改修し、「同一ウインドウ表示機能」を開発。
- ・スナップショット機能の開発…編集画面の再設計・実装、テキストエディター (TinyMCE) の更新。また、「ボックス編集 (移動・追加・削除) 機能」「タグ入力機能」を開発。
- ・ギャラリー・ステイッチ機能の開発…編集画面の再設計・実装。また、「ステイッチグループ作成・編集機能」「ギャラリー作成・編集機能」を開発。
- ・管理ページのデザイン変更…現在の管理ページのレイアウト・デザインを変更。
- ・「スナップショットへのコメント付与機能」「ユーザーテンプレート投稿機能」の開発。

(b) MOST (Sakai) 関連

- ・日英非対応箇所の改修、タブレット・スマートフォン端末対応、BasicLTI 準拠、トップページレイアウトの改修。

4. MOST 講習会

教育関係共同利用拠点における業務として「MOST 講習会」が企画されているが、昨年度までに講習会参加者数が少なかったこと、しかし、少数の需要もあることなどを鑑み、これまで実施してきた講習会で使用してきた教材を MOST 上で提供することとし、個別対応はオンライン上でおこなうこととした。MOST 上での教材は、下記の URL に掲載している。

https://most-keep.jp/most/program-web_lecture/

今後予定している 3 月の講習会は、関西地区 FD 連絡協議会の会員校に所属する教職員を対象としたもので、協議会広報ワーキンググループとの共催で開催する。これは次年度の「FD 活動報告会 2014」と連動している。

このほか、MOST のデモを、昨年度、第 19 回大学教育研究フォーラムの参加者に対して実

施した。3月に開催される第20回大学教育研究フォーラムにおいても実施予定である（執筆時点で未実施）。MOSTの登録は招待制で、通常は事務局よりアカウントの発行をおこなっていないが、これらの講習会およびデモにおいては希望者にMOSTのアカウントの発行手続きをおこなっている。

（酒井 博之、飯吉 透、田口 真奈）

第2期 MOST フェロー

氏名	所属	テーマ
天野 一哉	星槎大学共生科学部	大学の講義および教員免許更新講習等におけるPBL (Project Based Learning) の手法を用いた授業実践
稲葉 利江子	津田塾大学学芸学部	オープン・エデュケーションによる教材共有と教材の作成
内村 浩	京都工芸繊維大学 アドミッションセンター	協同的に課題を遂行するアクティブ・ラーニング型授業 ―ピア・インストラクションによる学習観の変容―
加藤 恭子	高崎商科大学 商学部	ピア・インストラクションを含む交流型講義
神谷 健一	大阪工業大学 知的財産学部	アンドラゴジーを念頭に置いたリメディアル英語教育のオープン化と教材アーカイブの構築
駒井 章治	奈良先端科学技術大学院 大学バイオサイエンス研究科	PBL (Project/Problem Based Learning) を企業などで行っているファシリテーションの技法を用いて議論の促進を図り、自宅学習を推進している。
坂田 信裕	獨協医科大学 基本医学情報教育部門	(c) ブレンディッド・ラーニング ICT 活用で変貌する医療現場と医学部・看護学部における情報リテラシー授業をどう結び付けるか? : 遠隔医療を理解するためのブレンディッド・ラーニング
鈴木 敦	茨城大学 人文学部	PBL (Project Based Learning)
筒井 洋一	京都精華大学 人文学部	(a) ピア・インストラクション チーム・ビルディングとコミュニケーションを促進するピア・インストラクション授業のデザイン
村上 祐子	東北大学 大学院理学研究科	オープン・エデュケーション

第2期 MOST フェロー 活動計画

日 程	活 動
3月14日(木)	第19回大学教育研究フォーラム 小講演への参加(京都大学)(任意)
3月15日(金)	第1回ミーティング(京都大学)
～3月末	第1回ミーティングの感想の共有 ・ MOST内「第2期 MOST フェロー」コミュニティ内の「掲示板」へ投稿
4月1日(月)	「活動のプロポーザル」スナップショットの共有 ・ 「テンプレート」を各アカウントに送信します ・ 記載項目: ①テーマ、②対象となる実践、③動機、④目標、⑤エビデンスの収集・分析方法、⑥協力者、ピアレビューの計画など)
6月頃	進捗状況や問題点の報告、共有(オンライン)
8月27日(火) ～28日(水)	第2回ミーティング(合宿) ・ 1日目: 13:30～宿泊、2日目: 9:00～12:30 ・ 活動の進捗共有、成果発表に向けての計画 ・ トークセッション
9月3日(火)	合宿の感想共有、アンケート提出締切
8月後半	第2回ミーティング後、スナップショットを MOST フェローで共有
1月頃	進捗状況や問題点の報告、共有(オンライン)
3月中旬	MOST のギャラリーでスナップショット一般公開 ……成果①
3月中旬	第20回大学教育研究フォーラム(京都大学) ……成果② ・ 個人研究発表で各フェローの成果報告 ・ 修了式 ・ 第3期フェローとの交流会

第2期 MOST フェロー 第1回ミーティング プログラム

日 時：2013 年 3 月 15 日（金）16:10～18:00

場 所：京都大学 吉田南1号館 1 共 21 演習室・1 共 22 演習室（2F）

プログラム

16:10 ミーティング開始	1 共 21 演習室にご参集下さい（15:45 開場）
16:10 趣旨説明（飯吉・田口・酒井）	
16:25 自己紹介	第2期 MOST フェローの自己紹介（1 人 2 分程度）
16:45 MOST について（酒井）	
（部屋移動）	1 共 22 演習室へ移動（軽食を用意しています）
17:00 修了式	第1期 MOST フェローの修了式をおこないます
17:10 アピールタイム &ディスカッション	1 人 2 分（+質疑応答 2 分）程度で、持参した画像等を スライドに映し、取り組みについてのアピールをおこ ないます
18:00 終了・解散	

会場地図：京都大学 吉田南1号館 1 共 21 演習室（吉田南構内）



第2期 MOST フェローシッププログラム 第2回ミーティング

日 時：8月27日（火） 13:30～21:00（受付 13:00～）

8月28日（水） 9:00～12:30

場 所：KKR ホテル大阪 ボードルーム（6階）

■プログラム（1日目）

日程	時間	プログラム	備考
8月27日 （火）	13:30 ～ 13:40	開会挨拶	挨拶・本合宿研究会の趣旨について 飯吉 透（京都大学） MOST フェロー合宿プログラムについて 酒井 博之（京都大学）
	13:40 ～ 15:20	セッション 1	MOST フェロー活動報告（前半） 司会：酒井 博之 （1人20分・・・発表10分＋質疑応答10分）
			休憩（15分）
	15:35 ～ 17:15		MOST フェロー活動報告（後半）
	17:15-18:00	チェックイン・休憩（45分）	
	18:00 ～ 20:00	セッション 2	ディナーセッション 司会：河合 道雄（京都大学大学院生） キャスルトーク 1 （ゲスト：第1期 MOST フェロー） 勝又あずさ（成城大学）・木村修平（立命館大学） キャスルトーク 2 飯吉 透
	自由行動		

■プログラム(2日目)

日程	時間	プログラム	備考
8月28日 (水)	7:00 ～ 8:45		朝食（各自、レストランシャトー（12階）にて）
			チェックアウト
	9:00 ～ 11:00	セッション3	今年度後半のプログラムについて 酒井 博之 今後の MOST フェローの活動について（グループワーク） ファシリテーター：酒井 博之 ・ コミュニティ活動に望むこと ・ スナップショットの将来の活用 ・ 大学教育コモンズに対してコミュニティができること
	11:00 ～ 11:30	セッション4	第20回大学教育研究フォーラムに向けて 大学教育研究フォーラムでの研究発表について
			片 づ け・移 動（タクシー）
	12:00 ～ 12:20		大阪水上バス アクアライナー乗船（大阪城港～淀屋橋港）
	12:30		解散

IV-2. 大学生研究フォーラム

1. 概要

大学全入時代といわれる最近の大学教育にとって、学生をどう育てるかということが喫緊の課題となっている。大学はもはや単なる知識を習得させるだけの場ではなく、知識社会、情報化社会、グローバル社会といった新たな社会状況で力強く活躍する人材育成の場ともなっている。そのために大学は、正課・正課外教育、キャリア教育など有機的・包括的に考えていかなければならない。

大学生研究フォーラムは、高等教育における教授学習やファカルティ・ディベロップメントの実践的研究組織・京都大学高等教育研究開発推進センターと、大学生・大学院生への奨学制度で、社会に貢献する有用な人材育成を目指す公益財団法人電通育英会が、現代大学生の姿を正確に理解し、かつ現代社会を力強く生きていける学生を育てるために開催するものである。

さて、大学生研究フォーラムは、プログラムのよりいっそうの充実をはかるべく、2011年度より共催校に東京大学大学総合教育研究センターを加えて、運営組織の拡張をおこなっている。これにともなって、これまで一方通行的な講演形式のフォーラムから、参加者同士が議論をおこなう参加者同士の「ダイアログセッション」を導入している。また二日目には、参加対象者を大学、企業等の関係者だけでなく高校教諭にまで拡張して、「高校教諭のためのシンポジウム」を設けている。これはとくにキャリアデザインが、大学入学以前の状態と密接に絡んでいる調査結果をふまえてのことである。

本年度の大学生研究フォーラムは、初めて京都を離れて、東京大学で開催した。今回は、グローバル化が進み、政治・経済・生活が大きく変化していく中で企業の進化に注目し、今、企業がどのような変貌を遂げつつあるのか、その変化に大学や大学生はどう対応すべきなのか、そのために必要な学びとは何かについて議論をおこなった。参加者数は、1日目が292名、2日目が239名であった。

* 大学生研究フォーラムは、特別経費「大学教員教育研修のための相互研修型FD拠点形成」を受けて、国内連携事業の一つとして運営された。

2. プログラムの特徴

1) 一日目のプログラム——大学生研究フォーラム

今年は、①基調講演、② Learningful Talk 1 (大学・大学生の今を知る)、③ Learningful Talk 2 (企業経営のフロンティアを知る)、④総括パネルディスカッションの構成でプログラムを実施した。各プログラムの概要、登壇者は下記のとおりである。

①基調講演

安西祐一郎 (独立行政法人 日本学術振興会 理事長)

「教育が日本をひらくグローバル世紀への提言」

② Learningful Talk(1) 「大学・大学生の今を知る」というセッションテーマのもと、3件報告をおこなった。

・溝上慎一 (京都大学 高等教育研究開発推進センター) 「大学生の学び、キャリア」

- ・佐藤博樹（東京大学大学院 情報学環）「大学生のインターンシップ、企業」
- ・松尾泰樹（文部科学省 高等教育局 学生・留学生課長）「大学生の留学」

③ **Learningful Talk(2)** 「企業経営のフロンティアを知る」というセッションテーマのもと、2件報告をおこなった。

- ・田中潤（株式会社ぐるなび 人事部門長兼総務部門長）「変わる採用」
- ・奈良崎修二（日産自動車株式会社 人事本部 副本部長）「変わる働き方・人材活用」

④ **ダイアログセッション** 午前中の基調講演、Learnigful Talk の報告を計5件聴いて、参加者同士でダイアログをおこなった。

⑤ **総括パネルディスカッション** 午前中の基調講演から、Learnigful Talk の計5件の報告を受けて、「学生のうちに経験させたいこと」という大テーマのもと、大学教育改革、キャリア教育の専門の識者に自由に討論してもらった。一日の振り返り、総括となることも目的とした。ディスカッサントには、以下の3氏を招聘した。

- ・吉見俊哉（東京大学 副学長／大学総合教育研究センター長）
- ・平田純一（立命館アジア太平洋大学 副学長）
- ・笹倉和幸（早稲田大学大学院 政治経済学術院／学生部長）

【司会】

大塚雄作（京都大学 高等教育研究開発推進センター長）

2）二日目のプログラム——「高校教諭のためのシンポジウム」

高校におけるキャリア教育をどのようにおこなえばよいか、どこまでやるべきか、どのように大学へ接続させるか、という問題が検討された。プログラムは、①2つの講演に②それぞれパネルディスカッション、③ダイアログセッション、④指定討論、⑤総括パネルディスカッション、の構成のもと実施された。

①講演

- ・井尻達也（京都市立堀川高等学校 教諭）
「変化への適応を通じたキャリア形成の軌跡ーJAXAでの経験をもとに高校のキャリア教育を考える」
- ・中濱秀徳（大阪府教育センター 教育課程開発部 主任指導主事）
「高校での学びを通じたキャリア意識の形成ー大阪府教育センター附属高校などの取り組み」

②パネルディスカッション

- ・溝上慎一（京都大学 高等教育研究開発推進センター）
- ・中原淳（東京大学 大学総合教育研究センター）
- ・井尻達也（京都市立堀川高等学校 教諭）
- ・中濱秀徳（大阪府教育センター 教育課程開発部 主任指導主事）

【司会】

- ・成田秀夫（河合塾 教育研究開発本部 開発研究職・講師）

③ダイアログセッション

④指定討論

- ・安彦忠彦（神奈川大学 特別招聘教授／中央教育審議会委員）

⑤総括パネルディスカッション

- ・安彦忠彦（神奈川大学 特別招聘教授／中央教育審議会委員）

- ・井尻達也（京都市立堀川高等学校 教諭）
 - ・中濱秀徳（大阪府教育センター 教育課程開発部 主任指導主事）
- 【司会】
- ・成田秀夫（河合塾 教育研究開発本部 開発研究職・講師）

3. 大学生研究フォーラム 2013・高校教諭のためのシンポジウムを振り返って

以下、2日間のなかで考えたことである。

・1日目の、社会に送り出す学校（大学・高校）の役割として何が大事かという問いに、立場の異なる識者から何度も出た言葉は、「多様性（さまざまな人、さまざまな状況）を経験する」「主体的に学ぶ」「目的やビジョンを持つ」であった。これら3つの観点は、大学教育のなかでは言い古されたものであるが、対課題、対他者、対自己・人生を通しての学生の主体・人格形成を、やはり多くの者が大事だと見ているということを、改めて理解した。今後は、大学教育でおこなわれているさまざまな実践が、これらの観点から見たときにどのように位置づくものなのかを、しっかり検討していかなければならないと思われた。

・2日目の議論のなかからは、とくに以下2点について多く考えさせられた。1つは、「キャリア教育をできるだけ使わないで、キャリア教育をやっている、としたい」という考え方についてである。キャリア教育と冠するか否かは、実はどうでもいいことだが、キャリア教育で提示している、たとえば①キャリアデザイン、②技能・態度（能力）、社会性のポイントをおさえた実践となっているのかは、しっかりアセスメントされなければならない。2つ目に、「高校生の中にどうしても目的・目標（将来の見通し）を見つけられない者がいる。大学に行ってから考えてもらうしかない」というフロアーからの先送りの意見である。たしかにそういう実態があることは承知しているが、高校生の時期に見つけられない者が大学に入ってからも見つけられない可能性が高い、というデータが蓄積されつつあるなかで、高校での先送り意識をどのように理解していけばいいかを、一度しっかり議論しなければならないと考えられた。

4. 付録資料

『大学生研究フォーラム 2013』のプログラム（web 上で公開）
(<http://www.dentsu-ikueikai.or.jp/forum/>)

（溝上 慎一）

研究フォーラム

大学生研究フォーラム2013



【公益財団法人 電通育英会設立50周年事業】

東京大学／京都大学／電通育英会共催

大学生研究フォーラム2013は満員の参加者をお迎えし、好評のうちに終了いたしました。
ご参加いただいた皆様、誠にありがとうございました。

来年度の「大学生研究フォーラム2014」(1日目)
および「高校教諭のためのシンポジウム」(2日目)は
下記の日程・会場で開催いたします。

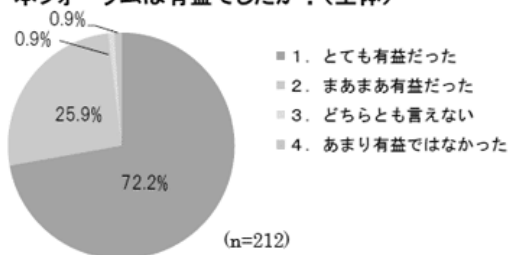
【日時】2014年7月27日(日)・28日(月)

【会場】京都大学 百周年記念ホール

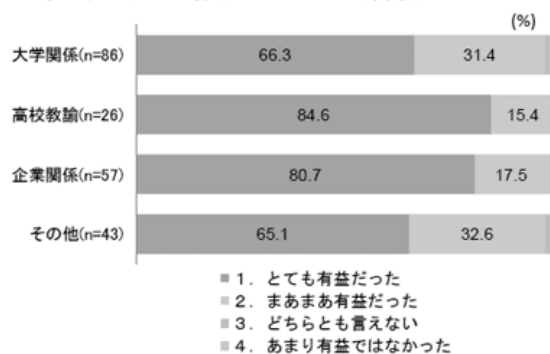
詳しいプログラムが決定次第、こちらのページで告知いたします。

大学生研究フォーラム2013は、
参加者の98%以上に「有益だった」とご評価いただきました。

本フォーラムは有益でしたか？(全体)

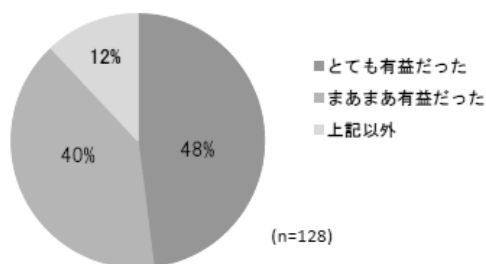


本フォーラムは有益でしたか？(所属別)



高校教諭のためのシンポジウム2013は、
参加者の88%に「有益だった」とご評価いただきました。

本シンポジウムは有益でしたか？



学生のうちに経験させたいこと—大学生の今、変わる企業

東京大学本郷キャンパス・伊藤謝恩ホールで開催

2008年の第1回開催から数えて6回目を迎える「大学生研究フォーラム2013」。初めての首都圏開催となる今回は、グローバル化が進み、政治・経済・生活が大きく変化していく中での企業の進化に注目。今、企業がどのような変貌を遂げつつあるのか、その変化に大学や大学生はどう対応すべきなのか、そのために必要な学びとは何かについて考えていきます。

大学生研究フォーラム2013
「学生のうちに経験させたいこと」
開催概要

<開催日>
2013年8月17日(土)
10:00～17:45(昼食付)

<会場>
東京大学本郷キャンパス・伊藤謝恩ホール
[>会場へのアクセスマップ](#)

■ 開催スケジュール

総合同会:
松下佳代(京都大学高等教育研究開発推進センター教授)

9:30 開場

10:00～
イントロダクション
中原淳(東京大学 大学総合教育研究センター)

10:30～11:30
基調講演
「教育が日本をひらく
グローバル世紀への提言」
安西祐一郎(独立行政法人 日本学術振興会 理

(併催) 高校教諭のためのシンポジウム
「高校生のうちに身につけさせたいこと」
開催概要

<開催日>
2013年8月18日(日)
10:00～17:30(昼食付)

<会場>
東京大学本郷キャンパス・伊藤謝恩ホール
[>会場へのアクセスマップ](#)

■ 開催スケジュール

9:15 開場

10:00～
イントロダクション
溝上慎一(京都大学 高等教育研究開発推進センター)

10:20～11:20
講演
「変化への適応を通じたキャリア形成の軌跡
—JAXAでの経験をもとに高校のキャリア教育を考える—」

IV-2. 資料1

事長)

11:45～

Learningful Lunch・主催者挨拶

吉見俊哉(東京大学 副学長／大学総合教育研究センター長)

大塚雄作(京都大学 高等教育研究開発推進センター長)

森隆一(公益財団法人 電通育英会 理事長)

13:00～14:15

Learningful Talk(1)

「大学・大学生の今を知る」

「大学生の学び、キャリア」

溝上慎一(京都大学 高等教育研究開発推進センター)

「大学生のインターンシップ、企業」

佐藤博樹(東京大学大学院 情報学環)

「大学生の留学」

松尾泰樹(文部科学省 高等教育局 学生・留学生課長)

【司会】

中原淳(東京大学 大学総合教育研究センター)

14:15～15:30

Learningful Talk(2)

「企業経営のフロンティアを知る」

「変わる採用」

田中潤(株式会社ぐるなび 人事部門長兼総務部門長)

「変わる働き方・人材活用」

奈良崎修二(日産自動車株式会社 人事本部 副本部長)

【司会】

中原淳(東京大学 大学総合教育研究センター)

15:50～16:30

ダイアログ・セッション

16:30～16:40

小括

中原淳(東京大学 大学総合教育研究センター)

16:40～17:30

総括パネルディスカッション

「学生のうちに経験させたいこと」

吉見俊哉(東京大学 副学長／大学総合教育研究センター長)

平田純一(立命館アジア太平洋大学 副学長)

笹倉和幸(早稲田大学大学院 政治経済学術院／学生部長)

【司会】

大塚雄作(京都大学 高等教育研究開発推進センター長)

17:30～17:45

閉会

溝上慎一(京都大学 高等教育研究開発推進センター)

井尻達也(京都市立堀川高等学校 教諭)

11:20～12:00

パネルディスカッション(1)

溝上慎一(京都大学 高等教育研究開発推進センター)

中原淳(東京大学 大学総合教育研究センター)

井尻達也(京都市立堀川高等学校 教諭)

【司会】

成田秀夫(河合塾 教育研究開発本部 開発研究職・講師)

12:00～13:20

ランチョンセミナー

13:20～14:20

講演

「高校での学びを通じたキャリア意識の形成
—大阪府教育センター附属高校などの取り組み」

中濱秀徳(大阪府教育センター 教育課程開発部主任指導主事)

14:20～15:00

パネルディスカッション(2)

溝上慎一(京都大学 高等教育研究開発推進センター)

中原淳(東京大学 大学総合教育研究センター)

井尻達也(京都市立堀川高等学校 教諭)

中濱秀徳(大阪府教育センター 教育課程開発部主任指導主事)

【司会】

成田秀夫(河合塾 教育研究開発本部 開発研究職・講師)

15:20～15:50

ダイアログ・セッション

16:00～16:30

指定討論

安彦忠彦(神奈川大学 特別招聘教授／中央教育審議会委員)

16:30～17:15

総括パネルディスカッション

安彦忠彦(神奈川大学 特別招聘教授／中央教育審議会委員)

井尻達也(京都市立堀川高等学校 教諭)

中濱秀徳(大阪府教育センター 教育課程開発部主任指導主事)

【司会】

成田秀夫(河合塾 教育研究開発本部 開発研究職・講師)

17:15～17:30

総括と次年度に向けて一閉会

溝上慎一(京都大学 高等教育研究開発推進センター)

■ 大学生研究フォーラム 登壇者のプロフィール



安西 祐一郎（あんざい ゆういちろう）氏
独立行政法人 日本学術振興会 理事長

1974年慶應義塾大学大学院工学研究科博士課程修了。専門は認知科学・情報科学。カーネギーメロン大学客員助教授、慶應義塾大学理工学部教授を経て、93年同学部長、01～09年慶應義塾大学塾長。



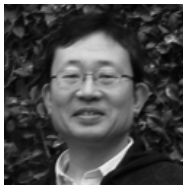
佐藤 博樹（さとう ひろき）氏
東京大学大学院 情報学環 教授

1953年東京生まれ。81年一橋大学大学院社会学研究科博士課程単位取得退学。雇用職業総合研究所、法政大学経営学部教授を経て、96年東京大学社会科学研究所教授。11年より現職。



松尾 泰樹（まつお ひろき）氏
文部科学省 高等教育局 学生・留学生課長

1962年生まれ。87年東京大学大学院理学系研究科修士課程修了。同年、旧・科学技術庁入庁。外務省経済局、在中国・日本大使館一等書記官を経て、文部科学省人事担当企画官、理化学研究所横浜研究推進部長を経て、10年より現職。



田中 潤（たなか じゅん）氏
株式会社ぐるなび 執行役員／管理本部人事部門長 兼 総務部門長

1985年日清製粉(株)入社。業務用小麦粉営業、人事等を経験後、09年に(株)ぐるなびに転職。経営学習研究所理事、にっぽんお好み焼き協会理事等もつとめ、人と食の分野に幅広い関心を持つ。



奈良崎 修二（ならさき しゅうじ）氏
日産自動車株式会社 人事本部 副本部長

1980年入社、人事部門、生産管理部門、新工場建設プロジェクトなどに従事。その後経営企画室でルノー社とのアライアンス事業などを担当、エグゼクティブ・キャリアコーチを経て12年より現職。



吉見 俊哉（よしみ しゅんや）氏
東京大学 副学長／大学総合教育研究センター長／教授

1957年東京生まれ 東京大学教養学部卒。04年、同大学院情報学環教授。06年、同学環長。10年より現職、教育企画室長。専攻は社会学、メディア論、文化研究。



平田 純一（ひらた じゅんいち）氏
立命館アジア太平洋大学 副学長／教授

1950年生まれ。75年ニューヨーク州立大学バッファロー校大学院経済学研究科修了。立命館大学経済学部教授を経て、10年より立命館アジア太平洋大学国際経営学部教授、副学長。



笹倉 和幸(ささくら かずゆき)氏
早稲田大学 政治経済学術院教授／学生部長

1959年生まれ。早稲田大学政治経済学部卒。日本鋼管(現JFE)勤務、福岡大学経済学部助教授等を経て、現職。10年より、早稲田大学学生部長・キャリアセンター長。



大塚 雄作(おおつか ゆうさく)氏
京都大学 高等教育研究開発推進センター長／教授

東京大学理学部・教育学部卒、東京大学大学院教育学研究科博士課程単位取得退学。00年大学評価・学位授与機構教授を経て、04年京都大学高等教育研究開発推進センター教授。12年より現職。

■ 高校教諭のためのシンポジウム 登壇者のプロフィール



井尻 達也(いじり たつや)氏
京都市立堀川高等学校 数学科教諭

大学では宇宙工学を専攻し、ロケットを研究。JAXAでは「きぼう」の通信システムの開発に携わり、打ち上げ成功に貢献。自身の体験を高校生に伝えたいという思いから教員に転身、現在に至る。



中濱 秀徳(なかはま ひでのり)氏
大阪府教育センター 教育課程開発部 カリキュラム研究室 主任指導主事

高校現場等を経て現職。キャリア教育指導者養成研修を担当したことをきっかけに、キャリア教育に関する知識を深めていく。様々なタイプの学校現場に、キャリア教育をどのようなかたちで根付かせるかを、現在の課題にしている。



安彦 忠彦(あびこ ただひこ)氏
神奈川大学 特別招聘教授／中央教育審議会委員

1964年東京大学教育学部卒業。同大学院博士課程退学後、大阪大学、愛知教育大学、名古屋大学、早稲田大学を経て、12年より現職。05年から中央教育審議会委員。専門はカリキュラム論を中心に教育方法・教育評価。



溝上 慎一(みぞかみ しんいち)氏
京都大学 高等教育研究開発推進センター 准教授

1994年神戸大学教育学部卒業。京都大学博士(教育学)。96年京都大学高等教育教授システム開発センター助手、03年より現職。自己形成論、青年心理学、学生の学びと成長を中心としたFDと大学生研究を行っている。



中原 淳(なかはら じゅん)氏
東京大学大学総合教育研究センター 准教授

東京大学教育学部、大阪大学大学院を経て、文部科学省メディア教育開発センター助手、マサチューセッツ工科大学客員研究員、06年より現職。専門は経営学習論。「大人の学びを科学する」をキーワードに、高等教育・企業人材育成等を研究。



成田 秀夫(なりた ひでお)氏
学校法人河合塾 教育研究開発本部 開発研究職・講師

河合塾現代文講師の傍ら、大学生向けの「日本語表現講座」や発想法、構成法を生かした「レポート作成・プレゼン講座」を開発し、大学でも教鞭をとっている。07年より経済産業省の提唱する「社会人基礎力」の育成と評価手法の研究開発に携わる。

■ 大学生研究フォーラム2013
お問い合わせ先

(公財)電通育英会 事務局
〒104-0061 東京都中央区銀座7-4-17
電通銀座ビル4F
TEL:03-3575-1386
info@dentsu-ikueikai.or.jp

■ 高校教諭のためのシンポジウム
お問い合わせ先

(公財)電通育英会 事務局
〒104-0061 東京都中央区銀座7-4-17
電通銀座ビル4F
TEL:03-3575-1386
info@dentsu-ikueikai.or.jp

Copyright © 1963-2007 Dentsu Ikueikai. All rights reserved.

IV-3. 大学教育研究フォーラム

1. 概要

大学教育研究フォーラムは、京都大学高等教育研究開発推進センターが1994年度より年1回開催してきたものである。今年で20回目を迎える（2014年3月18日・19日開催予定）。毎年500～600名の大学教職員関係者が参加する、全国的にも広く認知された大学教育に関する研究・実践交流の場である。

同フォーラムは、FD（ファカルティ・ディベロップメント）や教授法・カリキュラム・教育評価・E-learning / 遠隔教育 / 大学生 / 大学生活といった諸領域における、学内・学外の大学教育関連の最先端の実践知をあまねく集積する場として開催するものである。最近の趨勢をふまえた最先端の知見は、学内外の教育改善推進に大きく貢献すると考えられている。

これまで、外部予算や学内からの助成等の支援を受けて運営がなされてきた大学教育研究フォーラムであったが、残念ながらそうした支援を受けにくい状況に至っている。昨年以案内をしたように、今年のフォーラムから、下記のとおりで参加費を徴収することとした。

一般 5,000 円

関西 FD 連絡協議会会員校の関係者 4,000 円

学生（大学院生・大学生等学生身分を提示できる者） 3,000 円

京都大学教職員等関係者 3,000 円

大学教育研究フォーラムは、特別経費「大学教員教育研修のための相互研修型FD拠点形成」を受けて、国内連携事業の一つとして、また、学校法人河合塾教育研究開発本部、関西地区FD連絡協議会の協賛を得て、運営された。

2. プログラムの特徴

第20回大学教育研究フォーラムは、①シンポジウム、②小講演、③参加者企画セッション、④個人研究発表から構成され実施される。プログラムの構成については、とくに大きな変更点はない。

以下は、各プログラムの特徴、ならびに本年度の具体的プログラムである。

①シンポジウム「学生の学びをどうデータ化し、どう利用するか」

趣旨 学生が大学で何をどう学んでいるかは、今日、大学教育における最大の関心事の一つです。学生の学びを把握するために、個々の教員は、授業中のやりとりや宿題・小テスト、学期末の評価課題を用います。また、大学全体としても、Learning Management System (LMS) を活用したり、学生調査や卒業生調査を実施したりしています。近年では、ポートフォリオを使って、学生自身に自分の学びの履歴を作らせる大学も増えてきました。

学生の学びをデータ化することは、学生の学修成果の測定・評価のためだけでなく、授業・カリキュラム・教育環境などの改善や、説明責任の遂行、内部質保証のためにも不可欠になってきています。最近では、Institutional Research (IR) や Learning Analytics など、学生の

学びのデータ化と利用を組織的にこなうための手法にも注目が集まっています。

そんななか、本シンポジウムでは、学生の学びをじかに感じとることのできる位置にいる教員たちが、自分の教育活動において学生の学びをどうデータ化し、どう利用しているかに焦点をあてます。学生の学びは、学問分野によって大きく様相が異なります。そこで、今回は、歯学、工学、ケミカルバイオロジー、英語教育の分野からパネリストをお招きして、各分野での学びのデータ化・利用について報告していただくことにしました。分野ごとの固有性と分野をこえた共通性を浮かび上がらせていきたいと思います。

- 報告者 1 小野和宏（新潟大学歯学部教授 / 副学部長）
報告者 2 久保猛志（金沢工業大学副学長 / 教育点検評価支援担当）
報告者 3 上杉志成（京都大学物質-細胞統合システム拠点教授 / 副拠点長）
報告者 4 岡田圭子（獨協大学経済学部教授 / 全カリ英語部門担当 / GP 事業推進責任者）
指定討論者 秋山卓也（文部科学省高等教育局高等教育企画課高等教育政策室室長補佐 / 大学評価専門官）
司 会 松下佳代（京都大学高等教育研究開発推進センター教授）

②小講演 各論的に、具体的なトピックを8つ取り上げ、最先端の知見を提供する。本年度は下記のテーマで講演者に依頼をおこなっている。

- ・平田純一（立命館大学経済学部教授 / 立命館副総長）
「大学の役割と環境変化—大学教育のグローバル化と学生への動機づけ—」
- ・村上隆（中京大学現代社会学部教授）
「中堅私大の一教員は、学生に何を渡すことができるのか？—小さな実践報告と前提となる入試学力—」
- ・伊勢田哲治（京都大学大学院文学研究科准教授）
「批判的に考えるのは本当によいことか—哲学的クリティカル・シンキング教育からの視点—」
- ・飯吉透（京都大学高等教育研究開発推進センター教授）
酒井博之（京都大学高等教育研究開発推進センター准教授）
「百倍返しの教育イノベーション—大学教育コモンズと MOST 教員コミュニティの構築—」
- ・鈴木克明（熊本大学大学院社会文化科学研究科教授システム学専攻教授・専攻長）
「インストラクショナルデザインからみた大学教育—鳥瞰図からサンドイッチモデルへ—」
- ・阿部光伸（愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室講師）
「SD の新たなステージ「SDC（Staff Development Coordinator）養成プログラムの展開」—スタッフ・ポートフォリオの活用を視点に—」
- ・藤本夕衣（東京大学大学総合教育研究センター特任研究員）
「「大きな問い」を失った大学—「授業デザイン」の陥穽—」
- ・白水始（文部科学省国立教育政策研究所 初等中等教育研究部 / 教育研究情報センター総括研究官）
村中崇信（中京大学工学部電気電子工学科准教授）
「大学教育改革の成功の鍵を探る—ジグソー授業実践の 10 年の蓄積から—」

③参加者企画セッション ある特定のテーマでの研究・実践交流を促す目的で、一般参加者から募集するセッションである。本年度では「学生とともに進めるFD」「Learning Analytics(LA)を教育にどう利用するか」「ティーチング・ポートフォリオの効果検証」など8件の応募があった。

④個人研究発表 「FD・授業公開」「教育評価」「カリキュラム」「授業研究」「教育評価」「e-Learning・遠隔教育」「大学生・大学生活」の研究部会を用意し、大学教育実践研究の交流の場としている。本年度は92件の応募があった。2010年度の申し込みが72件、2011年度の申し込みが77件、2012年度の申し込みは96件であったから、昨年状況を維持していると言える。参加費を徴収することの影響は見られなかったと考えられる。

3. 付録資料

資料1 『第20回大学教育研究フォーラム プログラム』(web上で公開)
(http://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/forum/2013/program_2013.pdf)

(溝上 慎一)

第20回 大学教育研究フォーラム プログラム

2014.3.18TUE・**19**WED

会場：京都大学

【個人研究発表・参加者企画セッション】：1号館／総合館（吉田南構内）

【小講演】：総合館（吉田南構内）

【シンポジウム】：百周年時計台記念館・1F百周年記念ホール（本部構内）

【情報交換会】：百周年時計台記念館・2F国際交流ホール（本部構内）

主催：京都大学高等教育研究開発推進センター
（相互研修型FD共同利用拠点）

協賛：学校法人河合塾 教育研究開発本部
関西地区FD連絡協議会

※本プログラムは下記 Web 上で、PDF 版を公開しています。
<http://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/>

第20回大学教育研究フォーラム

◆日 程 2014年3月18日(火)～19日(水)

◆会 場 京都大学 吉田キャンパス

【個人研究発表・参加者企画セッション】 1号館／総合館（吉田南構内）

【小講演】 総合館（吉田南構内）

【シンポジウム】 百周年時計台記念館・1F百周年記念ホール（本部構内）

【情報交換会】 百周年時計台記念館・2F国際交流ホール（本部構内）

3月18日(火)

受 付 8:15～11:00 ……【1号館 共106】
12:30～13:00 ……【百周年時計台記念館・1F百周年記念ホール】

個人研究発表(1) 9:00～10:45 ……【1号館／総合館】

9:00～9:20 個人発表①

9:20～9:40 個人発表② *1人あたりの時間20分

9:40～10:00 個人発表③ (発表時間15分＋質疑応答3分＋2分交代)

10:00～10:20 個人発表④

10:20～10:45 全体討論

小 講 演(1) 11:00～12:00 ……【総合館】

シンポジウム 13:00～17:15 ……【百周年時計台記念館・1F百周年記念ホール】

開会の挨拶 13:00～13:10

松本 紘（京都大学総長）

シンポジウム 13:10～17:15

「学生の学びをどうデータ化し、どう利用するか？」

報告者1 小野和宏（新潟大学歯学部教授／副学部長）

報告者2 久保猛志（金沢工業大学副学長／教育点検評価支援担当）

報告者3 上杉志成（京都大学物質－細胞統合システム拠点教授／副拠点長）

報告者4 岡田圭子（獨協大学経済学部教授／全カリ英語部門担当／GP事業推進責任者）

指定討論者 秋山卓也（文部科学省高等教育局高等教育企画課高等教育政策室室長補佐／
大学評価専門官）

司 会 松下佳代（京都大学高等教育研究開発推進センター教授）

情報交換会 17:30～19:30 ……【百周年時計台記念館・2F国際交流ホール】

3月19日(水)

受付 8:30~13:30【1号館 共106】

個人研究発表(2) 9:00~10:45【1号館／総合館】

9:00~ 9:20 個人発表①

9:20~ 9:40 個人発表② *1人あたりの時間20分

9:40~10:00 個人発表③ (発表時間15分+質疑応答3分+2分交代)

10:00~10:20 個人発表④

10:20~10:45 全体討論

小講演(2) 11:00~12:00【総合館】

参加者企画セッション 13:30~16:00【1号館／総合館】

3月18日(火)

第1日

個人研究発表(1) 9:00~10:45

A-1. 教育評価研究部会

座長：高橋哲也……………【会場：1号館 1共31】

大学教職員を対象としたIRのプログラム開発に関する研究

ーリサーチ・クエスションの導き方に焦点をあてー

川那部隆司(立命館大学)・鳥居朋子(立命館大学)・石本雄真(立命館大学)

河井亨(立命館大学)

大学連携による教学IRのすゝめーFレックスにおける学生意識調査の分析ー

田中洋一(仁愛女子短期大学)・入澤学(株式会社システムグラフィ)・山川修(福井県立大学)

大阪府立大学のIRの取り組み1ーeポートフォリオデータの活用ー

星野聡孝(大阪府立大学)・新井隆景(大阪府立大学)・深野政之(大阪府立大学)

大阪府立大学のIRの取り組み2ー学生調査と教務データの活用ー

高橋哲也(大阪府立大学)・深野政之(大阪府立大学)・溝上慎一(京都大学)

B-1. カリキュラム研究部会

座長：小川勤……………【会場：総合館 共北25】

大学英語教育における学習評価基準設定に向けたTOEFL-ITPの導入

金丸敏幸(京都大学)・前野悦輝(京都大学)・長田哲也(京都大学)・鈴木あるの(京都大学)

國府寛司(京都大学)・田地野彰(京都大学)

教員養成課程に新しく設置した科学技術教育コースについて

蒲生啓司(高知大学)・道法浩孝(高知大学)

学習支援における学習成果の可能性

ー米国の学習助言(アカデミック・アドバイジング)の事例からー

清水栄子(愛媛大学)

新しい共通教育導入後の成果と課題

小川勤(山口大学)・糸長雅之(山口大学)

3月18日(火)

B-2. カリキュラム研究部会座長：筒井洋一 …………… 【会場：1号館 1共33】

女子大学ビジネス系学部における金融経済教育

水野英雄（梶山女学園大学）

安寧の都市ユニットにおける教育プログラムについて－対話と実践に基づく教育－

小山真紀（京都大学）・安東直紀（京都大学）・山田圭二郎（京都大学）・三谷智子（京都大学）

孔相権（京都大学）・今村行雄（京都大学）・村上由希（京都大学）・土井勉（京都大学）

野本慎一（京都大学）・谷口栄一（京都大学）

グローバル化社会を生きる力を育てるリベラルアーツ科目の試み

－学生のふり返りに対する教師のフィードバックに着目して－

三輪充子（元川村学園女子大学）・佐藤真紀（お茶の水女子大学）・鈴木寿子（早稲田大学）

トンプソン美恵子（東京海洋大学）・野々口ちとせ（大阪大学）・半原芳子（福井大学）

房賢嬉（お茶の水女子大学）・岡崎眸（お茶の水女子大学）

モジュール型カリキュラムとチームビルディングによる学習者の動機づけ

筒井洋一（京都精華大学）

C-1. 授業研究部会座長：中西良文 …………… 【会場：総合館 共北26】

茨城大学におけるPBL授業の導入と「プロジェクト実習」の展開について

鈴木敦（茨城大学）

初年次日本語表現科目におけるレポート作成と並行した表記・表現レベルの指導法とその効果

大場理恵子（東京海洋大学）・石井一成（東京海洋大学）・大島弥生（東京海洋大学）

トンプソン美恵子（東京海洋大学）・池田玲子（東京海洋大学）

医療系大学でのグループワークによる初年次教育の試み

平川要（九州歯科大学）・福泉隆喜（九州歯科大学）・吉野賢一（九州歯科大学）

中原孝洋（九州歯科大学）

プロジェクト活動を中心とした初年次教育科目受講による社会的動機づけの変化

中西良文（三重大大学）・下村智子（三重大大学）・守山紗弥加（三重大大学）・益川優子（三重大大学）

大道一弘（三重大大学）・中島誠（三重大大学）

C-2. 授業研究部会座長：北垣郁雄 …………… 【会場：1号館 1共32】

語りにみる先輩後輩関係における学びの可能性

山田嘉徳（関西大学）

学習発達段階を考慮した英語文法事項配列の検討

佐藤恭子（追手門学院大学）

震災復興に係る大学授業の事例分析－「白熱教室」を通して－

北垣郁雄

3月18日(火)

C-3. 授業研究部会

座長：村上祐子 …… 【会場：1号館 1共24LL】

経営学諸理論の専門ゼミ活動への応用ービジネスの視点から学生の自主性を伸ばす試みー

加藤恭子（高崎商科大学）

講義受講生による授業エスノグラフィの試み

増田匡裕（高知大学）

囲碁を利用した論理学授業

村上祐子（東北大学）

C-4. 授業研究部会

座長：内村浩 …… 【会場：総合館 共北27】

大人数授業でのアクティブラーニングにおける持続的な授業改善とその評価

尾澤重知（早稲田大学）・森裕生（早稲田大学）・江木啓訓（神戸大学）

日本版 PBL (Project Based Learning) の構築および実践

ー主体性とコミュニケーションスキルを伸ばすー

天野一哉（星槎大学）

グローバル化に対応できる、アクティブラーニングを導入した国際関係論の授業計画と実践法

清水亮（同志社大学）

教員養成におけるアクティブ・ラーニング型授業ー学習観と指導観がどう変容したか？ー

内村浩（京都工芸繊維大学）

C-5. 授業研究部会

座長：谷口進一 …… 【会場：1号館 1共25LL】

Phrase Reading Worksheet を利用した英語授業の設計

神谷健一（大阪工業大学）

先行研究のレビューを通じたゼミナールならではの学びに関する考察

伏木田稚子（東京大学）

数理系科目におけるクリティカルシンキングの活用と評価

谷口進一（金沢工業大学）・西誠（金沢工業大学）・山岡英孝（金沢工業大学）

D-1. FD・授業公開研究部会

座長：服部憲児 …… 【会場：総合館 共北28】

対話デザインを多角的に可視化する DVD 制作

ー多人数の対話を有機的につなぐ授業システム運用のためのビデオ教材ー

牧野由香里（関西大学）・関西大学総合情報学部牧野ゼミ（関西大学）

「理工系の講義形式授業の中で学生を輝かせるひと工夫」WS プログラム開発について

榊原暢久（芝浦工業大学）・吉田博（徳島大学）

FD の場としての学生・教職員交流型イベントの可能性

ー大阪大学における「ひとこといちば」の取り組みー

服部憲児（京都大学）

3月18日(火)

D-2. FD・授業公開研究部会

座長：稲葉利江子 …… 【会場：総合館 共北38】

保育者養成におけるリメディアル教育の取り組み事例

竹安知枝（神戸海星女子学院大学）・浅井由美（神戸海星女子学院大学）

中田尚美（神戸海星女子学院大学）・尾崎秀夫（神戸海星女子学院大学）

樋口勝一（追手門学院大学）

「対話」と「学び」に対する課題の整理

牧恵子（愛知東邦大学）

大学教員のためのFD手帳－期待できる効果と使用者の評価の考察－

村上裕美（関西外国語大学短期大学部）

コースポートフォリオを用いた授業コンテンツ共有の取り組み

稲葉利江子（津田塾大学）

F-1. 大学生・大学生生活研究部会

座長：坂井敬子 …… 【会場：総合館 共北31】

学生のソーシャルスキル向上を目指したコミュニケーション・サポート・セミナーの試み

濱田里羽（金沢大学）

Three-Year-Compromise 折り合いの3年－Compromise 折り合いは、和という日本文化の原点に遡る－

菅野憲司（千葉大学）

学生と図書館職員が運営する学修支援活動の取り組み

吉田博（徳島大学）・佐々木奈三江（徳島大学）・亀岡由佳（徳島大学）

学生インターンシップ実施／非実施企業の特徴の検討－静岡県内企業へのアンケート調査から－

坂井敬子（静岡大学）・佐藤龍子（静岡大学）・宇賀田栄次（静岡大学）・須藤智（静岡大学）

酒井徹也（静岡大学）・中村美智太郎（静岡大学）

F-2. 大学生・大学生生活研究部会

座長：勝又あずさ …… 【会場：総合館 共北32】

グループワーク中心のキャリア教育を通じた学生支援の試み

後藤綾文（三重大学）

大学生生活でジェネリックスキルを獲得するための初年次キャリア教育の事例

平野恵子（文化放送キャリアパートナーズ就職情報研究所）

教員・職員・キャリアカウンセラーの連携によるキャリア形成プログラムの効果の検討

高橋南海子（明海大学）・東香織（明海大学）・市川雅也（明海大学）・大黒章子（明海大学）

キャリアデザイン科目（PBL）におけるキャリア観の醸成

－諸先輩をモデルにキャリア史の作成を通して－

勝又あずさ（成城大学）

3月18日(火)

小講演(1) 11:00~12:00

大学の役割と環境変化

ー大学教育のグローバル化と学生への動機づけー ……………【会場：総合館 共北27】

平田 純一（立命館大学経済学部教授／立命館副総長）

【司会】溝上 慎一（京都大学高等教育研究開発推進センター准教授）

中堅私大の一教員は、学生に何を渡すことができるのか？

ー小さな実践報告と前提となる入試学力ー ……………【会場：総合館 共北28】

村上 隆（中京大学現代社会学部教授）

【司会】大塚 雄作（京都大学高等教育研究開発推進センター教授／センター長）

批判的に考えるのは本当によいことか

ー哲学的クリティカル・シンキング教育からの視点ー ……………【会場：総合館 共北31】

伊勢田 哲治（京都大学大学院文学研究科准教授）

【司会】田口 真奈（京都大学高等教育研究開発推進センター准教授）

百倍返しの教育イノベーション

ー大学教育コモンズとMOST教員コミュニティの構築ー ……………【会場：総合館 共北32】

飯吉 透（京都大学高等教育研究開発推進センター教授）

酒井 博之（京都大学高等教育研究開発推進センター准教授）

【司会】酒井 博之（京都大学高等教育研究開発推進センター准教授）

3月18日(火)

シンポジウム 13:00~17:15

会 場 百周年時計台記念館・1F 百周年記念ホール

開会の挨拶 13:00~13:10

松本 紘(京都大学総長)

シンポジウム 13:10~17:15

「学生の学びをどうデータ化し、どう利用するか？」

趣 旨

学生が大学で何をどう学んでいるかは、今日、大学教育における最大の関心事の一つです。学生の学びを把握するために、個々の教員は、授業中のやりとりや宿題・小テスト、学期末の評価課題を用います。また、大学全体としても、Learning Management System (LMS) を活用したり、学生調査や卒業生調査を実施したりしています。近年では、ポートフォリオを使って、学生自身に自分の学びの履歴を作らせる大学も増えてきました。

学生の学びをデータ化することは、学生の学修成果の測定・評価のためだけでなく、授業・カリキュラム・教育環境などの改善や、説明責任の遂行、内部質保証のためにも不可欠になってきています。最近では、Institutional Research (IR) や Learning Analytics など、学生の学びのデータ化と利用を組織的に行うための手法にも注目が集まっています。

そんななか、本シンポジウムでは、学生の学びをじかに感じとることのできる位置にいる教員たちが、自分の教育活動において学生の学びをどうデータ化し、どう利用しているかに焦点をあてます。学生の学びは、学問分野によって大きく様相が異なります。そこで、今回は、歯学、工学、ケミカルバイオロジー、英語教育の分野からパネリストをお招きして、各分野での学びのデータ化・利用について報告していただくことにしました。分野ごとの固有性と分野をこえた共通性を浮かび上がらせていきたいと思っています。

- 報告者1 小野和宏(新潟大学歯学部教授/副学部長)
 報告者2 久保猛志(金沢工業大学副学長/教育点検評価支援担当)
 報告者3 上杉志成(京都大学物質-細胞統合システム拠点教授/副拠点長)
 報告者4 岡田圭子(獨協大学経済学部教授/全カリ英語部門担当/GP事業推進責任者)
 指定討論者 秋山卓也(文部科学省高等教育局高等教育企画課高等教育政策室室長補佐/大学評価専門官)
 司 会 松下佳代(京都大学高等教育研究開発推進センター教授)

3月19日(水)

第2日

個人研究発表(2) 9:00~10:45

A-2. 教育評価研究部会

座長：山田剛史 ……………【会場：1号館 1共31】

理工系人材に求められるグローバル・コンピテンシーに関する考察

宮浦崇(九州工業大学)・水井万里子(九州工業大学)

思考と実践をつなぐパフォーマンス評価－「考える OSCE-R」における学生の学び－

平山朋子(藍野大学)・松下佳代(京都大学)・西村敦(藍野大学)・堀寛史(藍野大学)

汎用的技能としてのクリティカルシンキング測定方法の検討

久保田祐歌(愛知教育大学)

理工系分野における研究室教育の形態と汎用的能力との関連

山田剛史(愛媛大学)・大竹奈津子(愛媛大学)・清水栄子(愛媛大学)・津曲陽子(愛媛大学)

A-3. 教育評価研究部会

座長：倉茂好匡 ……………【会場：1号館 1共24LL】

大学における職員評価の現状－アンケート調査分析を踏まえて－

岩崎保道(高知大学)

ペア学習における交流活動アセスメントツール作成の試み(1)

森田慶子(大分県立看護科学大学)・吉村匠平(大分県立看護科学大学)

ペア学習における交流活動アセスメントツール作成の試み(2)

吉村匠平(大分県立看護科学大学)・森田慶子(大分県立看護科学大学)

環境フィールドワーク科目での Saai-MAS を用いた授業評価アンケートの導入

倉茂好匡(滋賀県立大学)

B-3. カリキュラム研究部会

座長：長田尚子 ……………【会場：総合館 共北31】

リーディング大学院プログラム「グローバル生存学」におけるeポートフォリオの開発と実装

平岡齊士(京都大学)・堀智晴(京都大学)・西真如(京都大学)・浅野泰仁(京都大学)

フローランス・ラウルナ(京都大学)・塩谷雅人(京都大学)・高野義孝(京都大学)

橋口浩之(京都大学)・平原和朗(京都大学)・余田成男(京都大学)・寶馨(京都大学)

「学生の力」を活用した学習支援組織の運営

－SLA(Student Learning Adviser)の採用・育成に焦点を当てて－

鈴木学(東北大学)・足立佳菜(東北大学)

学習者目線から捉えた初年次英語授業とカリキュラムのリ・デザイン化－実態調査からの示唆と挑戦－

金岡正夫(鹿児島大学)・横山千晶(慶應義塾大学)・渡辺敦子(国際基督教大学)

樋口晶彦(鹿児島大学)

カリキュラム評価における「卒業生インタビュー」の意義

－卒業生の初期キャリア形成とカリキュラムの継続的改善に向けた探索的研究－

長田尚子(清泉女学院短期大学)・武田るい子(清泉女学院短期大学)

村田信行(清泉女学院短期大学)・森田泰暢(清泉女学院短期大学)

3月19日(水)

C-6. 授業研究部会座長：木野茂 …………… 【会場：総合館 共北25】

協調学習の利点と課題－英語論文執筆の授業実践を通して－

加藤由崇（京都大学）

Project-Based Learning の学習過程とその成果－Student Report からの分析－

吉田文子（佐久大学）・柿澤美奈子（佐久大学）・宮原香里（佐久大学）

大学教育における知識構成型ジグソー法の実践－教職専門科目「社会科の指導法」を通して－

三浦和美（東北福祉大学）・渡部信一（東北大学）

大規模授業で主体的な学びは可能か－400人規模でグループ学習をした学生の振り返りから－

田中翔（立命館大学）・木野茂（立命館大学）

C-7. 授業研究部会座長：深野政之 …………… 【会場：総合館 共北38】

初年次ライティング科目における自己点検・相互点検・教師添削の諸相

トンプソン美恵子（東京海洋大学）・大島弥生（東京海洋大学）・石井一成（東京海洋大学）

大場理恵子（東京海洋大学）・池田玲子（東京海洋大学）

文章表現教育の可能性－自己省察としての文章表現を事例として－

谷美奈（帝塚山大学）

入学時の状態が初年次教育科目の成果に及ぼす影響

中島誠（三重大学）・中西良文（三重大学）・大道一弘（三重大学）・益川優子（三重大学）

守山紗弥加（三重大学）・下村智子（三重大学）

大阪府立大学における初年次ゼミナールの実践と評価

深野政之（大阪府立大学）・谷口栄一（大阪府立大学）・山口義久（大阪府立大学）

C-8. 授業研究部会座長：坂田信裕 …………… 【会場：1号館 1共25LL】

英語リーディング授業におけるアウトプット活動の充実に向けて

－iPad を利用した要約活動を中心として－

細越響子（京都大学）・高橋幸（京都大学）

言語学を専門としない語学教員が学んでおくべき言語学

渡辺暁（山梨大学）

大学院大学短期集中講義（輪講）における「学修」の推進

駒井章治（奈良先端科学技術大学院大学）

情報リテラシー教育における授業デザイン改善への取り組み

坂田信裕（獨協医科大学）・山下真幸（獨協医科大学）・上西秀和（獨協医科大学）

3月19日(水)

C-9. 授業研究部会

座長：杉田由仁……………【会場：1号館 1共32】

日本におけるサイエンスコミュニケーション活動事例の分類と課題の考察

ー学生の社会参加という観点からー

長沼祥太郎（京都大学）・松下佳代（京都大学）

ワークフロー分析を用いた「e シラバス」構築モデルの実装とデータ利活用の考察

池田瑞穂（関西学院大学）

教職に関する科目「教育方法論」を履修した学習者のエミクな視点からの「意義ある学び」の質的分析

三津村正和（創価大学）・関田一彦（創価大学）

学生授業評価における「到達目標達成度」関連要因の分析

杉田由仁（山梨県立大学）・流石ゆり子（山梨県立大学）・小林美雪（山梨県立大学）

須田由紀（山梨県立大学）・山本奈央（山梨県立大学）・中橋淳子（山梨県立大学）

C-10. 授業研究部会

座長：長谷川元洋……………【会場：総合館 共北26】

TBL（チーム基盤型学習）の方略をアレンジした授業「プレゼンテーション」の学修成果と課題

中越元子（いわき明星大学）・野原幸男（いわき明星大学）・林正彦（いわき明星大学）

小佐野磨子（いわき明星大学）・永田隆之（いわき明星大学）・川口基一郎（いわき明星大学）

教員養成型 PBL 教育の課題と展望（X）

ー特別支援教育教員養成における対話的事例シナリオの開発ー

赤木和重（神戸大学）・山田康彦（三重大学）・森脇健夫（三重大学）・根津知佳子（三重大学）

中西康雅（三重大学）・守山紗弥加（三重大学）・前原裕樹（立命館大学）

クリッカーを活用した自学型学習の構築の試み

畔田博文（富山高等専門学校）

PBL・アクションラーニングによるリーダーシップ育成の実践

長谷川元洋（金城学院大学）・時岡新（金城学院大学）・中村岳穂（金城学院大学）

齋藤民徒（金城学院大学）・牛田博英（金城学院大学）・工藤多恵（金城学院大学）

岩崎公弥子（金城学院大学）

D-3. FD・授業公開研究部会

座長：井上史子……………【会場：総合館 共北27】

FD 実質化に必要な新たな視座ーFD における学生関与の現状ー

山本堅一（追手門学院大学）・吉田博（徳島大学）・服部憲児（京都大学）

教職課程担当教員養成プログラムのめざすものーブレFD プログラムとしての独自性と課題ー

境愛一郎（広島大学）・山口裕毅（広島大学）・張磊（広島大学）・久恒拓也（広島大学）

大学院のFDー一筋の光明ー

吉田雅章（和歌山大学）

学びあう集団・組織の構築ー学生の能動的関与が促す組織的FDー

井上史子（帝京大学）・土持ゲーリー法一（帝京大学）・沖裕貴（立命館大学）

3月19日(水)

D-4. FD・授業公開研究部会**座長：栗田佳代子 …… 【会場：総合館 共北28】**

理科大好き実験教室 2013

川村康文（東京理科大学）

教職課程担当教員養成プログラムにおける「育てたい教師像」

黒木貴人（広島大学）・中居舞子（広島大学）・山本遼（広島大学）・小林祐也（関西大学）

学生関与のFD活動－芝浦工業大学における SCOT プログラム事例報告－

ホートン広瀬恵美子（芝浦工業大学）・榊原暢久（芝浦工業大学）

ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップのための基準

栗田佳代子（東京大学）・尾澤重知（早稲田大学）・北野健一（大阪府立大学工業高等専門学校）

榊原暢久（芝浦工業大学）・秦敬治（愛媛大学）・竹元仁美（聖マリア学院大学）

松本高志（阿南工業高等専門学校）・皆本晃弥（佐賀大学）

E-1. e-Learning・遠隔教育研究部会**座長：武田俊之 …… 【会場：1号館 1共33】**

スタディスキル科目における LMS とモバイル機器の効果的な活用法の研究

内田啓太郎（関西学院大学）

ユビキタス映像記録視聴システムを活用した授業研究の試み(III)

平山勉（名城大学）・後藤明史（名古屋大学）・竹内英人（名城大学）

リアルタイム評価と長期的評価

－タブレット端末 (iPad) による全学ユビキタス化から浮かび上がるもの－

小松泰信（大阪女学院大学／大阪女学院短期大学）

川崎千加（大阪女学院大学／大阪女学院短期大学）

誰もが開講できるオープン・オンライン・コースとその高等教育への影響

武田俊之（関西学院大学）・重田勝介（北海道大学）・森秀樹（大阪大学）

F-3. 大学生・大学生生活研究部会**座長：土岐智賀子 …… 【会場：総合館 共北32】**

同志社ラーニング・コモンズ内の統計から見た学習支援の内容と傾向

鈴木夕佳（同志社大学）・岡部晋典（同志社大学）

ラーニングコモンズにおける学生の空間利用状況とその可能性

－導入期における定点観測の結果を踏まえて－

野中陽一郎（兵庫教育大学）・丸毛幸太郎（兵庫教育大学）・中間玲子（兵庫教育大学）

宮元博章（兵庫教育大学）・横山香（兵庫教育大学）・山中一英（兵庫教育大学）

古川雅文（兵庫教育大学）

学生サポーター養成に関する一考察－学年・参加回数に着目して－

黒田友貴（愛媛大学）

ピア・サポーターの育成・マネージメント－ピア・サポート組織の実践報告－

福田今日子（立命館大学）・土岐智賀子（立命館大学）

3月19日(水)

小講演(2) 11:00~12:00

インストラクショナルデザインからみた大学教育

ー鳥瞰図からサンドイッチモデルへー …………… 【会場：総合館 共北27】

鈴木 克明（熊本大学大学院社会文化科学研究科教授システム学専攻教授・専攻長）

【司会】酒井 博之（京都大学高等教育研究開発推進センター准教授）

SDの新たなステージ「SDC（Staff Development Coordinator）養成プログラムの展開」

ースタッフ・ポートフォリオの活用を視点にー …………… 【会場：総合館 共北28】

阿部 光伸（愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室講師）

【司会】山本 淳司（京都大学総長室（教育）担当課長／大学院総合生存学館事務長）

「大きな問い」を失った大学ー「授業デザイン」の陥穽ー …………… 【会場：総合館 共北31】

藤本 夕衣（東京大学大学総合教育研究センター特任研究員）

【司会】田口 真奈（京都大学高等教育研究開発推進センター准教授）

大学教育改革の成功の鍵を探る

ージグソー授業実践の10年の蓄積からー …………… 【会場：総合館 共北32】

白水 始（文部科学省国立教育政策研究所 初等中等教育研究部／
教育研究情報センター 総括研究官）

村中 崇信（中京大学工学部電気電子工学科准教授）

【司会】松下 佳代（京都大学高等教育研究開発推進センター教授）

3月19日(水)

参加者企画セッション 13:30~16:00

学生とともに進めるFD【会場：1号館 1共32】

代表企画：梅村修（追手門学院大学）

共同企画：木野茂（立命館大学）・服部憲児（京都大学）・村山孝道（京都文教大学）

天野憲樹（岡山大学）・吉田博（徳島大学）・山本堅一（追手門学院大学）

長谷川伸（関西大学）・堀江育也（札幌大学）

鹿島我（京都光華女子大学／短期大学部）

話題提供：木野茂（立命館大学）・天野憲樹（岡山大学）・堀江育也（札幌大学）

長谷川伸（関西大学）・鹿島我（京都光華女子大学）・吉田博（徳島大学）

山本堅一（追手門学院大学）・服部憲児（京都大学）

司 会：梅村修（追手門学院大学）・村山孝道（京都文教大学）

Learning Analytics (LA) を教育にどう利用するか

ーLAの現状と今後の展開ー【会場：1号館 1共33】

企 画：山川修（福井県立大学）・武田俊之（関西学院大学）

話題提供：武田俊之（関西学院大学）・小川賀代（日本女子大学）・森本康彦（東京学芸大学）

松田岳士（島根大学）

指定討論：安武公一（広島大学）

司 会：山川修（福井県立大学）

ティーチング・ポートフォリオの効果検証【会場：総合館 共北25】

企 画：栗田佳代子（東京大学）

話題提供：栗田佳代子（東京大学）・北野健一（大阪府立大学工業高等専門学校）

松本高志（阿南工業高等専門学校）・竹元仁美（聖マリア学院大学）

皆本晃弥（佐賀大学）

指定討論：吉田香奈（広島大学）・吉田壘（東京大学）

司 会：栗田佳代子（東京大学）

数学のこんな授業が文系学部でできないか【会場：1号館 1共24LL】

企 画：水町龍一（湘南工科大学）

報 告：井上秀一（帝京大学）・矢島彰（大阪国際大学）・萩尾由貴子（久留米大学）

川添充（大阪府立大学）

司 会：井上秀一（帝京大学）

教養教育におけるコミュニケーション教育

ー音表現・脳科学・心理学からー【会場：1号館 1共25LL】

企 画：山地弘起（長崎大学）

話題提供：橋本優花里（福山大学）・西田治（長崎大学）・山地弘起（長崎大学）

指定討論：Gehrtz 三隅友子（徳島大学）

司 会：保崎則雄（早稲田大学）

3月19日(水)

学生の学びのデータ化・分析・活用

ー学習科学・教育工学・教育方法学の知見からー ……………【会場：1号館 1共31】

企画：杉原真晃（山形大学）

話題提供：松下佳代（京都大学）・白水始（国立教育政策研究所）・遠山紗矢香（静岡大学）

杉原真晃（山形大学）

指定討論：尾澤重知（早稲田大学）

司会：杉原真晃（山形大学）

学生と楽しむ授業へーコンサルティング・ワークショップー ……………【会場：総合館 共北26】

企画：清水亮（同志社大学）・橋本勝（富山大学）

教育コンサルタント：上野寛子（明治学院大学）・川上忠重（法政大学）

たなかよしこ（日本工業大学）・橋本勝（富山大学）

清水亮（同志社大学）

学生コンサルタント：中里祐紀（岡山大学）・曾根健吾（東洋大学）・萩原広道（京都大学）

高橋雄大（岡山大学）・東海麻由（富山大学）

高大接続教育の実践デザインを考える ……………【会場：総合館 共北27】

企画：谷口哲也（学校法人河合塾）

話題提供：棕本洋（立命館大学）・成田秀夫（学校法人河合塾）・内村浩（京都工芸繊維大学）

小林昭文（学校法人河合塾）

司会：中井俊樹（名古屋大学）

MEMO

参加方法等について

◆参加資格

大学教育関係者、もしくは大学教育に関心のある方。

◆参加費用

一般 5,000 円

関西 FD 連絡協議会会員校の関係者 4,000 円

学生(大学院生・大学生等学生身分を提示できる者) 3,000 円

京都大学教職員等関係者 3,000 円

◆参加申込の方法

次のいずれかの方法で、2014 年 2 月 10 日(月)17 時 までに、

1. 高等教育研究開発推進センターの HP の入力フォームから、オンラインで申し込む。

2. 18 ページの FAX 用フォームを使用し、FAX にて申し込む。 **FAX : 075-753-3045**

センター HP: <http://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/>

◆情報交換会について

初日(3月18日)午後5時半より、百周年時計台記念館2階・国際交流ホールにて、講師の先生方を囲んで情報交換会を開催いたします(会費5,000円)。

こちらも併せて、お申し込みをお待ちしております。

会費は当日、受付にてお支払いください。

◆お問い合わせ

京都大学高等教育研究開発推進センター 大学教育研究フォーラム担当

550forum@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp

(注)メールを送る場合には、件名に「大学教育研究フォーラムについての問い合わせ」とお書きください。

あさがお(ASAGAO)MLのご案内

高等教育研究開発推進センターでは、当センターに関する最新の情報をお知らせするための『あさがお(ASAGAO)ML』を設けています。

この ML では、「大学教育研究フォーラム」「大学生研究フォーラム」などのイベント開催や他の高等教育関連機関のシンポジウム、ワークショップの開催などの情報を提供しており、案内を自由に投稿することもできます。

＊下記の URL から登録できます。

<http://kyoto-u.s-coop.net/asagao/>

FAX: 075-753-3045 宛先: 京都大学高等教育研究開発推進センター

第20回大学教育研究フォーラム 参加申込書(FAX用)

氏 名	
フリガナ	
所 属	
職 名	
メールアドレス	このメールアドレスを『あさがお(ASAGAO)ML』に登録することを 希望する 希望しない 登録済み (○をつけてください)
情報交換会 3月18日(火) 17時半～ 会費 5,000円	参加する 参加しない (○をつけてください) (注)キャンセルの方は、2014年3月11日(火)17時までにご連絡下さい。申し込みをされて当日お越しにならない場合には、後日請求をさせていただきます。あらかじめご了承下さい。
備 考	

会場地図



主な交通機関

地下鉄烏丸線・今出川駅より

市バス 203 系統「銀閣寺道・錦林車庫」行「百万遍」下車
市バス 201 系統「百万遍・祇園」行「京大正門前」下車

京阪・出町柳駅より

市バス 201 系統「祇園・みぶ」行「京大正門前」下車
又は、東へ徒歩約 20 分

阪急・河原町駅、京阪・祇園四条駅より

市バス 31 系統「熊野・岩倉」行「京大正門前」下車
市バス 201 系統「百万遍・祇園」行「京大正門前」下車

IV-4. FD ネットワーク代表者会議 (JFDN)

IV-4-1. 第6回会議の概要

2013年9月13日(金)11時～17時、FD ネットワーク代表者会議(JFDN)の第6回会議が、京都大学吉田南1号館106室にて開催された。本年度は、特別経費プロジェクトが終了したことに伴い、各FD ネットワークの自主的参加という形をとったが、全国11のFD ネットワークの代表が参集し、それぞれの活動の現状と課題について報告し合った。その後、東條正範氏(文部科学省高等教育局大学振興課大学改革推進室専門官)、安部田康弘氏(文部科学省高等教育局大学振興課学務係長)よりコメントをいただき、自由討議の時間を持った。

昨年度は、6月に大学改革実行プランが出され、8月28日に、中教審答申『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～』が出され、本年度も、教育再生実行会議から、5月28日に『これからの大学教育等の在り方について(第三次提言)』などが出されるなど、大学教育改革は社会の喫緊の課題として大学に突きつけられ続けてきている。一方で、FDが義務化されてから5年を経過し、それが日常的な活動として位置づけられるようになったこともあってか、FDということは一頃に比べて前面に取り上げられることは少なくなってきたような印象もある。そのこと自体は、むしろ好ましいことではないかとも思われるが、大学を取り巻く状況の変化の速度はますます速まっていく昨今、本来の意味でのFDは大学教員にとってより重要な課題になってきている。そのような状況の下、FDをどのように大学教育のなかで持続させていくべきなのか、そしてまた、FDネットワークがそれに対してどのような機能を果たしていくべきなのか、「持続可能なFDとFDネットワークのあり方」という課題について本年度は中心的に議論した。

1. 参加者

いわて高等教育コンソーシアム

江本 理恵(岩手大学 大学教育総合センター 准教授)

看護学教育研究共同利用拠点

北池 正(千葉大学大学院看護学研究科附属 看護実践研究指導センター長・教授)

文部科学省

東條 正範(文部科学省 高等教育局 大学振興課 大学改革推進室 専門官)

安部田康弘(文部科学省 高等教育局 大学振興課 大学改革推進室 学務係長)

大学コンソーシアム石川

青野 透(金沢大学 大学教育開発・支援センター 教授)

福井県学習コミュニティ推進協議会(Fレックス)

内藤 徹(仁愛女子短期大学 教授・FレックスFDチームリーダー)

杉原 一臣(福井工業大学 准教授・FレックスFDチームサブリーダー)

FD・SD教育改善支援拠点

夏目 達也(名古屋大学 高等教育研究センター 教授)

医学教育共同利用拠点

丹羽 雅之（岐阜大学医学教育開発研究センター 教授）

大学コンソーシアム京都

徳永 寿老（大学コンソーシアム京都 事務局長）

川面 きよ（大学コンソーシアム京都 専門研究員）

山陰地区 FD 連絡協議会および山陰地域ソーシャルラーニングセンター

七田 麻美子（島根大学 教育開発センター / ソーシャルラーニングセンター 講師）

四国地区教職員能力開発ネットワーク（SPOD）／教職員能力開発拠点

山田 剛史（愛媛大学 教育企画室 准教授）

九州地域大学教育改善 FD・SD ネットワーク：Q-Links

小貫 有紀子（九州大学 教育改革企画支援室 特任助教）

相互研修型 FD 共同利用拠点

大塚 雄作（京都大学 高等教育研究開発推進センター センター長／教授）

松下 佳代（同 教授）

飯吉 透（同 教授）

溝上 慎一（同 准教授）

酒井 博之（同准教授）

田中 一孝（同 特定助教）

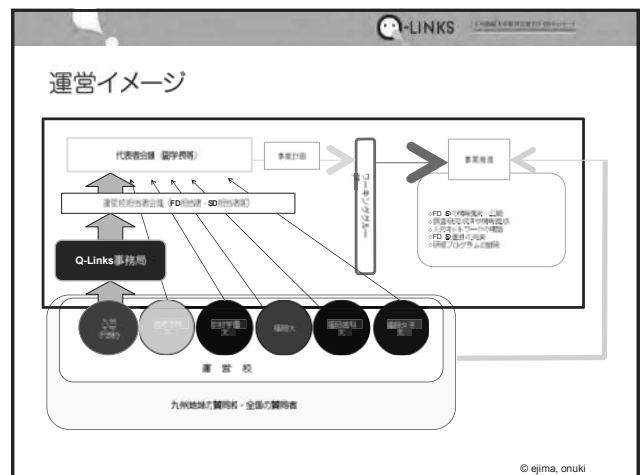
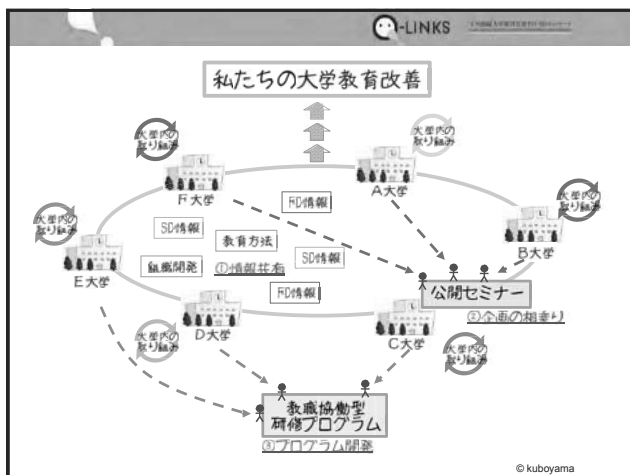
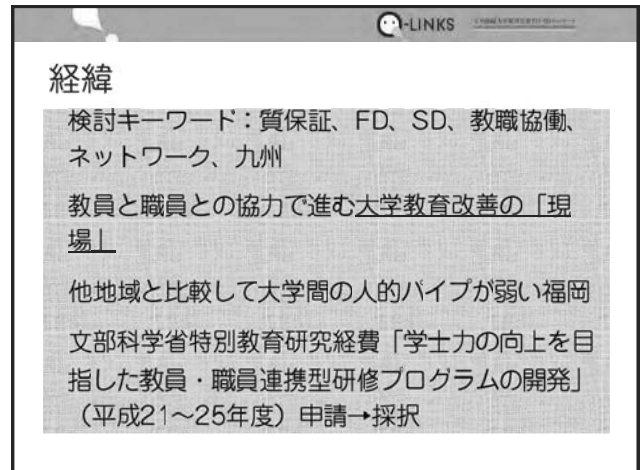


FD ネットワーク代表者会議（JFDN）第 6 回会議 集合写真

2. プログラム

時間	プログラム	内容
10:30	受付開始	吉田南1号館 106室
11:00～11:10	開会挨拶	開会挨拶：大塚 雄作 (京都大学高等教育研究開発推進センター長)
11:10 ～ 12:30	FDネットワークおよび教育関係共同利用拠点の現状と課題Ⅰ	〔発表・質疑 各20分〕 1. 小貫 有紀子 (九州地域大学教育改善FD・SDネットワーク：Q-Links・九州大学) 「かたらしてえ Q-Links 2013」 2. 山田 剛史 (四国地区教職員能力開発ネットワーク (SPOD) / 教職員能力開発拠点・愛媛大学) 「四国地区における教職員能力開発の展開と成果」 3. 七田 麻美子 (山陰地区FD連絡協議会および山陰地域ソーシャルラーニングセンター・島根大学教育開発センター) 「山陰地域ソーシャルラーニングセンターの取組について」 4. 徳永 寿老 (大学コンソーシアム京都) 「大学コンソーシアム京都における持続可能な FD と FD ネットワークのための取組」
12:30～13:30	昼 食	106室にて
13:30 ～ 16:10	FDネットワークおよび教育関係共同利用拠点の現状と課題Ⅱ	〔発表・質疑 各20分〕 5. 大塚 雄作 (関西地区FD連絡協議会・京都大学) 「教育関係共同利用拠点の今後 ― 関西地区FD連絡協議会の行方 ―」 6. 丹羽 雅之 (医学教育共同利用拠点・岐阜大学) 「共同利用拠点としての成果と今後の方向性」 7. 夏目 達也 (FD・SD教育改善支援拠点・名古屋大学) 「「名古屋大学FD・SD 教育改善支援拠点」の活動と課題」 8. 内藤 徹 (仁愛女子短期大学 教授・フレックスFDチームリーダー) 「福井県のFD活動―FDチームを中心として―」 9. 青野 透 (大学コンソーシアム石川・金沢大学) 「学都いしかわ・課題解決型グローバル人材育成システムの構築」 10. 北池 正 (看護学教育研究共同利用拠点・千葉大学) 「看護学教育研究共同利用拠点の現況と課題 ―看護学教育におけるFDマザーマップの開発大学間共同活用促進プロジェクト―」 11. 江本 理恵 (いわて高等教育コンソーシアム・岩手大学) 「いわて高等教育コンソーシアムのFD・SDの取り組み」
16:10～17:00	ディスカッション	コメント：東條正範・安部田康弘 (文部科学省) 司会：大塚 雄作 (京都大学)
17:00	記念撮影・解散	

(大塚 雄作、斎藤 有吾)



LINKS

目的

九州地域大学教育改善FD・SDネットワーク：
 ・Kyushu Learning Improvement Network for Staff Members in Higher Education (Q-Links) は、
 ・FD・SDの大学間連携による人的ネットワークの構築や情報共有を通じて、各高等教育機関における学習・教育の改善が推進されることを支援し、教育活動の向上と発展に寄与します。

LINKS

主な取組

ネットワークに参加している各機関のFD・SD情報を集約・公開
 入学前から学士課程・大学院課程までの学習・教育に関し、他国、他大学の状況、関係官庁、関係業界の動向などについて情報収集し、機関へ提供
 各機関同士のネットワークを活用した人的ネットワークの構築、特にFD・SDの連携の充実と強化
 学習・教育改善に資する教職協働型（教育活動の質的向上という目標のもとで教員と職員が協力する）研修プログラムを開発・実施

LINKS

31大学、6短大、76賛同者(2013.08現在)

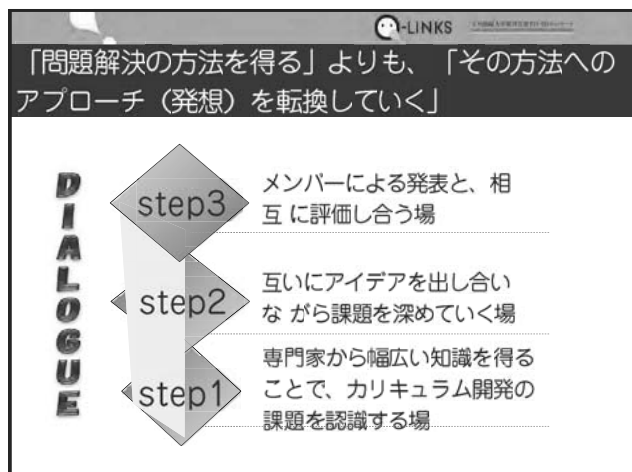
2009.10発足	九州大、西南学院大、中村学園大・短期大学部、福岡大、福岡歯科大、福岡女子大
2009.12加入	福岡工業大、西日本工業大、第一薬科大、保健医療経営大、福岡国際大、筑紫学園大・短期大学部、九州共立大、国際医療福祉大、九州国際大、日本文理大[大分]
2010.01加入	九州産業大、福岡医療短期大、福岡教育大、長崎国際大[長崎]、宮崎公立大[宮崎]、琉球大[沖縄]
2010.05加入	沖縄国際大[沖縄]、崇城大[熊本]
2010.10加入	鹿児島大[鹿児島]
2010.12加入	名城大[沖縄]、佐賀大学[佐賀]
2011.03加入	九州女子大学・九州女子短期大学
2011.07加入	香蘭女子短期大学
2011.09加入	純真学園大学
2012.07加入	長崎県立大学[長崎]
2013.03加入	近畿大学(産業理工学部)
2013.03加入	西南学院大学・西南学院大学短期大学部

LINKS

2. 活動実績

Q-caravan (全賛同校の訪問)

Q-place (メンバーシップ勉強会)



教員と職員が一緒にチームになって

「Lab(ラボ)」は、「Laboratory(ラボラトリー: 実験室、工房)」を意味しています。教育改善の課題について、Q-Linksメンバーシップの協働を通じ、新たな手法やアイデアが創出・試行されるような場をつくろう、といったところでしょうか。「Lab」には、個人の能力開発とともに、「collaboration(コラボレーション: 協働)」の意味も含まれていて、教職協働による組織力を高めていくことへの期待が込められています。

「FDとSD」から

“Educational Development”へ



<職員との交流の増加>

この(=Q-Labの)前と後とでは、(学内で)話す人の層がかなり変わっているんです。こっちは(Q-Lab前は)ほとんど教員ばかり。広報課にも行ってましたけど、かなり行くようになったり、教務課に行くようになったのは、(Q-Labの)後からです。Q-Labを受けることで。あそこ(=Q-Lab)は教職協働ですから。(C-40)

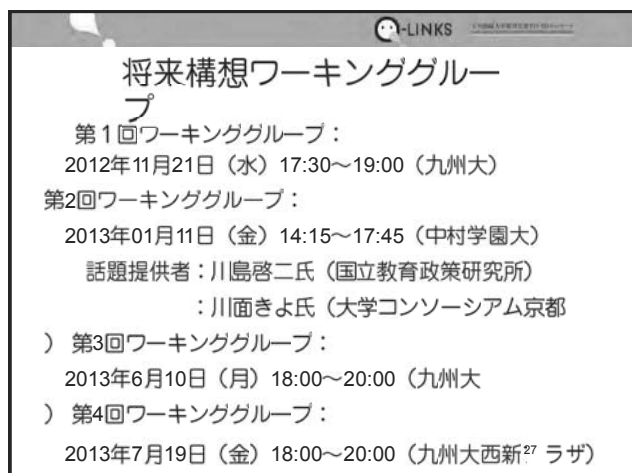
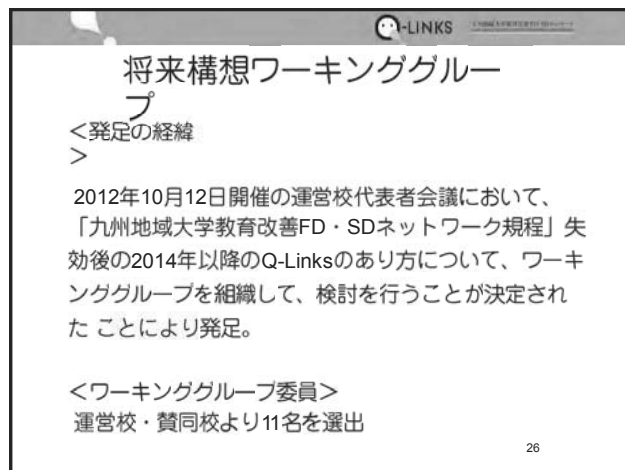
<発想の広がり>

何かあった時に、アイデアを書き出す時に「これだけじゃない」とかっていう視点も。(中略)日常的に思えるようになりました。以前は数字の確かさを検証するだけだったんですけど、もっと大きく物の見方であったり、「落としているところはないか?」「アイデアはこれで全てか?」というようなところまで、意識できるようになりました。(B-66)

3. 今後の活動予定

2013年度下半期活動予定

- 9/19第20回Qplace「向き合い方で学生も変わる、私も変わる〜歩進んだ学生支援に向けて〜」(鹿児島大学)
- 9/20第21回Qplace「キャリア支援ミニ研究会」(九州大学)
- 10/中旬Eかわらばん(通算10号)配信
- 11/1拡大担当者会議
- 11/2 Qconference2013(年次報告会・最終シンポジウム)
- 1/中旬Eかわらばん(通算11号)配信
- 3/上旬 QSTUDIES2013(活動報告)発行



四国地区における教職員能力開発 の展開と成果

山田 剛史 / Tsuyoshi YAMADA, Ph.D.
愛媛大学 教育・学生支援機構 教育企画室 准教授
(四国地区教職員能力開発ネットワーク(SPOD) /
教職員能力開発拠点)
E-mail: yamada@ehime-u.ac.jp
HP: http://yamatujo.com

愛媛大学

FDネットワーク代表者会議第6回会合@京都大学
2013年9月13日(金) 11:00-17:00

1

今日の内容

1. 四国地区大学教職員能力開発ネットワーク(SPOD)
2. 教職員能力開発拠点事業
3. 愛媛大学テニユア・トラック制度の導入

えみか

愛媛大学

1. 四国地区大学教職員能力開発ネットワーク(SPOD)

愛媛大学

SPODの概要

SPODは、四国地区の高等教育機関が連携してネットワーク事業を展開することにより、域内のFD/SD事業の効率化、高度化、実質化を行うとともに、学生の豊かな学びと成長を支援する実践的力量をもった高等教育のプロフェッショナルを輩出し、教育の質の保証を図ることを目的に平成20年10月に設立。

- ・四国地区の全ての高等教育機関33校が加盟
- ・地域ネットワークとして、FD・SD大学間連携のモデル(平成20年度「文部科学省戦略的大学連携支援事業(通称、戦略GP)」に採択)
- ・平成23年度から自主運営体制により事業を継続
- ・愛媛大学が代表校、及び事務局(教育企画課)を設置

愛媛大学

SPODの運営体制

【愛媛】12校
(大学5)
愛媛大学(国)、愛媛県立医療技術大学(公)、
聖カタリナ大学(私)、松山大学(私)、松山東雲女子大学(短期大学2)
今治明德短期大学(私)、環太平洋大学短期大学部(私)、
松山東雲短期大学(私)、松山短期大学(私)、
聖カタリナ大学短期大学部(私)
(高等専門学校2)
新居浜工業高等専門学校(国)、弓削商船高等専門学校(国)

【香川】7校
(大学4)
香川大学(国)、香川県立保健医療大学(公)
(四国学院大学(私)、高松大学(私)
(短期大学2)
香川短期大学(私)、高松短期大学(私)
(高等専門学校1)
香川高等専門学校(国)

33校(四国地区の全高等教育機関が加盟)
大学16、短期大学12、高等専門学校5 (平成25年8月現在)

【高知】6校
(大学3)
高知大学(国)、高知県立大学(公)、
高知工科大学(公)
(短期大学2)
高知短期大学(公)
高知学園短期大学(私)
(高等専門学校1)
高知工業高等専門学校(国)

【徳島】8校
(大学4)
徳島大学(国)、鳴門教育大学(国)、
四国大学(私)、徳島文理大学(私)
(短期大学3)
四国大学短期大学部(私)、徳島工業短期大学(私)
徳島文理大学短期大学部(私)
(高等専門学校1)
阿南工業高等専門学校(国)

愛媛大学

SPODのネットワーク体制

各種研究開発での協働
国立教育政策研究所
(高等教育研究部)

成果の情報発信、連携
全国他地区の
ネットワーク等

【ネットワークコア校】

愛媛大学
(教育企画室)

香川大学
(大学教育開発センター)

高知大学
(総合教育センター)

徳島大学
(大学開放支援センター)

(研究開発、人材育成を担う4大学でネットワークコアを構成)
ネットワークコア運営協議会(月1回程度開催)

【ネットワーク加盟校】

研究員の派遣、研修講師の依頼、各種研修プログラムへの参加、
コンテンツ、コンサルテーションの利用。併せて、コア校が開発した
プログラムの共同試行、共同実施等に参加。

【四国地区大学教職員能力開発ネットワーク】

愛媛大学

SPODの主な事業内容（平成25年度）

1. FD事業
 - ・新規採用教員研修（年5回）@各コア校
 - ・FDファシリテーター（FD担当者）養成研修（年1回）@徳大
 - ・ファカルティ・ディベロッパー（FDeP）養成研修（年1回）@京都
 - ・ティーチング・ポートフォリオ作成WS（年2回）
 - ・ティーチング・ポートフォリオ更新WS（年1回）
 - ・アカデミック・ポートフォリオ作成WS（年1回）
 - ・各種FDプログラムの開発・実施@各加盟校
2. SD事業
 - ・講師養成プログラム（年2回）
 - ・大学人・社会人としての基礎力養成プログラム（年4回／（2泊3日×4回）×2回）
 - ・学務系職員養成プログラム（年2回）
 - ・社会連携系職員養成プログラム（年1回）
 - ・次世代リーダー養成プログラム（年8回）
 - ・高等教育トップリーダーセミナー（年1回）
 - ・スタッフポートフォリオの開発
 - ・各種SDプログラムの開発・実施@各加盟校
3. SPODフォーラム
4. SPOD共通事業
5. SPOD運営



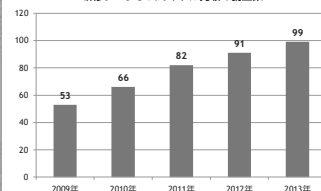
取組例1：統一ガイドブックの作成とプログラムの共有

SPOD内で開催され、かつ加盟校の参加可能なFD/SDプログラムを網羅的に掲載。加盟校の全教職員約7,000名に配布。希望するプログラムを探して直接申込みが可能となり、平成23年度はSPOD加盟校の教職員を中心に、延べ2,000名以上の参加を得た。

また、参加者の約90%から参加したプログラムについて「有意義又は満足」との回答を得た。



研修プログラムガイドに掲載の冊数



取組例2：SPODフォーラムの実施

大学等の教職員の能力開発に役立つ多種多様なFD/SDプログラム及び組織を超えた意義ある相互交流・関係づくりを提供することを目的に、あらゆる立場の教職員が、その場でスキルアップにつながるような実践的なプログラムを3～4日間で集中的に提供。

平成21年度から毎年開催。加盟校教職員を中心に、500名（延べ1,000名）程度が参加。40を超えるセミナーを提供している。アンケートでも、高い評価を得ている。

<SPODフォーラム2012@徳島大学>
平成24年8月22日（水）～24日（金）
全44のセミナーを開講し、加盟校教職員を中心に、全国から496名（延べ1,432名）が参加。

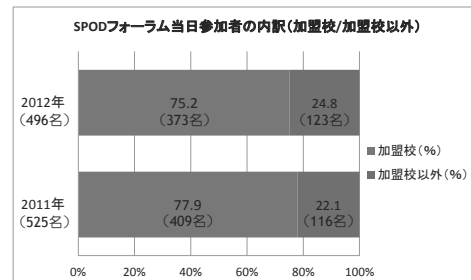


★SPODフォーラム2014は高知大学で開催★
【日時】H26.8.27～8.29



取組例2：SPODフォーラムの実施（評価の経年比較）

- ◆参加者数は450～500名の間で推移
- ◆加盟校以外からの参加者は全体の2割強で100名強
- ◆自主運営（参加費徴収@7000）の影響は現時点ではみられない

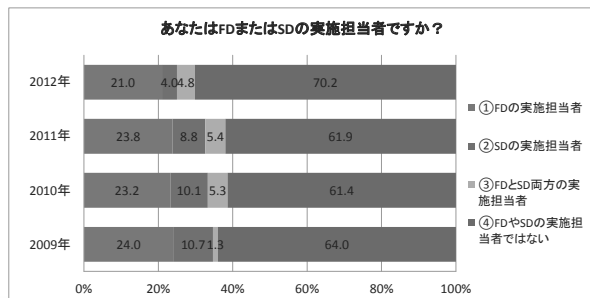


*ただし、2011年については、加盟校参加者の内、58名は遠隔講義受講者
*2010年の参加者は「469名」



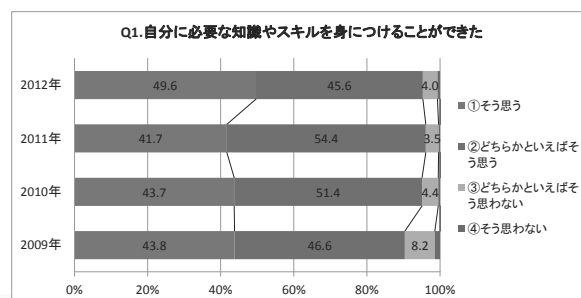
取組例2：SPODフォーラムの実施（評価の経年比較）

- ◆参加者の約3割はFD/SD担当者
- ◆参加者の約7割は非担当者で個人レベルの情報収集・スキルアップ
- ◆玄人向けのプログラムと初心者向けのプログラムのバランスを配慮



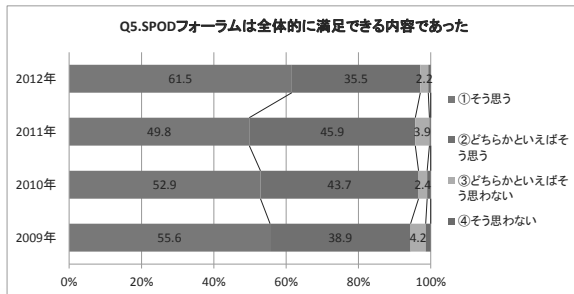
取組例2：SPODフォーラムの実施（評価の経年比較）

- ◆知識・スキルの身につけ度は概ね9割強
- ◆2012年は特に「そう思う」の割合が8ポイントアップ（2011年比較）
- ◆ただし、「そう思う」はずっと4割台なので、さらにブラッシュアップを



取組例2：SPODフォーラムの実施（評価の経年比較）

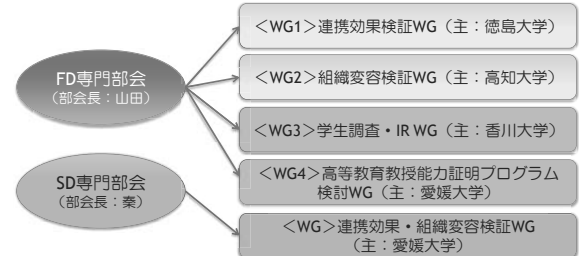
- ◆2012年の「そう思う」割合は6割強（2011年より12ポイントアップ）
- ◆一貫して高い満足度を維持・向上できている
- ◆それらが何によるもので、その後どのようにつながっているかも重要



愛媛大学

取組例3：調査・研究プロジェクトの設置

SPOD導入のインパクトの検証および今後のFD・SDニーズの発掘、研究面での成果の発信などを主たる目的として、2011年11月に「調査・研究プロジェクト」を設置。現在、以下5つのWGが稼働。



愛媛大学

2. 教職員能力開発拠点事業

愛媛大学

拠点事業の概要

■文部科学大臣より教育関係共同利用拠点「教職員能力開発拠点」として認定

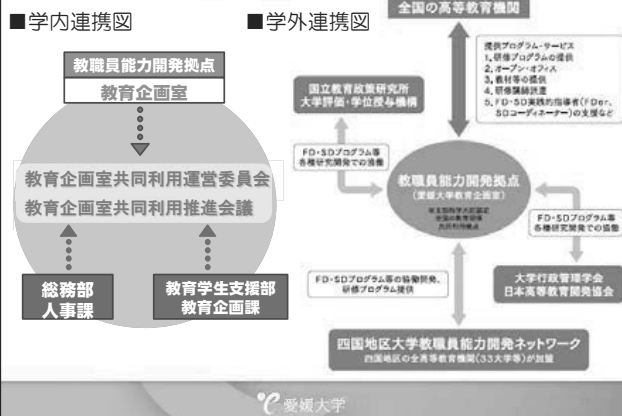
教職員能力開発拠点は、四国地区大学教職員能力開発ネットワーク等との連携で開発した、FD／SDプログラムを有効活用するための実施体制を、スタッフやプログラム等との充実により確立・強化し、全国のエデュケーション関係共同利用拠点として、大学等の教育力向上を図る。

(申請書より抜粋)

- ◎認定施設名：愛媛大学 教育・学生支援機構 教育企画室
- ◎認定施設の種類：大学の教職員の組織的な研修等の実施機関
- ◎認定の有効期間：平成22年4月1日～平成27年3月31日（5年間）
- ◎代表者名：小林 直人（教育・学生支援機構副機構長 教育企画室長）
- ◎特記事項：四国地区の中核的拠点としての活動を期待

愛媛大学

学内外との連携体制



拠点の主な事業内容と成果（平成24年度）

- ①研修プログラムの提供（31のプログラムを提供）
- ②オープン・オフィス（訪問対応）

地区	北海道	東北	関東	中部	近畿	中国	四国	九州	その他	合計
訪問数	2	3	10	2	7	2	0	3	11	40

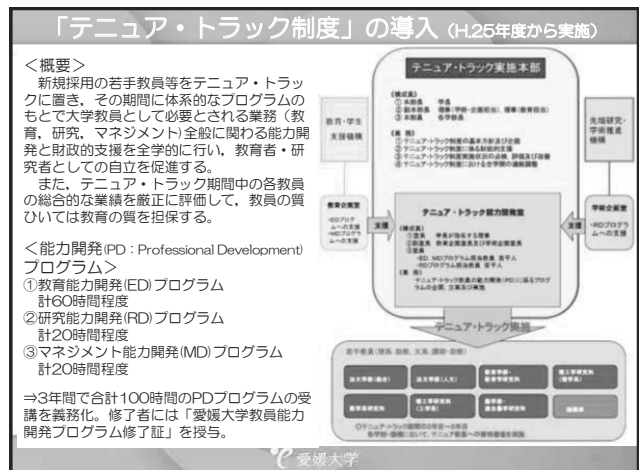
- ③教材等の提供
- ④講師派遣

地区	北海道	東北	関東	中部	近畿	中国	四国	九州	その他	合計
派遣数	3	3	12	5	15	4	16	3	14	75

- ⑤FD／SD実践的指導者（FDER, SDコーディネーター）の支援・育成
- ⑥その他、教職員能力開発に関する事業

愛媛大学

3. 愛媛大学テニユア・トラック制度の導入



山陰地域ソーシャルラーニング センターの取組について

島根大学 教育開発センター
七田麻美子



本報告の流れ

1. 島根大学のFDネットワークについて
2. 山陰地域ソーシャルラーニング（Solc）について
3. Solcにおける統一教育目標について
4. Solcにおける統一教育評価について
5. 今後の課題



2

島根大学におけるFDネットワーク の取り組み 山陰地域FD連絡協議会

- 山陰地域における教育の質保証および質向上を図ることを目的とするものであり、その目的の実現に向けて地域における重要な人材育成機能を担う高等教育機関が情報の交換・共有や合同事業、人材育成などの協働事業を推進していく核となる



山陰地域FD連絡協議会

- 平成21年度～25年度
- 加盟機関
島根大学 島根県立大学
島根県立大学短期大学部
鳥取環境大学 鳥取短期大学
米子工業高等専門学校



山陰地域ソーシャルラーニング Solc

- 山陰地域の地域的課題に対して、高等教育機関が協同して、地域に貢献できる人材の育成を行う取り組み。



ソーシャルラーニングとは

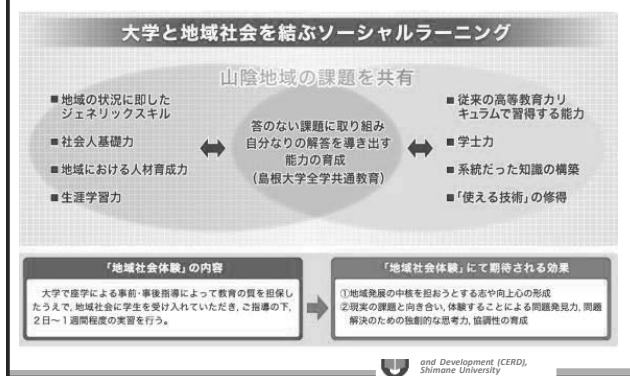
- 狭義にはソーシャルメディアを用いた学習を指すもの。
- 広義には学習者同士の協働により学びあう学習を指すもの。

(Bingham and Conner 2010)

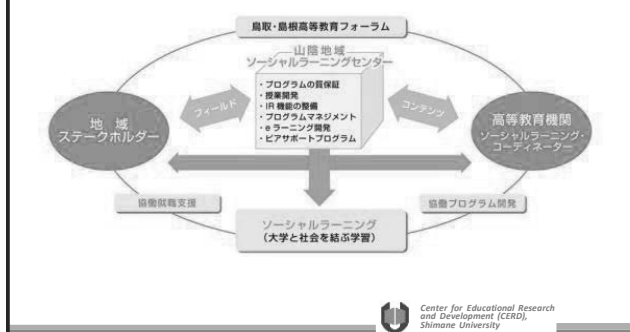
ここでは広義の意味。



概要



地域と大学の連携



山陰地域5大学連携

連携校

- ・ 島根大学
- ・ 島根県立大学
- ・ 鳥取環境大学
- ・ 島根県立大学短期大学部
- ・ 鳥取短期大学

協力校

- ・ 米子高等専門学校
- ・ 松江高等専門学校

Center for Educational Research and Development (CERD), Shimane University

統一の教育目標の設定

- ・ 地域連携と大学連携
→ 地域と協同して学生の育成にあたるという大学間連携事業
- ・ 地域の求める人材像の確定

Center for Educational Research and Development (CERD), Shimane University

地域連携に関するアンケート

- ・ 目的: ステークホルダーの人材育成ニーズを把握し、当該事業による開講科目の学習内容、方法に反映させる
→ ソーシャルラーニングコモンルーブリックの基礎データ
- ・ アンケート実施期間 2013年1月～2月
- ・ 調査回答数 253
- ・ 連携校選出のステークホルダー及び鳥取・島根の経済団体メンバーへ調査票(紙面)を送付、同時にオンラインアンケートとしても実施。

Center for Educational Research and Development (CERD), Shimane University

ソーシャルラーニングポリシー

- 「山陰地域をフィールドに、その豊かな自然・歴史・産業・文化的資産を活かし、地域社会と高等教育機関が協働して「主体性」、「コミュニケーション能力」、「イノベーション基礎力」を備えた人材の育成を行う」

コモンルーブリックの開発

		1	2	3	4	5
主体性	POCAサイクルを自分で回し責任を持った行動をとることができる。	計画を立てる	計画を自らの責任で実行する	自らの責任で実行した内容を、定期的・評価的に評価する	改善点を明らかにする	改善点を踏まえ、新たな活動を実行する
コミュニケーション能力	他者に向き合い、その意見を理解した上で、自分の意見を明確に表現し、それをもとに他者との間に共感的な関係を築き、相互関係より創発的な結果を引き出すことができる。	相手に向き合う	相手の話を傾聴する	自分の意見を話す	共感・協働的な行動を行う	創発的な行動を行う
イノベーション基礎力	対象の現状を理解し、目的や課題を明らかにすることから、その解決の糸口を発見し、新しい発想の提案ができる。	対象を理解する	探索的に事に当たる	課題を発見する	ソリューションを提案する	イノベーションを提案する

ルーブリックの構造

コミュニケーション能力:「他者に向き合い、その意見を理解した上で、自分の意見を明確に表現し、それをもとに他者との間に共感的な関係を築き、相互関係より創発的な結果を引き出すことができる。」

対話力(下位)・協働力(上位)

各授業におけるルーブリック
Ex「傾聴力」1

各授業におけるルーブリック
Ex「傾聴力」2

		1	2	3	4	5
コミュニケーション能力	他者に向き合い、その意見を理解した上で、自分の意見を明確に表現し、それをもとに他者との間に共感的な関係を築き、相互関係より創発的な結果を引き出すことができる。	相手に向き合う	相手の話を傾聴する	自分の意見を話す	共感・協働的な行動を行う	創発的な行動を行う
対話力	他者に向き合い、その意見を理解した上で、自分の意見を明確に表現し、それをもとに他者との間に共感的な関係を築き、相互関係より創発的な結果を引き出すことができる。	相手に向き合う	相手の話を傾聴する	自分の意見を話す	共感・協働的な行動を行う	創発的な行動を行う
協働力	他者の意見を聞き、自らの意見を明確に表現し、それをもとに他者との間に共感的な関係を築き、相互関係より創発的な結果を引き出すことができる。	他者の意見を聞き、自らの意見を明確に表現し、それをもとに他者との間に共感的な関係を築き、相互関係より創発的な結果を引き出すことができる。	他者の意見を聞き、自らの意見を明確に表現し、それをもとに他者との間に共感的な関係を築き、相互関係より創発的な結果を引き出すことができる。	他者の意見を聞き、自らの意見を明確に表現し、それをもとに他者との間に共感的な関係を築き、相互関係より創発的な結果を引き出すことができる。	他者の意見を聞き、自らの意見を明確に表現し、それをもとに他者との間に共感的な関係を築き、相互関係より創発的な結果を引き出すことができる。	他者の意見を聞き、自らの意見を明確に表現し、それをもとに他者との間に共感的な関係を築き、相互関係より創発的な結果を引き出すことができる。

各授業でのルーブリック①

項目名	観点	1	2	3	4	5
		具体的な行動				
傾聴力	カンファレンスの場で、他の人が話す内容をメモを取るなどして聞き、正確に理解した上で、的確な質問をすることができる。	カンファレンスの場で、他の人が話す内容を最後まで聞くことができる。	カンファレンスの場で、他の人が話す内容を最後まで聞き、理解した上で、何らかの質問ができる。	カンファレンスの場で、他の人が話す内容をメモを取るなどして聞き、正確に理解した上で、的確な質問をすることができる。	カンファレンスの場で、他の人が話す内容をメモを取るなどして聞き、正確に理解した上で、的確な質問をすることができる。	カンファレンスの場で、他の人が話す内容をメモを取るなどして聞き、正確に理解した上で、的確な質問をすることができる。

各授業でのルーブリック②

項目名	観点	1	2	3	4	5
		具体的な行動				
傾聴力	発表の場で、他の人が話す内容をメモを取るなどして聞き、正確に理解した上で、的確な質問をすることができる。	発表の場で、他の人が話す内容を最後まで聞くことができる。	発表の場で、他の人が話す内容を最後まで聞き、理解した上で、何らかの質問ができる。	発表の場で、他の人が話す内容をメモを取るなどして聞き、正確に理解した上で、的確な質問をすることができる。	発表の場で、他の人が話す内容をメモを取るなどして聞き、正確に理解した上で、的確な質問をすることができる。	発表の場で、他の人が話す内容をメモを取るなどして聞き、正確に理解した上で、的確な質問をすることができる。

SolcにおけるFD

- 年に一度のFD研修会とSD研修会の開催



地域連携に関する意識づくりと、方法論の確定の必要性

統一教育評価基準の運用に関する協議の必要性

今後の課題

- コモンルーブリック運用方法の確立
- 大学間連携の強化(ICTの効果的な利用など)

御清聴ありがとうございました



大学コンソーシアム京都における
持続可能なFDとFDネットワークのための取組

2013年9月13日
FDネットワーク代表者会議
公益財団法人 大学コンソーシアム京都
事務局長 徳永寿老

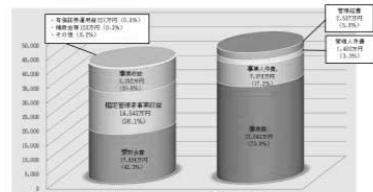
公益財団法人 大学コンソーシアム京都
The Consortium of Universities in Kyoto

1

Copyright © The Consortium of Universities in Kyoto All Rights Reserved

大学コンソーシアム京都の概要 運営体制

事務局員・基幹会議など委員		事務局（キャンパスプラザ京都）		附設	
延べ約300名		来場者 年間約45万人		予算規模 年間約4億円	
1. 事務局員	竣工 2000年7月	1. 会費収入	42%		
出向職員（原則2年〜4年で交替）	20名	総工費	約100億円		
専門職員（有期契約職員）	19名	建物設備設備分、土地31億		主に大学から維持委員会費（在籍学生数1人で500〜1,000円）である。京都府も維持委員会であり、賛助会員（企業など）も費も含まれる。	
臨時職員（アルバイト等）	4名	来場者数	年間約45万・1日1,500人		
専門員（研究員）	2名	階層	地下1階・地下1階上層	2. 京都市指定管理者事業収 36% 入	
2. 各種委員会、事業部委員会		敷地面積	2,633平米	キャンパスプラザ京都の管理運営に充当、	
諮問委員会	166名	延床面積	11,677平米	3. 事業収入 21%	
運営委員会	16名			各種フォーラム・セミナーの留付料収入	
事業部長（総合企画会議等）	3名				
3. 理事等・評議員会					
学長・行政・経済団体等	23名				



2

Copyright © The Consortium of Universities in Kyoto All Rights Reserved

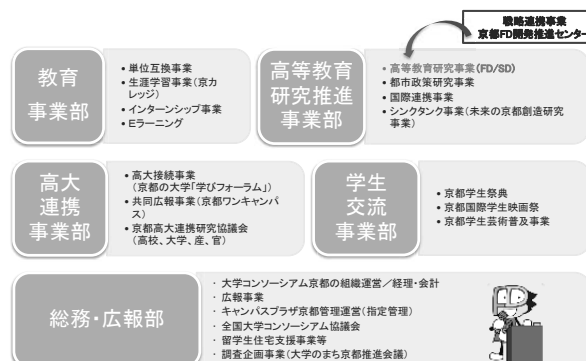
大学コンソーシアム京都の概要 加盟組織一覧

公立大学	公立大学	私立大学
京都大学 京都教育大学 京都工芸繊維大学	京都市立芸術大学 京都府立大学 京都府立医科大学	
近畿大学・短期大学		
池坊短期大学	京都女子大学	同志社大学
大谷大学	京都市立女子短期大学部	同志社女子大学
大谷大学短期大学部	京都精華大学	同志社大学
京都華頂大学	京都西山短期大学	修徳大学
華頂短期大学	京都聖母学院大学短期大学部	平安女学院大学
京都府立短期大学	京都府立音楽大学	平安女学院大学短期大学部
京都外国語大学	京都橘大学	明治安済医療大学
京都外国語短期大学	京都ノートルダム女子大学	立命館大学
京都府立大学	京都美術工芸大学	立命館大学
経済短期大学	京都文芸大学	同志社短期大学部
京都音楽女子大学	京都文教短期大学	大阪経済大学芸術学部
京都女子大学短期大学部	京都薬科大学	大阪医科大学
京都経済短期大学	種福短期大学	近畿大学・京都学習センター
京都経済芸術大学短期大学部	成安造形大学	
京都産業大学	成美大学	
	成美大学短期大学部	
私立大学団体	私立大学短期大学部	
京都府	私立共栄大学短期大学部	株式会社ジェイ・エス・ビー
京都市	株式会社エフエスエー	株式会社同志社エンタープライズ
	株式会社大塚商会会館京都支店	公益財団法人日本貨物取扱協会京都府支部
	株式会社セゾン情報サービス	株式会社フットワーク・エッジ
	西園グループ・エス・オー株式会社	三井住友海上火災保険株式会社京都支店
経済団体	キノリテック株式会社	株式会社セゾンバウ・装装
京都府工業博覧会	近畿商工連合会株式会社	
一般社団法人京都経済同友会	株式会社セキオテクノ	
公益社団法人京都工業会	株式会社サキヤクテラス画	

2013年6月29日現在 3

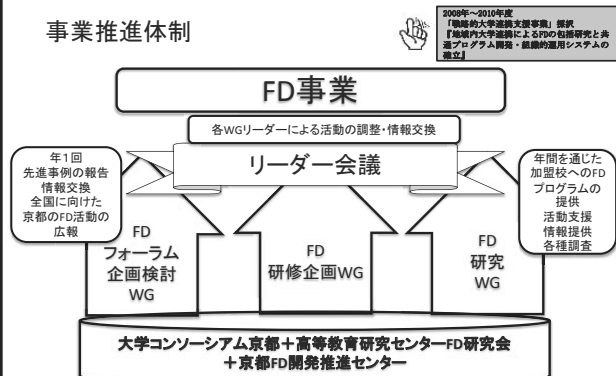
Copyright © The Consortium of Universities in Korea. All Rights Reserved

大学コンソーシアム京都の運営体制



大学コンソーシアム京都 FD事業概要

事業推進体制



Copyright © The Consortium of Universities in Kyoto All Rights Reserved

大学コンソーシアム京都 FD事業概要

FDフォーラム事業
FDフォーラム企画検討WG

FDフォーラム(FD普及並びに大学教育改善の研究交流の「場」として、1995年度より実施)

年度	回数	出席者数	テーマ
1995年度	第1回	105	知の技法
1996年度	第2回	200	学生の多様化と大学教育の改善について
1997年度	第3回	237	授業の進捗とFD
1998年度	第4回	206	組織的教育のあり方
1999年度	第5回	370	学生の学力向上に何が必要か
2000年度	第6回	586	学生の学習意欲向上のために
2001年度	第7回	601	大学の教育力と学生の学習意欲の向上
2002年度	第8回	577	学びのシステム
2003年度	第9回	813	生徒が学生へ成長するための
2004年度	第10回	869	評価される大学教育
2005年度	第11回	916	これからの大学教育
2006年度	第12回	987	学生が伸びる大学教育
2007年度	第13回	1005	大学教育と社会
2008年度	第14回	1191	学生が身につけるべき力とは何か 一橋大学を学士課程教育の創造一
2009年度	第15回	894	学生の学びを支える 一つのrOの関する
2010年度	第16回	860	組織的FDの取り組みーFD普及化から現在(いま)ー
2011年度	第17回	998	大学に於けるキャリア教育を考える ～企業が求める人材って、大学で育成したい人材？～
2012年度	第18回	836	学生が主体的に学べる学びの場とは何か

9

.....

大学コンソーシアム京都 FD事業概要

FDフォーラム事業

2013年度 第19回FDフォーラム

開催概要(予定)

【テーマ】 未定

【日 時】 2014年2月22日(土)、23日(日)

【会 場】 龍谷大学

3号館(1日目)、22号館(2日目)



大学コンソーシアム京都 FD事業概要

FD研修企画事業

FD研修企画WG

月	事業名
2013年 6月	京都FD執行部塾
9月	新任教員合同研修A
10月	FDer/SDC養成講座(京都FDer塾)*愛媛大学との共催
11月	京都FDer塾①【小規模】
12月	京都FDer塾②【小規模】
1月	京都FDer塾③【中規模】
2013年 3月	(*第19回FDフォーラム) 新任教員合同研修B

Copyright © The Consortium of Universities in Kyoto All Rights Reserved.

大学コンソーシアム京都 FD事業概要

FD研修企画事業

FD研修企画WG

研修参加者実績

研修名	京都FD 執行部塾	新任教員 FD合同 研修A	新任教員 FD合同 研修B	京都 FDer塾①	京都 FDer塾②	京都 FDer塾③ シンポ
2011年	31名	32名	24名	24名	21名	104名
2012年	53名	15名	20名	14名	15名	94名
2013年	41名	21名	*	*	*	*



Copyright © The Consortium of Universities in Kyoto All Rights Reserved.

大学コンソーシアム京都 FD事業概要

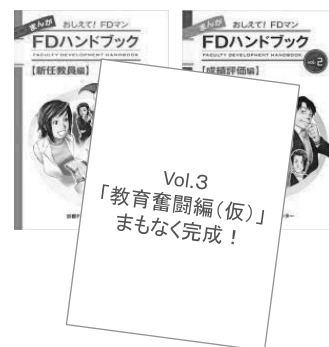
FD研究事業

FD研究WG

検討事項

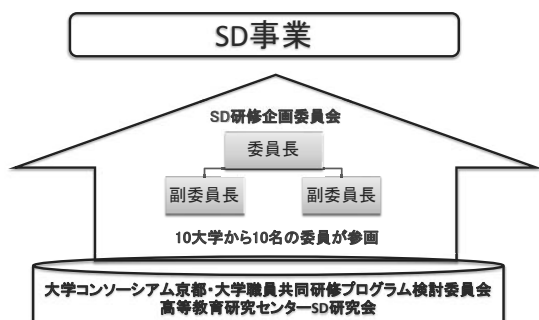
まんがFDハンドブック第3弾のテーマ、
目次案、構成内容の検討

FD情報ポータル開発へのアドバイジング

FD関連の問い合わせに対する
コンサルティング対応★「本務校を持たない非常勤教員に対する研修ニーズ」
調査も着手予定

大学コンソーシアム京都 SD事業概要

事業推進体制



レクチャーだけでは得られない新たな知見、深い気づき、さらには人的交流ネットワークを築き出すことを目的にSDワークショップを開催!

Copyright © The Consortium of Universities in Kyoto All Rights Reserved.

大学コンソーシアム京都 SD事業概要

大学職員共同研修プログラム(2003年度～)

大学職員として身につけておくべき基礎的なスキルを学ぶと同時に、異なる大学の職員による集合研修という形態から得られる情報交換・ネットワーク形成に資するプログラム。2013年度は、ビジネスマナー(基礎編)、職場活性化コミュニケーション術、問題解決力向上、カウンセリングマインド、企画力向上の各研修を開講。

対象	プログラムごとに新任者、勤続3年以上、中堅職員以上を主な対象者として実施
時期	ビジネスマナー(基礎編)は3月・6月、その他は8月または9月(1日完結)
費用	加盟校は6千5百円～1万1千円、非加盟校は1万1千5百円～1万8千円 (プログラムによって異なる)
定員	各プログラム20名(応募数によってはクラス増も)



Copyright © The Consortium of Universities in Kyoto All Rights Reserved.

大学コンソーシアム京都 SD事業概要

SDフォーラム(2003年度～)

SD分野で関心の高まっているテーマを取り上げ、基調講演および分科会における事例報告や意見交換を通じて、SDに関する情報交流の場を提供することを目的として実施

対象	大学職員の人材育成や人事政策に関心のある大学・短期大学の教職員
時期	10月中旬の1日
費用	加盟校 3,000円 非加盟校 6,000円 (2013年度)
定員	180名

第11回SDフォーラム

全体テーマ:「実践知を活かす」
日時:2013年10月20日(日)



Copyright © The Consortium of Universities in Kyoto All Rights Reserved.

大学コンソーシアム京都 SD事業概要

SDワークショップ(2011年度～)

広く高等教育の課題や大学マネジメントに関わる重要事項をテーマとし、ワイワイガヤガヤと議論の中で、レクチャーだけでは得られない新たな発見、深い気づき、さらには、人的交流ネットワークを生み出すことを目的として実施

対象	高等教育や大学運営に関心のあるすべての人
時期	前期2回、後期2回程度
費用	1,000円
定員	各回20名



2013年度 実施計画

【第1回】「産学協同教育」ワークショップ	7月6日(土)	11名	終了
【第2回】「職場活性化」ワークショップ	7月20日(土)	7名	終了
【第3回】「高等教育政策(仮)」ワークショップ	11月実施予定		
【第4回】「グローバル化と大学職員(仮)」ワークショップ	12月実施予定		

2012年度 実施結果

【第1回】「高等教育政策の読み方」ワークショップ	11月17日(土)	18名	
【第2回】「教学マネジメント」ワークショップ	12月1日(土)	6名	
【第3回】「学生支援」ワークショップ	12月15日(土)	13名	
【第4回】「職場活性化」ワークショップ	12月22日(土)	17名	

Copyright © The Consortium of Universities in Kyoto All Rights Reserved.

大学コンソーシアム京都 SD事業概要

SD研修事業

研修参加者実績

研修名	大学職員 共同研修 プログラム*	SDワーク ショップ	SD フォーラム	大学アドミ ニストレー ター研修	大学みらい塾
2009年	316	-	198	23	135
2010年	277	-	198	19	259
2011年	209	23	198	18	-
2012年	214	48	173	-	-
2013年	172	*	*	-	-

*2009年度はSプログラム開講。それ以外はSプログラムの開講。



Copyright © The Consortium of Universities in Kyoto All Rights Reserved.

大学コンソーシアム京都 SD事業概要

SDガイドブックの発行(2010年度～)



加盟大学・短期大学において大学職員として働きだした方を対象に、大学職員の能力開発の取組を指すSD (Staff Development) に興味を持ち、高等教育の世界で働く意識を高めてもらうことを目的として作成

2011年度版に引き続き、情報環境、環境問題などを考慮して、今年度リニューアル

デジタルブック版

<http://www.consortium.or.jp/consortium/sdguide/index.html>

PDF版

<http://www.consortium.or.jp/media/contents/0000007/285/0mg-32311821.pdf>

目次

- I. SDとは何か
- II. 大学職員に求められる職能
- III. 公益財団法人 大学コンソーシアム京都のSD事業
- IV. 国内のSD関連プログラム
- V. 高等教育の政策動向を知る情報源
- VI. 高等教育に関する定期刊行物
- VII. 高等教育文献・研究者の探し方

16

大学コンソーシアム京都 FD・SD事業の課題

✓大学コンソーシアムが行うべき京都ならではの
FD・SD事業の再検討・再構築

✓それぞれの専門委員会間の協働体制の確立

✓情報収集、発信のための方策・ツールの開発



Copyright © The Consortium of Universities in Kyoto All Rights Reserved.

大学コンソーシアム京都 FD・SD事業の課題

継続的な連携活動に向けた課題

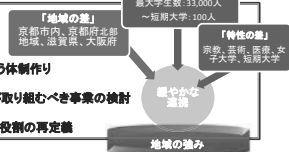
課題

- 維持会費収入の減少(学生数の減少)
- 事業収入の減少(参加者の減少)
- 委託事業収入の減少(受け入れ件数の減少)
- 出向職員数の減少、入れ替わりによる各事業の継続性の担保
- コンソ事業参画教職員の適切な新陳代謝・世代交代
- 拡大した事業の選択と集中
- 補助金事業終了後の事業展開



今後、取り組むべきアクション

- 事業継続担保のための事務局内研修、引継の実質化
- 第4ステージに掲げられた課題への取組とそれに向かう体制作り
- 加盟校のニーズのタイムリーな把握とコンソーシアムが取り組むべき事業の検討
- 時代の変化とともに関わるコンソーシアムの在り方と役割の再定義

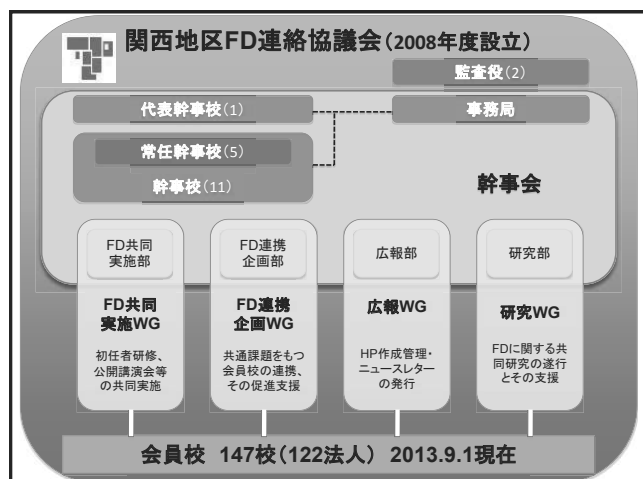
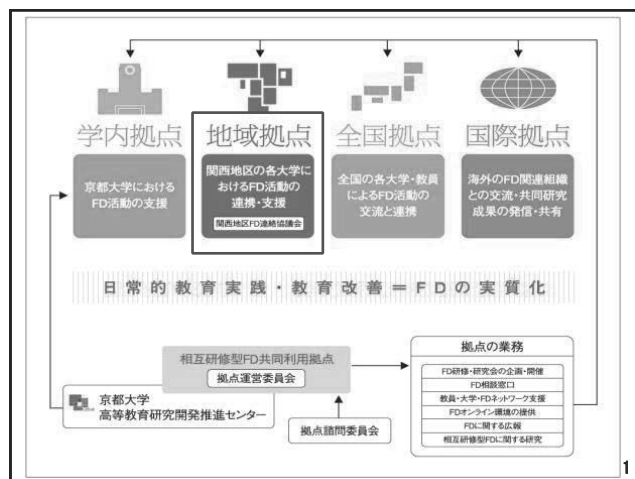


Copyright © The Consortium of Universities in Kyoto All Rights Reserved.

JFDN2013
2013.9.13
@京都大学吉田南1号館106室

教育関係共同利用拠点の今後 — 関西地区FD連絡協議会の行方 —

京都大学高等教育研究開発推進センター
大塚 雄作



◆特別経費の終了(2013年度)！

➤ 特別経費プロジェクト『大学教員教育研修のための相互研修型FD拠点形成』(2008～2012年度)

… 拠点を支える運営費・等 約8000万円

ex. 関西FD等の事務を担当する補佐員等

➤ 教育関係共同利用拠点プロジェクト『教育能力向上に向けた実践的な研究と方策の構築』(2011～2014年度)

… 拠点運営円滑化のための人件費 約1800万円

◆関西地区FD連絡協議会の会費問題

➤ 会費の値上げの可能性について(アンケート)

特別経費の終了 → 事務補佐員の人件費を関西FD会計より支出 → 年間120万円あまりの支出増加 → 平成26年度以降の必要とされる年度より会費引き上げ → 各会員校のご意見伺い…

A. 現在の活動内容維持のための会費値上げ許容

7校 (15.9%) → 「5万円まで許容」3校 「3～4万円まで許容」1校 「3万円まで許容」3校… 平均「4万円まで許容」

B. 事務局の継続にかかる費用相当額の値上げ(年会費3万円)については許容

20校 (45.5%)

C. 会費は据え置き、今後の関西FDのあり方、活動を見直すべき

16校 (36.4%)

D. その他

1校 (2.3%) 資料なし→値上げについて検討できない

◆関西FD会費値上げに関する対応案

➤ 値上げに関して「許容できる」という回答が6割を超えているが、据え置きを要望する大学も少なくない

➤ 平成26年度は値上げをせずに据え置く

➤ 平成26年度総会の時点での状況により、例えば新たに特別経費などの外部資金の獲得が困難である場合などには、平成27年度よりの値上げを提案させていただく

◆総会のあり方について

- 平成24年度の総会は、定足数(会員校の半数)に達せず、総会の終了後に資料の郵送にて、各議題について承認を得なければならなかった
- 各大学・機関のFD活動に関わる組織的ポートフォリオをポスターセッションによってお互いに共有
＝ 相互評価の場と位置づけ
- 会員校の1/3の大学にポスターセッションを依頼 ＝ 義務化？
- 総会をFDや大学教育改革に関わる情報収集の場とするための講演 ＝ 『高等教育の新展開と学問の雄飛に寄せて』 大阪大学 喜久里 要 氏



◆関西FDその他の要望など

- **分科会の要望:**大学の規模や領域ごとに分科会を持たないか → そのような企画は事務局に提案 → 幹事会の承認を経て会員校に呼びかけ (ex. FDメディア研究SGなど)
- **FD活性化の提案:**よい授業のVTRアーカイブ、FD形骸化の歯止め方策の検討など、FD活性化の提案 → 関西FDとしては予算の問題もあるが、可能なことは小さなことでも積み上げていきたい → MOSTの利用もOK
- **情報提供:**FDの講師紹介は、関西FDではそのWGを閉鎖したが、京大の教育関係共同利用拠点「相互研修型FD共同利用拠点」において継続
- **他の大学間ネットワークとの関係:**大学コンソーシアム京都など、大学間ネットワークも他に多く活発に動いている → 各ネットワーク機能の特徴づけ ＝ 関西FDは、さまざまな課題をボトムアップに取り上げてFDネットワークを構成



◆大学教育研究フォーラムの参加費

- 第19回 一般参加 1,000円 682名の参加！
↓
- 第20回
 - ・ 一般 5,000円
 - ・ 関西FD連絡協議会会員校の関係者 4,000円
 - ・ 学生(大学院生・大学生等学生証身分を提示できる者) 3,000円
 - ・ 京都大学教職員等関係者 3,000円



◆FDネットワークの持続可能性？

- 大学だけの自助努力で持続可能か？
FD活動の自立化・教員の事務作業分担*etc.*
学内的組織再編のプレッシャー 支持獲得困難
リソースの維持 ← 財政的支援の必要性！
- FDネットワーク連携の必要性
ソーシャルキャピタルの有効利用と普及
- FDネットワークの意義の共有
社会の理解と支援に向けて





MEDC

岐阜大学 医学教育開発研究センター Medical Education Development Center (MEDC)

- 2001** 医学教育に関する全国共同利用施設として設置
全国に2か所：岐阜大学、東京医科歯科大学
専任教員6（教授2、准教授2、助教2）
客員教授（日本人、外国人）、専任事務官
- 2008** 大学院開設（医学教育学博士課程）
- 2010** 医学教育全国共同利用拠点として認定
医学教育分野では唯一：岐阜大学のみ
特任助教1名、研究補佐員1名
- 2011** 開設10周年

MEDC

ミッション

- 新しい医学教育の開発研究と普及
- 医学教育に貢献できる人材育成・FD
- 国内外の医学教育機関との連携・共同研究

知	・ PBL-Tutorial 教育の進化と普及 ・ E-Learning system の開発
心	・ Medical Communication 教育の進化と普及 ・ Professionalism 教育の開発
技	・ Simulation 教育の開発 ・ Teaching & Learning skill の普及

MEDC

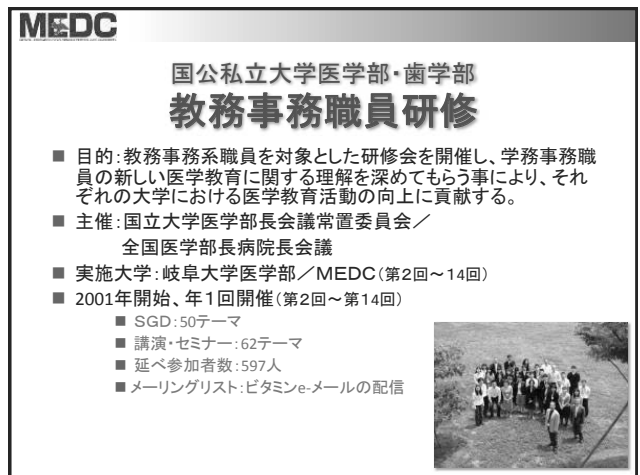
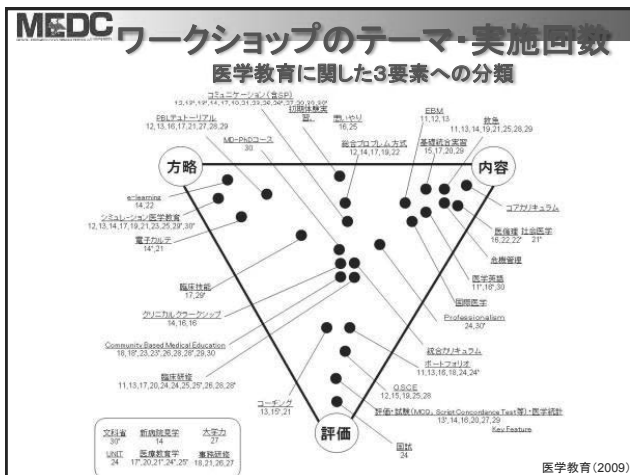
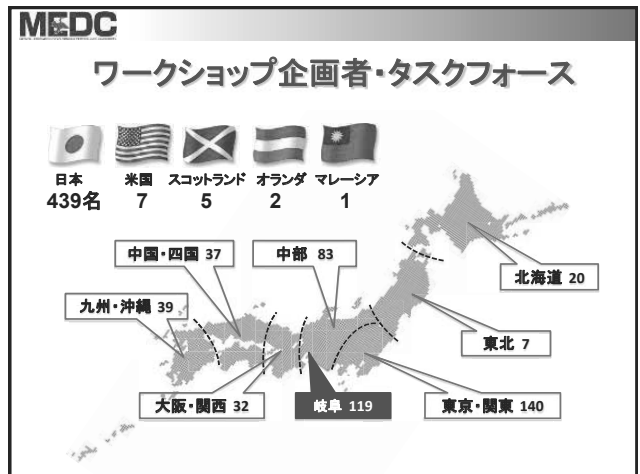
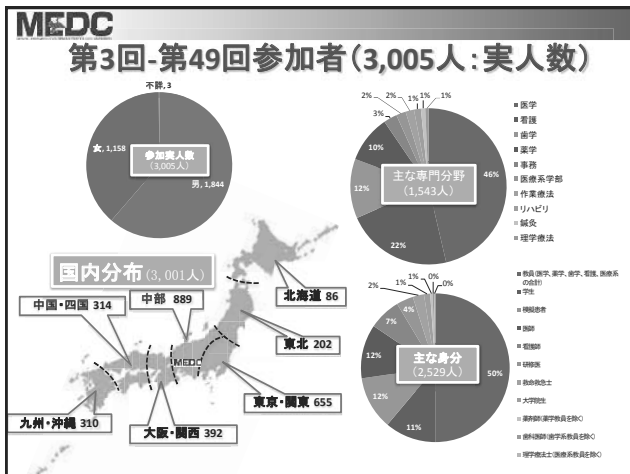
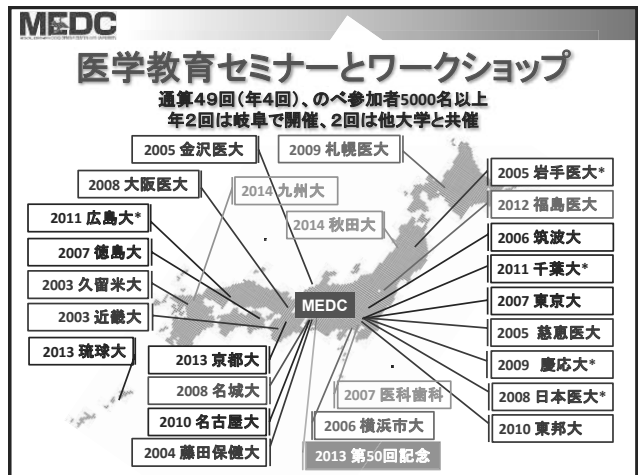
全国共同利用拠点としての任務

- **全国規模のFaculty Development** 毎年4回開催
「医学教育セミナーとワークショップ」
全国の医療系大学の教員、指導医、医療関係者、学生、模擬患者などを対象として開催
教育目標：カリキュラムの作り方
教育方法：新しい教育法の導入、地域での教育
指導法：講義、グループ学習指導、臨床現場での指導
評価法：学生評価、教育プログラム評価 etc
- **医学教育専門家の育成**
大学院「医学教育学」 現在6名在籍
(1年生2名、2年生3名、3年生1名、研究生1名)
医学教育専門家認定制度の構築（日本医学教育学会）

MEDC

全国共同利用拠点としての任務

- **医学教育法の開発・普及**
 - 問題基盤型教育（Problem-Based Learning）
 - 医療コミュニケーション教育
 - プロフェッショナルリズム教育
 - e-Learning（教育用ウェブサイト）
 - シミュレーション教育（スキルスラボ）
 - 多職種連携教育（IPE: 医学、歯学、薬学、看護、リハビリ etc）
- **国際交流**
 - 医療英語教育（海外臨床実習）
 - 客員教授の招聘



MEDC

PBLに関する取組

1. PBLに関するワークショップの開催
 - ・ 医学教育開発研究センター主催
 - ・ 各種教育機関における指導
2. PBLの改善に向けた岐阜大学での取組
 - ・ カリキュラムの改善
 - ・ 学生ガイダンス(指導法)の工夫
 - ・ テューター評価表の改善
 - ・ 学生テューターの試験的導入
3. 新しいPBL: internet PBL

MEDC

医療コミュニケーション教育
模擬患者 Simulated Patient の育成

- ・ 専門的なトレーニングを受けた市民ボランティアの協力
- ・ 医療面接を実際に行い、その後、学生にフィードバック
学生同士、模擬患者、教員から
 - 1、2年生の体験型授業への協力
 - 実技試験OSCE(4年生):初級編
 - 臨床実習中のスキルアップ(5年生):中級～上級編
- ・ 全国100以上の模擬患者団体との連携
- ・ 模擬患者育成指導者の養成



MEDC

プロフェッショナリズム教育

- 海外では行動科学を核としたプロフェッショナリズム教育が医学部の養成期間(4～6年間)を通じて行われるのが一般化
- 技能・態度面の教育アウトカムとして、プロフェッショナリズムに注目が集中
- ふり返りする専門家(reflective practitioner)
- ふりかえりの重要なツールとしてのポートフォリオ
→e-ポートフォリオ

岐阜大学: 初期体験実習

地域体験実習(1年生) e-ポートフォリオ

PBLガイダンス(能動学習、生涯学習)(2, 3年生)

医師・患者関係(3年生)

臨床実習入門(4年生)

医療面接実習(5年生) e-ポートフォリオ

MEDC

シミュレーション医学教育

- しっかりした準備教育を行ってから臨床現場に立つてほしいという社会的ニーズを満たすものとして、近年、急速に発展

1. シミュレーション教育に関するワークショップ
2. 日本Model & Simulation 医学教育研究会設立
2013年から日本医療シミュレーション学会に
3. シミュレーション動画教材
4. e-Learning システムの構築
5. スキルスラボの整備
6. 教育プログラム開発



MEDC

多職種連携教育(IPE)

IPEの開発とFDの全国展開

- 医療における幅広い専門職が連携してチーム医療を実践できるための能力(知識、技能、態度)の修得を目的とした多職種連携教育法を開発し、全国規模のFDを展開して広く普及を図る。

➢ MEDC・IPEプロジェクト(近隣大学とのコンソーシアム形成)

➢ 医学・歯学・薬学・看護・歯科衛生・作業療法・理学療法

➢ 学生のIPE体験

➢ 多職種連携医療教育共同開発事業

・ 申請件数: 16件

・ 採択件数: 5件

・ 独自プログラムの開発・実践

・ 共同シナリオの開発

・ ワークショップの開催



MEDC

国際交流

- 医学生の国際交流支援教育プログラム(2012年度)

国際的視野をもった医療人を育成するために、海外臨床実習はまたとない機会であり、多くの学生が参加できる準備教育を構築しつつある。

	日 付	トピックス	講師
第1回	5月18日	イントロダクション ~Basic Structure of medical interview, physical examination and exam order~	鈴木・久保田
第2回	6月15日	Role play in Japanese & English	西城・若林・鈴木
第3回	7月13日	海外臨床実習説明・研修報告会	西城・鈴木・久保田・Dr. Lefor
第4回	7月20日	医療面接 Medical Interview	西城・若林・Dr. Deshpande
第5回	9月14日	医療面接 Medical Interview	Dr. Lefor
第6回	9月28日	Physical Examination Basics I	Dr. Salcedo
第7回	10月11日	Medical Interview, Case presentation	Dr. Deshpande
第8回	10月19日	Physical Examination Basics II	Dr. Salcedo
第9回	11月9日	Case presentation	Dr. Oshimi
第10回	11月30日	Journal Club	Dr. Oshimi
第11回	12月14日	Advanced Clinical Reasoning Workshop	Dr. Salcedo, Dr. Thomas
第12回	12月18日	Medical Interview in English-基礎編	Dr. Evans
第13回	2月1日	Basic Trauma Management	Dr. Bhanji

MEDC

歴代客員教授(国外)

2001 Erik Driessen 医学博士、医学教育専門家 Maastricht University, The Netherlands Research Leadership in HealthCare (PSP 1998) Academic (PSP 2001) 国際化推進フェローシップ受賞 (PSP 2003)	2001 Furuya (Shoji) 医学博士、医学教育専門家 京都大学
2002 Philip Evans 医学博士、医学教育専門家 University of Edinburgh, Scotland, UK Practical English Communication (PSP 1998) Non-Pharmaceutical Intervention in the UK (PSP 1999) Master of Science in Clinical Education (PSP 2001) Education in Medical Education (PSP 2002) Academic Leadership in HealthCare (PSP 2003) Innovation in Research "Learning for Success" (PSP 2005)	2002 Kai-Min Liu ■ 台湾 医学博士 National Tsing-Tung University, Taiwan
2003 Ratanavadee Nangura 医学博士、医学教育専門家 Mahachulalongkornrajavidyalaya University, Thailand	2003 Peter J.M. Bartens 医学博士、医学教育専門家 Maastricht University, Maastricht, Netherlands Teaching medical ethics to young physicians in Japan: Cultural awareness, locally specific or global? (PSP 2005)
2004 Jyoti Ramani 医学博士、医学教育専門家 International Medical University, Malaysia	2004 Jennifer Omland 医学博士、医学教育専門家 University of Minnesota, Minnesota, USA Teaching medical ethics (PSP 1998) Basic Medical Education (PSP 1999) Graduate Medical Education (PSP 2002) Assessment in Medicine: reliability, validity and cross-cultural differences (PSP 2003)
2005 Gregg Cohen 医学博士、医学教育専門家 University of Maryland, USA	2005 Jan-Joost Rutmans 医学博士、医学教育専門家 Maastricht University, Maastricht, Netherlands Graduate Medical Education (PSP 1998) Research in Medical Education (PSP 1999) Research in Medical Education (PSP 1999) Research in Medical Education (PSP 1999)
2007 Chiradek Khamboonruang 医学博士、医学教育専門家 Chulalongkorn University, Thailand	2007 Trevor Gibbs 医学博士、医学教育専門家 Royal College of General Practitioners, Scotland Research in Medical Education (PSP 1998) Research in Medical Education (PSP 1999) Research in Medical Education (PSP 1999) Research in Medical Education (PSP 1999)

MEDC

医学教育ユニットの会

ユニットの会

医学教育の国際的な基盤に強い、異文化圏の教育から医学部全体で協賛し、統合的に取り組む数値の時代に入った。このように高度な医学教育体制の構築に専門的な教育が日本各地の医学部に誕生し、さらにこれらの教育の所産が新しい教育ユニットも設置された。その初期の教育は個人分野への取り組みに戸惑うことも多かったため、情報の交換を求めて自然発生的に「集まり」がもたれる事となった。

「医学教育ユニットの会」への入会希望者はMEDC(medc@nii.ac.jp)へお申込み下さい。

医学教育ユニットの会 申し込み合わせ事項

医学教育ユニットの会 機関名簿

医学教育ユニット 機関名簿は医学教育誌に年1回掲載の予定です。

- 構成大学(医学部・医学校)：70校
- 医学教育ユニット機関数：131
- メーリングリスト登録会員：471名

MEDC

成果報告・出版

日本の医学教育の挑戦
Challenge of Medical Education in Japan

医学教育の理論と実践
Theoretical and Practical Aspects of Medical Education

医療コミュニケーション
Medical Communication

模擬診療シナリオ集
Simulation Scenario Collection

マニュアルを越えた私の患者-医師コミュニケーションを！
Beyond the Manual: My Patients - Doctor Communication!

TUTORIAL SYSTEM
CORE TIME

スクリーン病院
Screen Hospital

Prattner Gibbs
Prattner Gibbs

医学教育セミナーとワークショップ報告書

事務研修報告書

MEDC

拠点としての今後の方向性

- 医学教育の国際認証（2023年問題）
 - ✓ グローバル・スタンダードに準拠したカリキュラム
 - ✓ 臨床実習の充実（72週問題）
- 医学教育者の人材育成
 - ✓ 医学教育専門家の育成（医学教育学会認定）
 - ✓ 各大学に専門家を配置
 - ✓ 研究者育成
- 医学教育研究の活発化
 - ✓ エビデンスに基づいた教育
 - ✓ 日本からの発信（輸入ばかりでなく輸出を）

MEDC

拠点としての今後の課題

2001 全国共同利用施設
共同利用施設としての予算措置
独法化に伴い運営交付金が包括化（学内での競争）

2010 全国共同利用拠点
2011～2014 拠点としての予算措置
多職種連携医療教育、医療人基礎力、全国FDの高度化

2015～ 拠点認定・予算措置の継続を希望

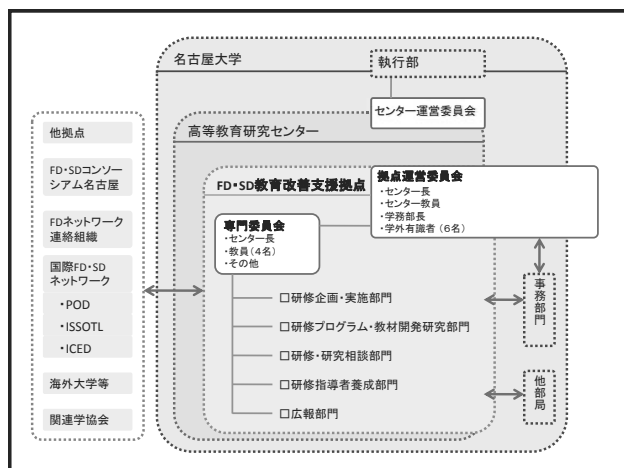
FDネットワーク代表者会議(2013.09.13、京都大学)

「名古屋大学FD・SD 教育改善支援拠点」の活動と課題

名古屋大学高等教育研究センター
夏目 達也

「FD・SD 教育改善支援拠点」の目的

- ①大学教員の教育能力および職員の職業能力の開発・向上を通じて、教職員の自発的な教育改善の取組を促進すること。
- ②中部地域を中心とした各大学における教育・学生支援の質向上を実現すること。



「FD・SD教育改善支援拠点」の活動内容

- ・対象者の職位・職務・専門性に対応した体系的FD・SDプログラムの開発・提供。
- ・プログラム関連教材の開発・提供。
- ・諸外国の拠点大学との連携。
 - －プログラム・教材開発。
- ・国際的FD・SD団体での教職員の研修。
- ・国内大学へのFD・SD実施のサポート。
 - －講師の派遣、各種支援ツールの提供

「FD・SD教育改善支援拠点」の活動内容

1. FD・SDの教材開発

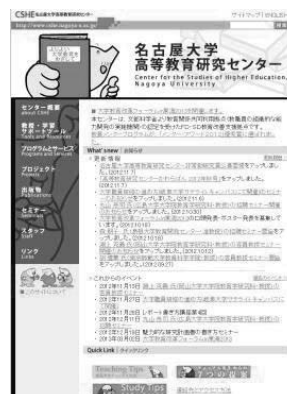
1.1 FD教材

- ・『名古屋大学新任教員ハンドブック』
- ・『Mei-Writing 日本語版: 学術論文の書き方入門』
- ・ファカルティガイド
- ・名古屋大学教員のための留学生受入ハンドブックのウェブ化

1.2 SD教材

- ・『大学の教務 Q&A』『大学のIR Q&A』

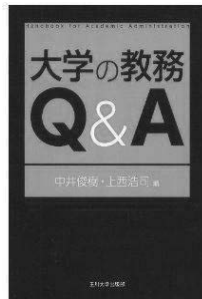
名古屋大学高等教育研究センターの活動内容



センター・ホームページで各種出版物、セミナー等の情報提供

<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/>

『大学教務のQ&A』 『大学教員準備講座』

中井俊樹・上西浩司編、2011
玉川大学出版部夏目・近田・中井・齋藤著、2010
玉川大学出版部

『大学のIR Q&A』

中井俊樹・鳥居朋子・藤井都百編、2013
玉川大学出版部ファカルティ・ガイド 教育改善のヒントを
A4サイズ1枚で

名古屋大学高等教育研究センター Faculty Guide	学生に的確なレポートを書かせる Promote Academic Writing
背景と論点	授業でレポートを書いた経験のある教員ならしも、安易なコピー＆ペーストで作成したレポート、意味不明なレポート、字がぐちゃぐちゃで読めないレポート、実行方針を無視したレポートなどにお目にかかったことがあるでしょう。一方、すばらしい出来のレポートを読むと、授業の授業が一気に変わったような気分になるものです。考えてみれば、われわれの大学教員も学生時代にレポートや論文の書き方について、教員や先輩のやり方を真似ながら毎日勉強で書きた人ばかりではないことと想像します。となると、今の学生のレポートにそれなりのレポートを書かせようとするなら、教員自身がまずこの書面をどこかで読む必要があるでしょう。つまり、自分の中に無意識的に蓄積された「アカデミック・ライティング」のノウハウを顕微鏡し、学生に伝えることが求められます。なお、中央図書館では平成21年度から文庫版のレポート作成のためのサポート・センターを設けて、研修を受けた大学院生が学部生を支援する試みを行っています。 ※サポート・センターに関するお問い合わせは内線3679（情報サービス課）まで。
実践の手法	1. 名大生がレポートを書けない理由 ・「おらについて論じる」ということの意味がわからない ・どういったレポートがよいレポートなのかについての説明がほしい ・出されたレポートが授業で読んだ内容との関係がよくわからない ・提出したレポートを返却してくれないので、どこが評価された、どこがなかったのかわからない

「FD・SD教育改善支援拠点」の活動内容

2. FD・SDプログラム開発の企画・実施
 - 2.1 「大学教育改革フォーラムin東海2013」の開催
 - ・2013年3月、名古屋大学で開催。参加者約400名
 - 2.2 高等教育研究センター主催セミナー
 - ・「招聘セミナー」等 10回
 - ・「客員教授セミナー」 4回
 - 2.3 教員向け各種セミナー・ワークショップ
 - ・「研究グループを率いるために」
 - ・ワークショップ「英語で教える」 その他

「大学教育改革フォーラムin東海2013」



「大学教育改革フォーラムin東海2013」



「FD・SD教育改善支援拠点」の活動内容

2.4 教員向けメンター・プログラム

- ・個人のニーズに対応したサポートの提供。

【教員メンタープログラムに期待される効果】

- － 職務や生活に関して気軽に相談できる相手を得る
- － 大学について理解を深める
- － 教育研究など職務上必要な知識やスキルを獲得する
- － キャリアの展望を考えるきっかけになる
- － メンター教員を介してさまざまなネットワークを作る

【メンター教員にとっての意義】

- － 新任教員との交流で新しいアイデアや活力。
- － 自らの教育研究を振り返り今後のキャリアを考えるきっかけに。

「FD・SD教育改善支援拠点」の活動内容

2.5 大学教員準備プログラム

- ・大学院の正規科目「大学教員準備講座」の開講(集中講義)

2.6 海外教職員派遣事業

- ・POD年次大会(米・シアトル)に派遣。

2.7 学部学生向け学習支援の各種セミナー

- － 教養教育院、中央図書館と共催。
- － 「レポート書き方講座」「人に伝わる話し方・プレゼンテーション入門」等

「FD・SD教育改善支援拠点」の活動内容

3. 他大学からの利用申請への支援

- ・協力要請のある大学等にセンター教員を講師として派遣。

- ・FD・SD等の各種相談への対応。

4. 地域における各種FD・SD情報の提供

- ・各種情報の提供
- － センター・ホームページ、メールマガジン、ニュースレター等

今後の活動方針・具体的内容

1. FD・SDプログラムの教材開発

<方針>

- － 教職員・学生の多様なニーズの発掘
- － 多様な職務・ニーズに対応した効果的なプログラムの開発

- ・学士課程学生向け：アカデミックライティング、図書館活用

- ・大学院学生向け：大学院共通教育、研究支援

- ・教員向け：専門を軸に研究会ベースで開発

- ・職員向け：教務研究、IR研究

今後の活動方針・具体的内容

2. FD・SDプログラム開発の企画・実施

<方針>

- ・教職員のプロフィール・ニーズに応じて、柔軟な形態のFD・SDを企画・実施。
- ・集合研修にこだわらず、多様な方法と内容で実施。

2.1 「大学教育改革フォーラムin東海2013」の開催FD・SDプログラムの開発

2.2 新任教員研修の新プログラムの実施

- ・従来のプログラムの改訂・実施

2.3 院生・ポストドク向けの学修とキャリア形成の支援

- ・研究支援プログラム

今後の活動方針・具体的内容

3. その他

- ・トップマネジメントの研究・調査。

- ・アカデミック・リーダーシップ研究会

- ・全国の高等教育研究者との共同研究

- ・大学経営陣向けリーダーシップ形成のための研修プログラム・支援ツールの開発

- ・管理職研究

- ・全国の主要大学(東北、京大、広大、愛媛大等)との共同研究

今後の活動方針・具体的内容

3. その他

- 「大学職員研修の進め方」の開催
 - －各大学の職員研修担当者等を対象に実施。岐阜大学とのジョイント（'12年11月）。
 - －研修の実施方法・内容、実施上の留意点等を協議。

職員研修担当者向けセミナー「大学職員研修の進め方」



FD・SD教育改善支援拠点の課題

1. 少ないスタッフ数で対応。
 - ・FD・SDの教材開発を活動の中心に位置づける。
 - ・多様なアクターへ共同研究・開発の呼びかけ
2. 教職員、大学組織の多様なニーズの把握
 - ・ニーズは多様であり、つねに変化。把握の努力を怠ることはできない。
 - ・潜在的なニーズの把握をいかに進めるか。
3. FD・SD拠点の活用によびかけ
 - ・情報の発信をいかに進めるか。

FD・SD教育改善支援拠点の課題

4. FD・SDの実施主体の形成
 - ・実施主体を積極的に引き受ける機関・アクターの形成・確保
 - FD・SDは他人任せでは効果を期待できない。
5. 開発した教材・プログラムの普及
 - ・いかに多くの大学に活用してもらうか。
 - ・そのために拠点として何が必要なのか。
 - ・活用による教育改善効果の検証

FD・SD教育改善支援拠点の課題

1. 拠点同士の共同事業
 - ・管理職調査の実施
 - ・共同研究
2. 地域の多様なネットワークとの連携
 - ・地域には、多様なネットワークが存在。
 - ・大学・高等教育以外にも。
 - ・多様なネットワークといかに連携、効果を引き出すか。

福井県のFD活動 ーFDチームを中心としてー

福井県学習コミュニティ推進協議会（フレックス）

報告：FD Team Leader
仁愛女子短大
内藤 徹

フレックスとは

F-LECCS

- 「学習コミュニティ」をキーワードに平成20年度から連携を開始

（2013～敦賀短大は廃止となり、2014～敦賀市立看護大に。）

- Fukui LEarning Community Consortium(F-LECCS)

- 福井県は恐竜が有名、T-RexからのもじりーTレックス→フレックス



2

2

フレックスの目標

F-LECCS



継続的な大学連携基盤の構築
（人のネットワーク・ICTシステム）

学習コミュニティによる大学間および
地域コミュニティの活性化

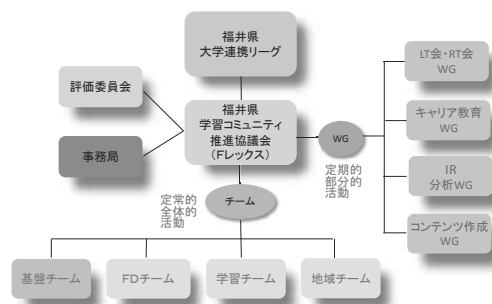


大学間連携による
大学教育の改善と改革の推進

3

フレックス運営体制

F-LECCS



4

4

FDチームの目標（3年間）

F-LECCS

●「相互研修型FDの推進」を基調

- 【各校のFD活動】各教育機関における、実情に応じたFD活動の独自の創造的な展開
- 【協働のFD活動】県内の高等教育機関相互のFD活動の交流と協働による教育改善活動の推進
- 【他との連携】高等教育機関をとりまく、関係教育機関・企業・地域との教育改善をめざす連携の追求
- 【FD資料の蓄積】連携機関のFD資料などの蓄積と国内外の優れたFD活動の調査と紹介
- 【人的連携の環】FD活動推進の人的ネットワークの構築

5

具体的な活動

F-LECCS

- 定期的な情報交換
 - 月に1回の対面会議を実施（主に@仁愛女子短大）
- 合宿研修会（2013年は9/9- /10）
 - より深い議論をするために実施
 - キャリア教育、授業デザインなどがテーマ（2013）
 - cf. キャリア教育、学習評価、ポートフォリオ（2012）→次頁参照
- シンポジウムの実施
 - 外部から講師を招きキャリア教育のシンポジウムを11月～12月頃に実施
- 外部組織との連携
 - キャリア教育で、「ふくいキャリアフォーラム実行委」と連携
- 教育改善を目的とする学生意識調査アンケートを継続的に実施
 - 昨年度から一部組織で記名式でも行っている

6

FD活動を持続させるには

- ボトムアップ的な活動を多く取り入れる。
- 教員の都合の良い時間を調整し、定例のミーティングを行う。例：月1回、都合の良い曜日、便利な会場、...
- 何でも悩みを話せる内容で、雰囲気をよくする。例：楽に話し聞ける、飲み物（茶、コーヒー、など）、...
- 批判しない。（学会などの発表会ではない。）など...

福井県のFD活動

END

福井県学習コミュニティ推進協議会（フレックス）
FD Team

Thank you for your attention.

＊ F レックス第4回FD合宿研修会 ＊

主 旨：F レックス参加校共同のFD活動として、参加教職員のスキルアップを図るための合宿研修を行う。合わせて、福井県内高等教育機関の教職員の交流を促進する。

日 時：2013年 9月9日（月）～9月10日（火）

会 場：福井工業高等専門学校〔大講義室〕
〒916-8507 鯖江市下司町 Tel.0778-62-0111

宿泊先：ラポーゼかわだ
〒916-1235 鯖江市上河内町 19-37-2 Tel.0778-65-2761)



日程

9／9（月）

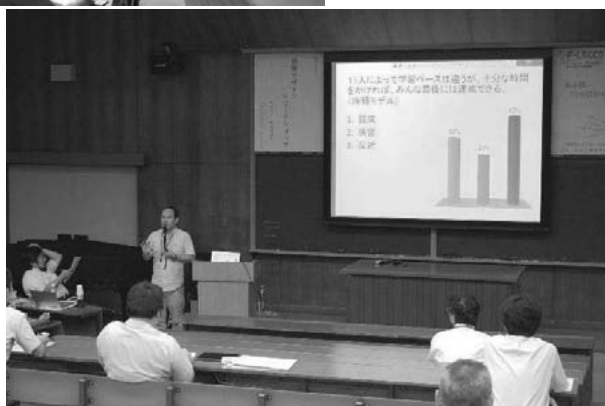
13：00～ 開会式 司会：内藤 徹（仁愛女子短期大学）
挨拶 山川 修（F レックス会長：福井県立大学）



13：10～ 「授業デザイン」 司会：内藤 徹（仁愛女子短期大学）
（①講義と②ワークショップ）

鈴木克明氏（熊本大学・社会文化科学研究科）
田中洋一氏（仁愛女子短期大学）

途中：コーヒーブレイク



17:30～ 宿泊所へバスで移動

19:00～ 情報交換会、夕食

9/10 (火)

9:00～ ③講演「若手のやる気を引き出す教育」

司会：杉原一臣（福井工業大学）

石本 浩氏（株式会社 石本石材・社長）、
鈴木 浩氏（浜本テクニカル・総務部長）



9 : 4 0 ~ 休息

1 0 : 0 0 ~ ④フリートーク（質疑応答も含め自由に発言し議論する）

1 1 : 5 0 ~ 閉会式 司会：内藤 徹（仁愛女子短期大学）
閉会挨拶 坪川武弘（F レックス副会長：福井工業高等専門学校）



参加費 15,000円
懇親会費は別途集金

問い合わせ先 仁愛女子短期大学 C105 内藤研究室 E-mail : t-naito@jin-ai.ac.jp
Tel. & Fax.: 050-3532-9011

申し込み先 福井工業高等専門学校 江本研究室 or 坪川研究室

大学コンソーシアム石川のFD・SD事業と 大学間連携共同教育推進事業「学都い しかわ・課題解決型グローバル人材育成 システムの構築」

FDネットワーク代表者会議

2013年9月13日

青野 透

大学コンソーシアム石川教職員研修専門部会
部会長 （金沢大学）

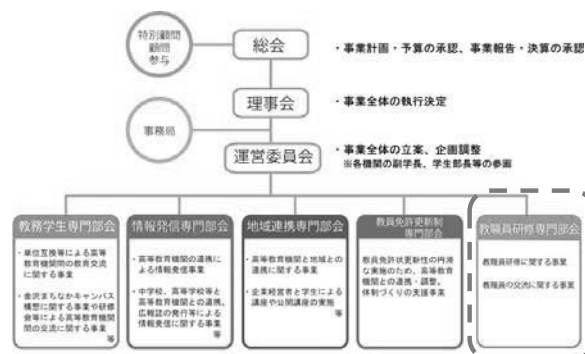
報告内容

- 大学コンソーシアム石川で行って
きたFD・SD事業とその課題
- 大学間連携共同教育推進事業
「学都いしかわ・課題解決型グロ
ーカル人材育成システムの構築」
によるFD・SD活動

大学コンソーシアム石川の事業

- 1.単位互換等による高等教育機関間の教育交流に関する事業
- 2.調査研究や公開講座の実施等による高等教育機関・地域連携に関する事業
- 3.中学校、高等学校等と高等教育機関との連携、広報誌の発行等による情報発信に関する事業
- 4.合同の学園祭や研修会の実施等による高等教育機関間の交流に関する事業

一般社団法人大学コンソーシアム石川 組織図



大学コンソーシアム石川 参加高等教育機関 20

金沢大学
北陸先端科学技術大学院大学

石川県立看護大学
石川県立大学
金沢美術工芸大学

金沢工業大学
金沢星稜大学
金沢医科大学
北陸大学
金沢学院大学
金城大学
北陸学院大学

金沢学院短期大学
北陸学院大学短期大学部
金城大学短期大学部
星稜女子短期大学
小松短期大学

石川工業高等専門学校
金沢工業高等専門学校

放送大学

参加機関マップ



利用拠点

- ・ 石川県政記念しいのき
迎賓館(セミナールーム)



- ・ 石川四高記念文化
交流館(多目的利用室)



6

教職員研修専門部会

教職員研修専門部会

(加盟全機関から教員1名・職員1名が参加)

部会長: 青野 透(金沢大学)

副部会長: 奥村 克司

(学校法人稲置学園 総務課長)

部会の下に、FD企画委員会、SD企画委員会

7

FDネットワーク代表者会議 2012年度報告より

【現状】

年度初めと年度末の部会での各委員からの要望聴取、意見交換。

各イベントのアンケート結果集計と加盟機関へのフィードバック。

SD活動・ニーズアンケート(2010)、FD活動・ニーズアンケート(2012)の実施。

8

委員からの意見

- ・ 地域を挙げて、いしかわの学生を底上げできるような取組を行うべき。
- ・ 新任教員、職員の研修の実施・慣例化
- ・ 加盟機関の教育実践のグットプラクティスを掘り起こし、紹介してほしい。
- ・ 学生も参加できるような企画実施
- ・ 個別大学で実施できない研修機会の提供

9

FD活動・ニーズアンケートから

- ・ 若手教員(又は中堅教員)同士の交流機会提供
- ・ 時機に合ったテーマ設定と機会提供
- ・ 希望する具体的テーマ
 - 初年次教育実践
 - 発達障害学生支援
 - 高等教育政策に関する情報提供
 - 効果的な授業実践の紹介 ほか
- ・ FD・SD研修会開催日時(時間帯)の再検討

10

今後の展望

- FD・SD事業のプログラム化
- 「大規模大学から小規模大学へ」という資源共有意識の醸成
 - ⇒ FD活動・ニーズアンケート等を踏まえたメニューの再整理。
 - ⇒ 加盟機関内の人的資源をリストアップ。
 - ⇒ コアメンバーの強化
 - ⇒ 共通化できるテーマの更なる掘り起こし、実践
- 多様な関係者が集う場としてのコンソーシアムの充実

11

2011年度事業実績

開催月	内 容
5月	第1回FD・SD研修会「学生の学習意欲を高め、双方向授業を展開するためのクリッカー活用術」
6月	第2回FD・SD研修会「高等教育機関の風評リスク対策とコミュニケーション戦略」
7月	第3回FD・SD研修会「大学における発達障害が疑われる学生への支援」 SDワークショップ2011 「集まろう大学職員！ ―問題意識を共有するために―」
9月	第4回FD・SD研修会「京都地域18大学・短期大学によるFD連携事業 ～京都FD開発推進センターの挑戦～」
10月	第5回FD・SD研修会「学習成果を重視した学士課程教育の構築に向けて ―カリキュラムポリシー（CP）・ディプロマポリシー（DP）策定のためのフレームワークとは～」
11月	第6回FD・SD研修会 「大学等のガバナンスと経営戦略」
12月	SDフォーラム 「大学職員としてのチャレンジ ―大学職員として何ができるか―」
2月	短期大学FDフォーラム 「金沢工業大学における教育支援体制の紹介と施設見学」
3月	第7回FD・SD研修会 「障害学生の就職活動に対する支援」 第8回FD・SD研修会 「大学コンソーシアム石川のより有効な活用方法について―UCIポータルと教材の利用を中心に―」

12

2012年度事業実績

（2012年度FDネットワーク代表者会議にて報告済み）

開催月日	内 容
6月8日	第1回FD・SD研修会「ソフトウェア資産管理セミナー」 講師：廣田 雅彦 石川県企画振興部情報政策課課長補佐
6月15日	第2回FD・SD研修会「ワークライフバランスの実現に向けて」 講師：宮原 淳二（株）東レ経営研究所ダイバーシティ&ワークライフバランス部長
7月20日	第3回FD・SD研修会「研究活性化とリサーチ・アドミニストレーター」 講師：鳥谷 真佐子 金沢大学先端科学・イノベーション推進機構 リサーチ・アドミニストレーター
8月4日～5日	大学経営人材養成合宿研修「大学職員としての自分を見つめ、他人に学ぼう！」
8月30日	第4回FD・SD研修会「「今求められる組織的な外部資金獲得方策―申請者及び支援者の立場で考える―」 講師：小澤 芳明 明治大学研究推進部生田研究知財事務室室長
9月16日	第5回FD・SD研修会「「高等教育機関は発達障害者支援にどう貢献すべきか―精神科医の経験をもとに―」 講師：納富 恵子 福岡教育大学教職大学院教授
9月25日	第6回FD・SD研修会「「電子黒板の教育現場での活用について」 講師：井上 大輔 キーパッド・ジャパン株式会社

13

大学コンソーシアム石川 平成24年度第7回FD・SD研修会

時：2012年11月14日（水） 18時～19時30分
所：石川四高記念文化交流館
テーマ：「ソーシャルメディアでつなぐアクティブラーニング支援」
講師：山田 政寛
金沢大学大学教育開発・支援センター准教授

14

大学共創フォーラム2012 みんなで大学教育について語ろう

時：2012年 12月22日（土）13:00～17:00
所：金沢学生のまち市民交流館
対 象：大学教職員、大学生・大学院生、市民
主 催：大学コンソーシアム石川、大学共創プロジェクト（金沢大学大学教育開発・支援センター、富山大学大学教育支援センター、福井大学高等教育推進センター、北陸先端科学技術大学院大学大学院教育イニシアティブセンター）
共催：大学行政管理学会中部・北陸地区研究会

15

大学コンソーシアム石川 平成24年度第8回FD・SD研修会

時 2013年1月22日（火） 18時～19時30分
所 石川県政記念しいのき迎賓館
※手話通訳による情報保障
テーマ「障害学生に対する合理的配慮―文部科学省『障がいのある学生の修学支援に関する検討会報告（第一次まとめ）』について」
講師：吉永 崇史
富山大学学生支援センター特命准教授

16

大学コンソーシアム石川 平成24年度第9回FD・SD研修会

時 2013年 2月5日（火） 18時～19時30分
所 石川県政記念しいのき迎賓館
※手話通訳による情報保障
テーマ「学務窓口から始める障害学生支援―聴覚障害学生支援の具体例を中心に―」
講師：細見 知代
佛教大学学生支援部学生支援課長

17

大学コンソーシアム石川 2013年度FD・SD事業

「大学経営人材養成合宿研修」

時：平成25年8月17日（土）・8月18日（日）

所：三河湾国定公園・三谷温泉 ホテル明山荘

主催：大学コンソーシアム石川

大学行政管理学会中部・北陸地区研究会

18

報告内容

●大学コンソーシアム石川で行ってきたFD・SD事業とその課題

●大学間連携共同教育推進事業
「学都いしかわ・課題解決型グローバル人材育成システムの構築」
によるFD・SD活動

19

「平成24年度大学間連携共同教育推進事業公募要領」

国公立の設置形態を超え、地域や分野に応じて大学間が相互に連携し、社会の要請に応える共同の教育・質保証システムの構築を行う取組

達成目標が明確で高い成果が見込める取組

（取組の種類例）「複数の種類の取組を有機的に組み合わせ」「教育の改革サイクル」

・教育課程の体系化（授業科目間の連携や整理、厳格な成績評価、明確な到達目標に基づく高度な教育モデル等）

・共同プログラムの構築（共同の教育プログラムの実施、単位互換、高度な教育資源の共同利用等）

・組織的な教育の実施（課題解決型・能動的学修、きめ細かな履修指導、シラバスの整備、学修支援環境の改善、障害学生支援等）

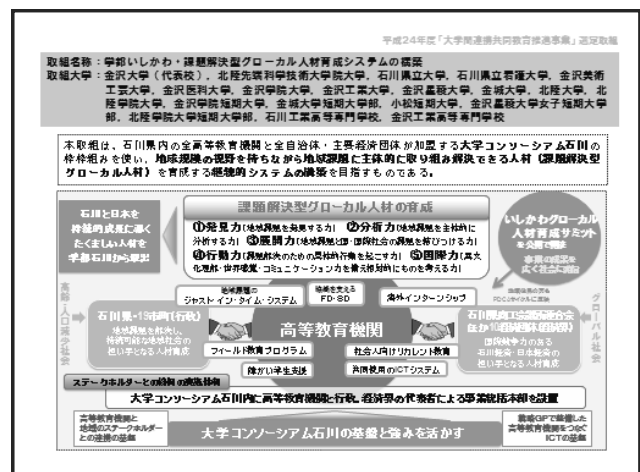
・教学ガバナンスの強化（FD、教員の教育評価、教職協働、柔軟な人事・経営システム等）

・教育の質保証の確立（学修成果や到達度の把握、IR、教育の実施状況の評価の仕組みの構築、地域一体となった高大連携等）

「地域連携」

地域にある大学等が、学生を送り出す地域のステークホルダー（自治体、経済団体、企業、NPO等）との課題の共有と協働の下、分野を超えてネットワークを形成し、当該地域を生きる学生に対し、大学等の枠を超え、様々な教育資源の活用による充実した教育と質保証の共通基盤を構築するもの。 76件の応募⇒25件採択

22



「学都いしかわ・課題解決型グローバル人材育成システムの構築」(平成24年度～28年度)

金沢大学(代表校)／北陸先端科学技術大学院大学／石川県立大学／石川県立看護大学／金沢美術工芸大学／金沢医科大学／金沢学院大学／金沢工業大学／金沢星稜大学／金城大学／北陸大学／北陸学院大学／金沢学院短期大学／金城大学短期大学部／小松短期大学／金沢星稜大学女子短期大学部／北陸学院大学短期大学部／石川工業高等専門学校／金沢工業高等専門学校

24

「学生にこれらの能力を獲得させるには充実した教育プログラムの設定とその質保証が必要だが、単独機関ではこのための教育資源が限られ、それらを下支える学生・教職員の支援システムの構築も容易でない。それゆえ、このような人材の育成には県内高等教育機関がそれぞれの特性・専門性を生かして機能分化を前提に緊密に連携し、かつ地域のステークホルダーと協働するしくみの構築が必要となる。そのしくみを作り上げるうえで、高等教育機関の集積が高く「学都いしかわ」を標榜している石川県にはすでに県内全高等教育機関と県内全自治体・主要経済団体等が加盟する大学コンソーシアム石川が存在し、共同教育や合同FD・SD、あるいは大学と地域ステークホルダーとの連携事業等の経験を蓄積し、一定の成果を挙げてきたことは重要である。我々はこの大学コンソーシアム石川の強みを活かし、それを課題解決型グローバル人材育成の方向でステップアップさせることで、さらなる各機関の機能分化と大学・地域ステークホルダー間の連携強化を同時に行いながら、高い成果を上げることができるものと確信する。」

25

障がい学生支援等グループ企画FD・SD

第1回障がい学生支援セミナー

「聴覚障がい学生に対する合理的配慮の実質化—大学間連携が目指すもの—」

時:平成25年3月8日(金) 午前10時～15時

所:金沢星稜大学 本館2階 A21室

後援:日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク(PEPNet-Japan)

協力:社会福祉法人石川県聴覚障害者協会・石川県聴覚障害者センター

26

第2回障がい学生支援セミナー「高等教育を学ぶ権利と聴覚障がい・発達障がい」

時:平成25年3月15日(金) 13時30分～

所:しいのき迎賓館 3階 セミナールームB

「手話による大学の授業情報保障」

講師 宮原 麻衣子

「大学における発達障害学生の現状と支援の取組み」

講師 苗村育郎 秋田大学保健管理センター所長

「大学生の発達障害とキャンパスライフウェルネス研究の視点より」

講師 杉田 義郎 大阪大学保健センター教授・大学院医学系研究科教授

第3回障がい学生支援セミナー「高等教育機関における障がい学生修学支援の現状と課題」

後援:日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク(PEPNet-Japan)協力:社会福祉法人石川県聴覚障害者協会・石川県聴覚障害者センター

時:2013年4月22日(月) 18時～19時30分

所:石川県政記念しいのき迎賓館

演題 「全国調査結果から見る障がい学生修学支援の現状と課題」

講師 田中 久仁彦 独立行政法人日本学生支援機構 障害学生支援課長

28

第4回障がい学生支援セミナー「大学とハローワークとの連携」

時:2013年6月24日(月) 15時00分～16時30分所:石川県政記念しいのき迎賓館

協力:社会福祉法人石川県聴覚障害者協会

「大学とハローワークとの連携—発達障がいがあると思われる学生への就職支援」

講師 金寺 幸子(ヤングハローワーク金沢)、八尾 章子(ハローワーク金沢 就職支援ナビゲーター 発達障害者支援分)、指定発言者 濱田里羽(金沢大学大学教育開発・支援センター特任助教)

29

FD・SD共同プロジェクトグループ

平成25年度第2回会議(ブレインストーミング)

時:平成25年8月27日(火)10:00～17:00

所:金沢大学角間キャンパス総合教育講義棟

内容:

FD・SD共同教育プログラムのアイデア出し(ブレインストーミング)

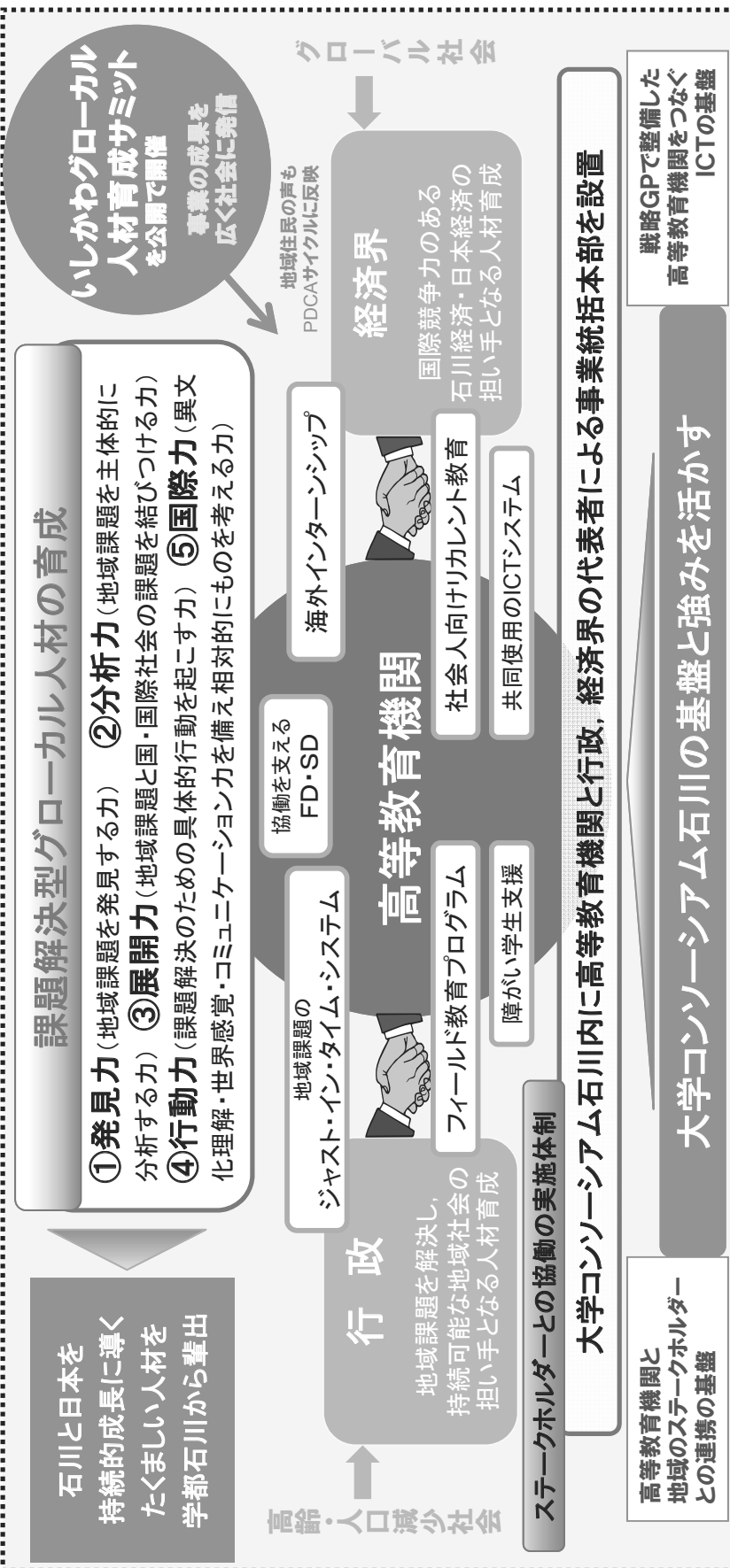
30

平成24年度「大学間連携共同教育推進事業」選定取組

取組名称：学都いしかわ・課題解決型グローバル人材育成システムの構築

取組大学：金沢大学（代表校）、北陸先端科学技術大学院大学、石川県立大学、石川県立看護大学、金沢美術工芸大学、金沢医科大学、金沢工業大学、金沢工業短期大学、金城大学、金城大学短期大学、北陸学院大学、金沢学院短期大学、金沢学院短期大学、金城大学短期大学、小松短期大学、金沢星稜大学女子短期大学部、北陸学院大学短期大学部、石川工業高等専門学校、金沢工業高等専門学校、金沢工業高等専門学校

本取組は、石川県内の全高等教育機関と全自治体・主要経済団体が加盟する大学コンソーシアム石川の枠組みを使い、地球規模の視野を持ちながら地域課題に主体的に取り組み解決できる人材（課題解決型グローバル人材）を育成する継続的システムの構築を目指すものである。



FDネットワーク会議(2013.9.13)

看護学教育研究共同利用拠点の現況と課題

看護学教育におけるFDマザーマップの開発と
大学間共同活用の促進プロジェクト千葉大学大学院看護学研究科
附属看護実践研究指導センター
北 池 正

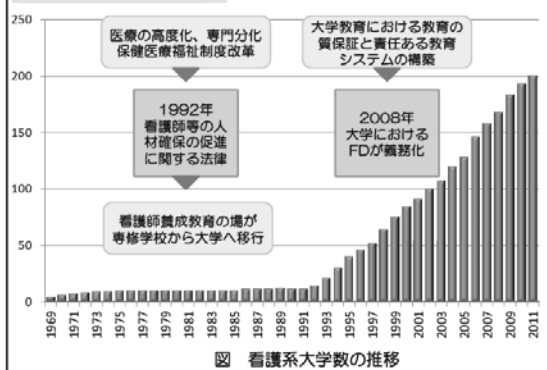
看護学教育研究共同利用拠点 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター

プロジェクトの概要

看護学教育研究共同利用拠点 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター

プロジェクトの背景

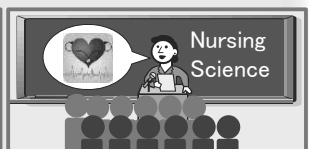
急増する看護系大学



看護学教育研究共同利用拠点 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター

プロジェクトの背景

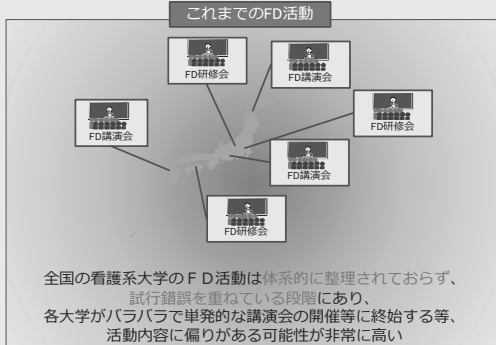
看護学教育の特質をふまえた大学教員の能力開発へのニーズ

看護・医療の高度化・専門分化、保健医療福祉制度改革に伴い、
変化する役割にキャッチアップし、
より高度な実践能力を持つ看護教員が求められている役割の拡大等、看護職に対する社会の期待に対応するとともに、
国民の健康増進に資するため、
看護を学問として教授できる能力を持つ看護教員が求められている大学化が進む看護学教育において、看護職としての実務能力と看護を学問として教授する能力の
両方を兼ね備えた大学教員の能力の育成・強化に資する全国的な体制を構築することが喫緊の課題

看護学教育研究共同利用拠点 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター

プロジェクトの背景

現状と課題



看護学教育研究共同利用拠点 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター

プロジェクトの目的

目 的

各看護系大学が高等教育における看護学教育の特質を
ふまえた有効なFD(ファカルティ・ディベロップメント)を計画的に企画・実施・評価できるように支援する

1. 高等教育における看護学教育の特質をふまえた体系的なFDマザーマップおよびFDプランニング支援データベースを開発する
2. 開発したFDマザーマップを看護系大学間で共同活用できる体制を構築し、全国の基幹校で研修を受けた教員(ファカルティ・ディベロッパー)により推進体制を構築する

看護学教育研究共同利用拠点 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター

プロジェクトの意義

意義

- ・開発されたFDマザーマップを利用し、各看護系大学が必要なFDの内容を分析でき、現状を可視化できる
- ・データベース機能によりFDに利用できる資料(物的資源)や講師(人的資源)などを検索できる
- ・FD実施後の評価を集約してゆくことが可能となる
- ・活用することで大学間の相互交流が活性化される
- ・大学間共同活用体制の構築により、FDの質の向上に貢献できる

看護学教育研究共同利用拠点 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター

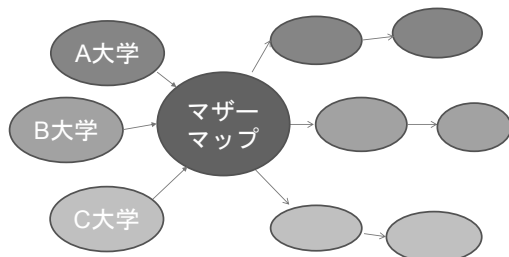
用語解説

FDマザーマップ

看護系大学において、看護学を学ぶ学生に教育活動を行う教員を対象に、看護系大学教員として備えるべき能力を行動レベルで示した、体系的な見取図

看護学教育研究共同利用拠点 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター

マザーとは



FDマザーマップの開発

1. プロジェクト組織

看護実践研究指導センター

北池 正 センター長
野地 有子 教授
和住 淑子 教授
黒田 久美子 准教授
○宮芝 智子 特任講師
○松田 直正 特任助教
※錢 淑君 准教授
※遠藤 和子 特任准教授
※鈴木 友子 特任助教
OH23年度のみ
※H24年度から

専門委員会(高等教育系)

川島 啓二 国立教育政策研究所高等教育研究部 総括研究官
佐藤 浩章 愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室 准教授
近田 政博 名古屋大学高等教育研究センター 准教授
加藤 かおり 新潟大学教育・学生支援機構 大学教育機能開発センター 准教授

専門委員会(看護学系)

松浦 和代 札幌市立大学看護学部 教授
吉沢 豊予子 東北大学大学院医学系研究科 教授
飯岡 由紀子 聖路加看護大学看護学部 准教授
永山 くみ子 富山大学大学院医学薬学研究部 教授
阿曾 洋子 大阪大学大学院医学系研究科 教授
雄西 智恵美 徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部 教授
井手 知恵子 大分大学医学部看護学科 教授
正木 治恵 千葉大学大学院看護学研究科 教授・研究科長
宮崎 美砂子 千葉大学大学院看護学研究科 教授
吉本 照子 千葉大学大学院看護学研究科 教授
中山 登志子 千葉大学大学院看護学研究科 准教授

看護学教育研究共同利用拠点 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター

プロジェクトの年次計画

事業フェーズ		看護学教育におけるFDマザーマップの開発フェーズ			大学間共同活用体制の構築と展開フェーズ	
実施年度		平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度
具体的内容	マザーマップ	開発準備 看護系大学教員に求められる能力の明確化	開発 FDマザーマップ開発	試用 FDマザーマップを複数大学で試用	洗練 FDマザーマップの活用ガイドラインを作成・基幹校を中心にFDマザーマップ活用に向けた職位別研修を実施	実用化
	FDプランニング支援データベース	開発準備 現状のFDプログラムの実態調査	開発準備 各看護系大学のもつFDに関する人的・物的資源の情報をFDマザーマップに集約し、データベース化する	開発・試用 全国に公開	活用 基幹校を中心にFDマザーマップの大学間共同活用システムを整備	受益者負担システム検討
	専門委員会情報発信	検討・検証・質の担保・国際発信準備 教員の能力を発展させるためにFDの企画・実施・評価支援システム構築を検討 FD先進地域との会議	各大学が相互に活用可能なFDの企画・実施・評価支援システム構築を検討	FDマザーマップの試用後の効果の検証・国際発信の準備	成果の情報発信 FDマザーマップを活用した看護教員の能力開発に関する情報を国際発信する	国際シンポジウム

看護学教育研究共同利用拠点 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター

プロジェクト取り組み・FD実態調査

FD実態調査

調査目的: 看護系大学におけるFD活動の実態を把握することによってFDマザーマップの内容、活用方法を検討する

調査対象: 全国看護系大学 209校

調査期間: 2012.12～2013.1

調査内容: FD実態(実施状況)

体制、予算、企画・運営上の困難、件数、本センターへの要望 など

FDプログラム

時間、参加人数、対象者、目的、講師、教材作成者、実施方法、名称 など

看護学教育研究共同利用拠点 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター

プロジェクト取り組み・FD実態調査

調査結果：FD実態

- 回収数 71校 (34.0%)
国立24校 公立17校 私立30校
- 回答者のFD活動における立場

委員長等の責任者	40名 (56.3%)
実行委員等の活動の一員	17名 (23.9%)
その他	12名 (16.9%)
- FD委員会の有無

あり	62校 (87.3%)
なし	9校 (12.7%)

看護学教育研究共同利用拠点 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター

プロジェクト取り組み・FD実態調査

調査結果：FD実態

- FDに関する予算の有無 n=71
ある：39校 (54.9%)
ない：31校 (43.7%)

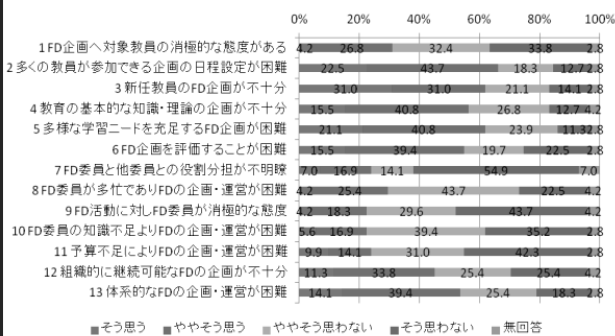
「予算あり」の大学の予算金額	予算額		大学数 (%)
	平均	中央値	
平均	32.2万円	17.5万円	
中央値	17.5万円		
範囲	3～227万円		
	～10万	10	(25.9)
	11～20万	9	(23.1)
	21～30万	5	(12.8)
	31～40万	0	(0.0)
	41～50万	1	(2.6)
	51万～	5	(12.8)
	無回答	9	(23.1)

看護学教育研究共同利用拠点 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター

プロジェクト取り組み・FD実態調査

調査結果：FD実態

- FDの企画・運営における困難について (n=71)



■ そう思う ■ ややそう思う ■ ややそう思わない ■ そう思わない ■ 無回答

プロジェクト取り組み・FD実態調査

調査結果：FD実態

- FDの企画・運営における困難について (自由記載、回答より一部抜粋)

- 学部授業や実習以外に大学院の授業があるため、全員参加となると、時間調整が困難である
- FD委員でありながら、知識が無いため運営することが困難です。研修会の参加も、日程調整がつかず見送り状態です。何をどうして進めたら良いのが困っています。
- 企画を催しても、率先して参加する職員は限られており、結局個人的に声をかけて参加を促すことで、少々強制しているようなところもあるような気がしています。
- 放射や検査と共通したテーマで行っているため、看護特有のFDの企画がない。
- FD委員長が、FD活動を授業評価→教員評価→教員の人事考査につながるという思い込みからFD活動にむしろブレーキをかけていた。

看護学教育研究共同利用拠点 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター

プロジェクト取り組み・FD実態調査

調査結果：FDプログラム

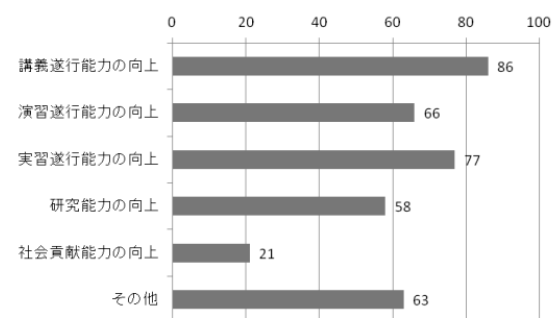
- 平成22年度、23年度に実施したFDプログラムについて
回答校 59校
FDプログラムの回収数 198部
- FDプログラムの件数
平成22年度 平均2.1件 (0～17件)
平成23年度 平均2.6件 (0～14件)

看護学教育研究共同利用拠点 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター

プロジェクト取り組み・FD実態調査

調査結果：FDプログラム

- 実施したプログラムの目的 n=190 (複数回答)



看護学教育研究共同利用拠点 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター

プロジェクト取り組み・FD実態調査

調査結果：FDプログラム

・講師の所属（複数回答）

（複数選択）	N=183	(%)
所属する看護系学部・学科	87	(47.5)
学内の他学部・学科	21	(11.5)
学外の研究機関	12	(6.6)
学外の大学（看護系）	25	(13.7)
学外の大学（看護以外）	34	(18.6)
その他	28	(15.3)

看護学教育研究共同利用拠点 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター

プロジェクト取り組み・FD実態調査

調査結果：FDプログラム

・実施方法（複数回答）

	N=193	(%)
講義	143	(74.1)
グループワーク	86	(44.6)
その他	47	(24.4)

看護学教育研究共同利用拠点 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター

プロジェクト取り組み・FD実態調査

調査結果：FDプログラム

実施したFD企画のテーマ（自由記載、回答より一部抜粋）

- ・経験型学習における教師の役割再考
- ・現代の大学生の理解と教育力向上の戦略について
- ・ティーチング・ポートフォリオとは
- ・実習指導に関する教員の研修会
- ・Evidence Based Nursing と 研究論文の評価
- ・学生のやる気を引き出すコミュニケーション
- ・教員への教育・研究支援システムの整備
- ・事例で学ぶアカデミックハラスメント
- ・マニュアル化世代に対する教職員の対応のあり方を考える
- ・本学の予算に関するFD
- ・教員研修会：建学の精神について
- ・海外派遣のナレッジマネジメント
- ・採択される研究助成金申請書の書き方

看護学教育研究共同利用拠点 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター

プロジェクト取り組み・FDマザーマップ

1. FDマザーマップの枠組みの構築

1) 全体構造



要素：看護学系大学教員の「能力」を構成する

レベル：能力の発展の段階

レベルⅠ 知る、レベルⅡ 自立してできる、レベルⅢ 支援・指導、拡大できる

看護学教育研究共同利用拠点 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター

プロジェクト取り組み・FDマザーマップ

4. 「看護学教育におけるFDマザーマップ」の修正

ヒアリング結果を受けて修正

FDマザーマップの全体構成



看護学教育研究共同利用拠点 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター

プロジェクト取り組み・FDマザーマップ

3. ヒアリングの実施

ヒアリング対象校

甲南女子大学
看護リハビリテーション学部看護学科
岡山県立大学
保健福祉学部看護学科

目白大学看護学部看護学科
淑徳大学看護栄養学部看護学科
横浜市立大学医学部看護学科

看護学教育研究共同利用拠点 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター

プロジェクト取り組み・FDマザーマップ

4. 「看護学教育におけるFDマザーマップ」の修正 ヒアリング結果を受けて修正

FDマザーマップの例「基盤」

基盤	レベルⅠ 知る	レベルⅡ 自立して出来る	レベルⅢ 支援・指導、 拡大できる
1. 看護系大学教員としての基礎力			
看護学の本質的理解	基盤1-1.1 ①看護学が、看護実践の根拠を追究し、価値の創造を含めて、その発展を目指す科学であること ②諸科学との関連において、看護学独自の意義や役割を理解する	基盤1-1.2 ①看護学が、看護実践の根拠を追究し、価値の創造を含めて、その発展を目指す科学であること ②看護学独自の意義や役割を自覚しながら、教員活動を展開できる	基盤1-1.3 ①看護学が、看護実践の根拠を追究し、価値の創造を含めて、その発展を目指す科学であること ②看護学独自の意義や役割を自覚しながら、他の教員を支援できる

看護学教育研究共同利用拠点 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター

プロジェクト取り組み・FDマザーマップ

5. 「看護学教育におけるFDマザーマップ活用ガイド Ver.1(試行版)」の作成



看護学教育研究共同利用拠点 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター

プロジェクト取り組み・FDマザーマップ

5. 「看護学教育におけるFDマザーマップ活用ガイドVer.1(試行版)」の作成

FDマザーマップ要素一覧

1) 基盤

1. 看護系大学教員としての基礎力
看護学の本質的理解
看護学に対する興味・関心
教育活動と研究活動のバランス
教員活動に対する自己評価
看護系大学教員としてのキャリア開発
2. 看護専門職としての基礎力
看護専門職としての健康管理
看護観
看護専門職の社会的役割
看護専門職としての自律性
看護専門職としての倫理観
看護実践におけるスキルの重要性

看護学教育研究共同利用拠点 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター

プロジェクト取り組み・FDマザーマップ

5. 「看護学教育におけるFDマザーマップ活用ガイドVer.1(試行版)」の作成

FDマザーマップ要素一覧

2) 教育

1. 教育者マインド
2. カリキュラム編成
3. 入学者選抜
4. 授業運営
授業設計
授業展開
評価とフィードバック
5. 臨地実習指導
実習環境・体制整備
臨地での柔軟な支援方法の工夫
学生の実習経験と看護概念を関連づける学習支援
臨地での主体的学習への支援
臨地での倫理的学習への支援
6. 学生支援
学生生活支援
キャリア支援
国際交流の推進

看護学教育研究共同利用拠点 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター

プロジェクト取り組み・FDマザーマップ

5. 「看護学教育におけるFDマザーマップ活用ガイドVer.1(試行版)」の作成

FDマザーマップ要素一覧

3) 研究

1. 研究者マインド	3. 研究マネジメント・調整能力
2. 研究遂行能力	時間のマネジメント
看護学研究の理解	研究費の獲得と適切な運用
クリティカルシンキングの使い方	研究者コミュニティの形成
看護学研究の課題の見つけ方	研究環境の整備
分野横断的な研究の進め方	4. 普及と発信
研究フィールドとの関係の取り方	研究のインパクト
データの取り扱いとその方法	看護学教育・実践の質の向上
倫理的配慮 (知的財産権、利益相反含む)	看護学研究の発展
看護学研究論文の書き方	新しい変化への対処
研究論文のレビューの仕方	成果発信
研究成果をもって看護の現場へコミットする	研究成果の計画的な普及・発信
	交流
	研究会・学会活動
	5. 国際化
	国際学会での発表
	国際共同研究
	学術国際交流の推進

看護学教育研究共同利用拠点 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター

プロジェクト取り組み・FDマザーマップ

5. 「看護学教育におけるFDマザーマップ活用ガイドVer.1(試行版)」の作成

FDマザーマップ要素一覧

4) 社会貢献

1. 社会貢献のあり方
2. 看護現場のイノベーション
ニーズ把握の方法
実践への適用
政策への提言
3. 地域貢献
看護の知見の発信と活用
看護系大学のリソースとしての役割
産官学共同研究の実施

看護学教育研究共同利用拠点 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター

プロジェクト取り組み・FDマザーマップ

5. 「看護学教育におけるFDマザーマップ活用ガイドVer.1（試行版）」の作成

FDマザーマップ要素一覧

5) 運営

1. 組織と個人の理解
自大学・学部学科の歴史の理解
自大学・学部学科の理念（ミッション・ビジョン）の理解
大学の組織体制の理解
大学の組織人としての態度の理解
2. 組織文化の創造
組織文化の理解・醸成
自大学・学部学科の組織文化の創造
3. 大学組織のマネジメント
大学組織マネジメントの基礎
課題遂行時のセルフマネジメント
ハラスメント対策
リスクマネジメント
4. 組織変革時のリーダーシップ・メンバーシップ

看護学教育研究共同利用拠点 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター

プロジェクト取り組み・FDマザーマップ

「看護学教育におけるFDマザーマップ Ver.1」（報告書）

発行部数 700部
H25.3.29 刊行
主な配布先 看護系大学等関連機関
全国の大学病院

「看護学教育におけるFDマザーマップ活用ガイドVer.1（試行版）」

発行部数 1000部
H25.3.29 刊行
主な配布先 看護系大学等関連機関
学会等での配布

看護学教育研究共同利用拠点 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター

プロジェクト取り組み・FDマザーマップ

雑誌「看護教育」3月号、4月号掲載



看護学教育におけるFDマザーマップの開発（1）FDマザーマップ試案作成までの道のり

看護師国家試験合格率100%の秘密

看護学教育研究共同利用拠点 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター

プロジェクト取り組み・FDプランニング支援データベース

FDプランニング支援データベースの作成

目的

「看護学教育におけるFDマザーマップ」と、「看護系大学のFD実績表」を公開し、看護学高等教育における教育の特質を踏まえた有効なFDを計画的に企画・実施・評価していくための一助となることを目指す

機能

- ・「FDマザーマップ」の閲覧
- ・「看護系大学のFD実績表」の検索・閲覧



※「看護系大学のFD実績表」：各看護系大学で実際に行ったFD企画を記載したものの

看護学教育研究共同利用拠点 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター

プロジェクト取り組み・FDプランニング支援データベース

「FDマザーマップ」の閲覧

トップページ

FDマザーマップの全体図

詳細項目

要素一覧



看護学教育研究共同利用拠点 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター

プロジェクト取り組み・FDプランニング支援データベース

「看護系大学のFD実績表」の検索・閲覧

トップページ

実績表の検索

各実績表の閲覧



看護学教育研究共同利用拠点 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター

いわて高等教育コンソーシアムのFD・SDの取り組み

Faculty and Staff Development in Iwate Higher Education Consortium

江本 理恵

Rie Emoto

岩手大学大学教育総合センター

University Education Center, Iwate University

＜あらまし＞ 岩手県では、平成 20 年度の文部科学省「戦略的大学連携支援事業」に採択されたことをきっかけに、県内の 5 つの 4 年制大学による「いわて高等教育コンソーシアム」を発足させた。この事業は 5 つの柱があり、その中の 1 つとして FD、SD の取り組みがある。平成 20 年度から 3 年間の事業期間中には、それぞれ委員会を設立して、共同での FD、SD の実施や相互乗り入れ等の事業を推進してきた。その結果、コンソーシアムとしての共同体意識が高まり、例えば、岩手大学で実施している研修会にコンソーシアム連携校から多数の参加をいただくような例も出てきている。事業終了後の平成 23 年度からは、コンソーシアムの中に FD・SD 連携推進委員会を設置し、平成 23 年度に採択された「大学等における地域復興のためのセンター的機能整備事業」の事業も担っている。しかし、FD・SD 連携推進委員会が担当する業務については、例えば、「どの大学が担当するのか」という問題が発生することがあり、持続可能な運営を行うための組織体制の構築は今後の大きな課題である。

1. はじめに

岩手県では、文部科学省の平成 20 年度「戦略的大学連携支援事業」の採択を受けて、岩手県内の 5 つの 4 年制大学（岩手大学、岩手県立大学、岩手医科大学、富士大学、盛岡大学）で構成していた「いわて 5 大学学長会議」を発展させて、コンソーシアムを結成した。この 5 つの大学は、国公立と設置形態も多様であり、さらに、構成する大学の 13 学部、12 研究科（学生数約 12,000 名）の学部、研究科等が重ならないという特徴を持っている。平成 20 年度～22 年度の事業期間中は、「いわて高等教育コンソーシアムにおける地域の中核を担う人材育成と知の拠点形成の推進」の下、「教育力向上」「教育研究環境の基盤整備」「知の拠点形成」「大学進学率の向上」「地域の活性化」の 5 つの柱を掲げ、活動を行ってきた。戦略的大学連携事業終了後は、各取り組み（委員会）にそれぞれ担当校を決め、自律的な運営に取り組んでいる（図 1）。

平成 23 年 3 月に発生した東日本大震災を受け、平成 23 年 6 月 15 日には、いわて高等教育コンソーシアム連携 5 大学学長名により、「いわて高等教育コンソーシアム学長宣言『岩手の復興を人材育成から、今こそ連携の力で！』」を

発表し、コンソーシアムとして分野の異なる学部を持つ 5 大学が自らの特徴を最大限に生かしつつ、連携の力で「地域の知の拠点」を目指し、復興を担う人材育成を推進していくことを宣言している。

さらに、同年後半には、岩手県立大学が中心となり、コンソーシアムと連携して応募した文部科学省による「大学等における地域復興のためのセンター的機能整備事業」に、「いわての教育及びコミュニティ形成復興支援事業」プロジェクトが採択された。このプロジェクトは、東日本大震災の復興に向けた支援事業と復興の中核的役割を担う人材育成を推進するため、以下の 2 つの柱からなるプロジェクトを融合的に取り組み、いわての教育及びコミュニティ形成の復興を目指すものである

I. 学校・応急仮設住宅におけるコミュニティ形成と子ども支援事業

II. 地域を担う中核的人材育成事業

代表校の岩手県立大学が主に「I. 学校・応急仮設住宅におけるコミュニティ形成と子ども支援事業」を、いわて高等教育コンソーシアムは、今までの実績から主に「II. 地域を担う中核的人材育成事業」を担い、引き続き「沿岸復興活動拠点の形成」「大学進学事業」「中核的人

材育成事業」「地域貢献事業」に取り組んでいる。

なお、平成 25 年には、放送大学岩手学習センター、一関工業高等専門学校がコンソーシアムに加盟している。

2. FD・SDの取り組み

いわて高等教育コンソーシアムの FD・SD の取り組みは、当初の戦略的大学連携支援事業の 5 つの柱のうち、「教育研究環境の基盤整備」の 1 つとして「SD 研修の共同実施」、「教育力向上」の 1 つとして「FD 研修の共同実施」が位置づけられており、それぞれ SD プロジェクト委員会、FD プロジェクト委員会を結成して事業にあたってきた。「SD 研修の共同実施」では、合同研修会等の事業に取り組む（表 1）、「FD 研修の共同実施」では、合同での研修会等の実施（表 2）の他、研修への相互参加を推進してきている。

その後、事業終了に伴い、前述の 2 つの委員会は「FD・SD 連携推進委員会」として再構成され、毎年、2 回ほどの会議と、1、2 回のコンソーシアムとしての各種事業を行っている。さらに、上記大学等における「地域復興のためのセンター的機能整備事業」のうちの、『被災地自治体職員・教員の経験を共有するワークシ

ョップの開発』などのいくつかの事業を担当している（表 3）。

3. 成果

この 6 年間の最も大きな成果の 1 つとして、コンソーシアム連携校の教職員ネットワークができつつあり、相互の壁が低くなってきたことが挙げられる。研修等への相互参加が日常のものとなり、例えば、平成 24 年度後期に岩手大学で開催した「発達障がい理解と対応」（学習会 3 回、講演会 1 回）には、多数のコンソーシアム連携校の教職員の参加があった。岩手大学が主催（コンソーシアムと共催）する 1 泊 2 日の研修会にも、連携校から毎年参加がある。

また、平成 23 年度からの「大学等における地域復興のためのセンター的機能整備事業」の一環として、大学が持つ資源を活用して、沿岸地域の自治体職員等を対象とした研修等の事業も行うようになった。これは、FD・SD の概念を、大学教職員（Faculty、Staff）にとどめずに、地域全体の発展（Development）をも含めたものに広げることであり、いわて高等教育コンソーシアムの FD・SD が新しい局面を迎えたと考えることができる。

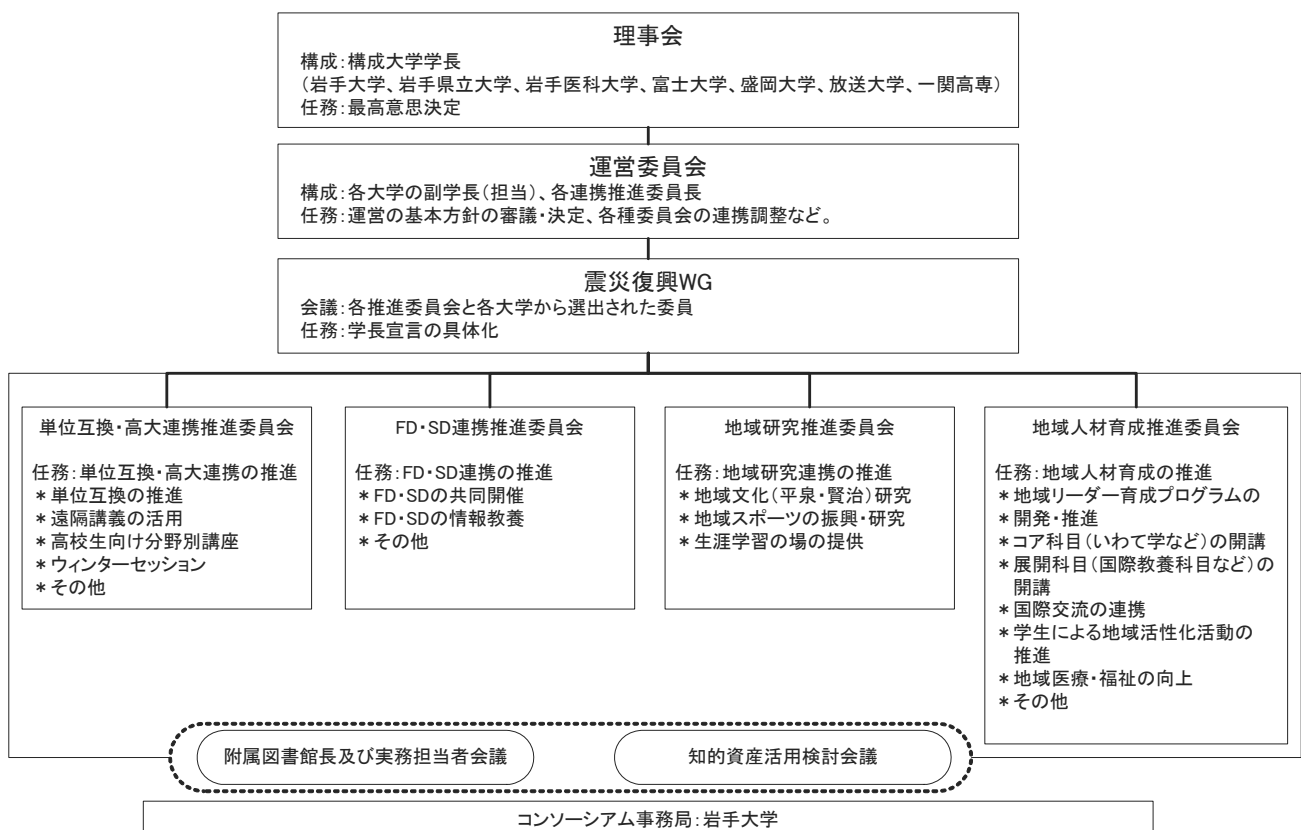


図 1：平成23年度以降 いわて高等教育コンソーシアム運営体制（組織図）

4. まとめと今後の課題

以上の通り、成果も見られるコンソーシアム

による FD・SD の取り組みだが、同時に多くの問題を抱えている。

表 1：平成20年度～22年度 SDプロジェクト委員会によるSD関連活動（主要なもの）

日程	研修会テーマ	備考
平成21年(2009年) 3月5～6日	合同SD研修会 「SD担当者音レベルアップについて」	安比高原にて1泊2日で実施。「SD担当者（研修担当者）」を対象としたワークショップ形式の研修。
平成21年(2009年) 9月17～18日	合同SD研修会 「研究協力業務に関する能力の向上に向けて」	八幡平ハイツにて1泊2日で実施。主に研究協力業務に従事する職員を対象にワークショップ形式の研修。
平成21年(2009年) 11月9日	SD講演会&ワークショップ 「変革する大学と職員の役割 ―教育改革、ICT活用、外部資金獲得等の観点から―」 講師：大森不二雄氏（熊本大学教授）	岩手大学にて実施。参加者は17名。教育改革や外部資金等獲得における職員の役割や心構え等を講義とワークショップで学んだ。
平成22年(2010年) 9月17日	合同SD研修会 「学生支援業務に関する能力向上に向けて」	学生支援業務に従事する職員を対象としたワークショップを中心とした研修。
平成22年(2010年) 11月29日	SD・FD合同研修会 「大学教職員のための企画力養成講座～教職協働を目指して～」 講師：秦敬治氏（愛媛大学教育企画室）	FD委員会と共同で実施。ワークショップ形式で企画立案方法を学んだ。参加者は22名（うち教員4名）。

表 2：平成20年度～22年度 FDプロジェクト委員会によるFD関連活動（主要なもの）

日程	研修会テーマ	備考
平成21年(2009年) 7月17～18日	医学教育ワークショップ 「カリキュラム・プランニング」 ※岩手医科大学と共同開催	安比にて1泊2日で実施。「基本的臨床技能実習」「根拠に基づいた医療」に関するカリキュラムを作成。連携校（岩手医科大学以外）から7名の参加があった。
平成21年(2009年) 8月20～21日	FD研修会 「学士力の育成と問題解決型授業の導入」 ※岩手大学と共同開催	八幡平ハイツにて1泊2日で実施。岩手医科大学の佐藤洋一先生による話題提供後、グループ単位でのワークショップに取り組んだ。連携校（岩手大学以外）からの参加は4名。
平成21年(2009年) 12月18日	FD講演会 「大学教育の革新とFDの新展開」 講師：川島啓二氏（国立教育政策研究所高等教育研究部総括研究官）	遠隔講義（TV会議）システムを活用し、岩手大学会場の他、岩手医科大学、盛岡大学、富士大学をつないでの実施。講演後には遠隔講義システムを利用した質疑応答を行った。
平成22年(2010年) 3月5日	FD研究会 「相互研修型FDの組織化と京都大学の実践」 講師：田中毎実氏（京都大学教授／高等教育研究開発推進センター長）	田中先生による話題提供後、各委員から、各大学でのFDや授業改善の取り組みについて報告し、意見交換を行った。参加者は18名。
平成22年(2010年) 8月26～27日	FD研修会 「学生とともに考える「大学教育」」 ※岩手大学と共済	八幡平ハイツにて1泊2日で実施。連携校の教員だけでなく、学生も参加しての研修会となった。参加者は5大学から、教員、学生あわせて58名。

最も大きな問題の1つが、コンソーシアムとしてのFD・SDの運営をどのように行うか、の問題である。戦略的大学連携事業終了時に、委員会を統合して整理し、事務局を岩手大学に、他の連携校にそれぞれ委員会の担当を割り振って運営をしている。しかし、人員削減等で事務職員に余裕のない状況で、新たなコンソーシアムによる業務の増加は負担感が大きく、その取り組み状況も様々で、残念ながらFD・SD連携推進委員会の会議の開催回数は少ない。また、関わる教員も限られた人のみで、事業運営にか

かる負担が特定の人たちにかかる傾向も同様である。研修の相互参加などは進んでいるもの、コンソーシアムのFD・SD連携推進委員会の委員として、積極的に事業に取り組む教職員が増えているとはいいがたい。

今後、コンソーシアムによるFD・SDを持続可能なものにするためには、特定の個人に頼るのではなく、持続的な組織で活動を担う必要があり、その方策を検討しなければならない。

表3：平成23年度～24年度 FD・SD連携推進委員会関係活動一覧（主要なもの）

日程	研修会テーマ	備考
平成23年(2011年) 8月25～26日	FD研修会 「地域の復興に貢献できる教育機関の在り方を考える」 ※岩手大学と共同実施	八幡平ハイツにて1泊2日で実施。復興に貢献できる人材を育成するための教育プログラムを考案した。連携校（岩手大学以外）からは6名の参加。
平成23年(2011年) 10月21日	FD・SD研修会 「大学教職員のためのメンタルヘルスケア研修会」	職場でのメンタルヘルスケアに関する基本的な知識を講義、グループワークで学んだ。連携校から45名の参加。
平成24年(2012年) 3月4日	第17回FDフォーラム【第10分科会】 「連携して取り組む教育改善 ～日米のコンソーシアム活動を通じて考える～」 話題提供：佐藤洋一氏(岩手医科大学)	FDフォーラム第10分科会にて話題提供を行った。アメリカ・ボストンのFenway地区で15年以上にわたりコンソーシアム活動が続いているCollege of Fenwayの取り組み等の情報交換等を行った。
平成24年(2012年) 3月19日	「東日本大震災復興と防災・減災の懇話会」	釜石市教育センターにて実施。北海道奥尻町の総務課長をお招きしての自治体職員との懇話会。
平成24年(2012年) 8月23～24日	FD研修会 「これからの大学教育のあり方を考えるー『大学改革実行プラン』を受けて」 ※岩手大学と共同実施	八幡平ハイツにて1泊2日で実施。文部科学省の方からの講演に加えて、答申案や大学改革実行プランを学んだ。連携校（岩手大学以外）からは5名の参加。
平成24年(2012年) 10月5日	FD・SD研修会 「大学教職員のためのメンタルヘルスケア研修会」	昨年度の研修を受けて、さらに充実させたプログラムにて実施。「発達障がい」に関する内容も取り入れた。
平成24年(2012年) 11月3日	SD研修会 「SDコーディネーター養成講座」 講師：秦敬治氏他（愛媛大学教育企画室）	愛媛大学からの申し出により岩手大学にて実施。スタッフ・ポートフォリオを中心に、人材養成について考えるワークショップ。参加者は12大学から19名。
平成24年(2012年) 11月6日	FD研修会 「授業デザインワークショップ」 講師：佐藤浩章氏他（愛媛大学教育企画室）	愛媛大学からの申し出により岩手大学にて実施。様々な授業手法等を体験しながら学べるワークショップ。参加者は9大学から26名。
平成25年(2013年) 3月15日	「東日本大震災津波復興を担う人材に対するメンタルヘルスケア研修会」	釜石市保健福祉センターにて実施。被災地の自治体職員を中心に、メンタルヘルスケアの研修。

2013 年 9 月 13 日 11 時～

於 京都大学 吉田南 1 号館 106 号室

FD ネットワーク代表者会議

意見交換記録

【出席者】大塚、松下、飯吉、溝上、酒井、田中（高等教育研究開発推進センター）、小貫（九州大学）、山田（愛媛大学）、七田（島根大学）、徳永、川面（大学コンソーシアム京都）、丹羽（岐阜大学）、夏目（名古屋大学）、内藤（仁愛女子大学）、杉原（福井工業大学）、青野（金沢大学）、北池（千葉大学）、江本（岩手大学）、東條、安部田（文部科学省）

（安部田）FD を大学で担当されている方々の苦労がわかった。今後の 18 歳人口の動向を考えると、大学の生き残りのために FD は重要な手段である。よって大学運営側が FD について理解していないのであれば、理解してもらうための仕掛けを打ち出す必要がある。また、具体的に申し上げることはできないが、FD と IR の関係についても気になる。次に、分野・領域別の FD を展開することはできないのか。同じ地域内で、同領域の FD を展開すると学生の奪い合いになる。ICT を利用し地域を超えた FD 活動の可能性はありえないのか。OCW、MOOCs の伸長に対応する FD も考える必要がある。

（東條）FD・SD に関心の無い教員と職員をどう振り向かせれば良いのか。千葉大学の調査（p.70）では FD に消極的な教員が少ないようであったが、これは他のネットワークでも同じなのか。

（青野）安部田さんへの提案になるが、全国すべての大学が参加する FD 協議会を作るつもりはないのか。たとえば全国組織として大学教育学会があるかもしれないが、これは FD のためだけのものではない。次に、各大学が学生を奪い合うという利害関係がある中で、FD についても、情報共有が難しいという状況だ。

（飯吉）現在は FD 活動が成熟してきている一方で、フラット化して地域の特色が失われてきている。全国大会等で、最先端の本当に面白い情報を得るには、金銭的な負担が大きい。そこで ICT を通じて、小さい特殊な FD コミュニティを多数作るのはどうだろうか。持続しない小さいコミュニティが連動して大きな流れを作れば面白い。また潜在的なニーズとしては、外国人に対する FD はどうするのか。これは今までの FD では全く対応できない大きな問題となるだろう。

（大塚）大学教員で FD を好む人はいないという状況で、部局改編が起きると、小さなセンターは真っ先に不要とされる。この点を理解して欲しい。

（夏目）FD についてはどの教員も消極的である。そこからセンター不要論というものも出てくる。行政の方での支えなければ、せっかく芽生えた様々な動きが潰されてしまう

だろう。拠点制度がある限り執行部はFDセンターの改編に手を出せない、ということも重要な事実である。FDが十分に広まったというのではなく、これからさらに発展させる必要がある、という認識を文科省には持って欲しい。

(徳永) FDの義務化というのではなく、FDを受けられることが教員の権利になるようなヴィジョンの転換が必要である。また、コンソーシアムが予算を申請しなかった事例が紹介されたが、申請しても落選した事例もあることを承知いただきたい。

(飯吉) 定員割れの恐れがある中、多くの大学は何でもやるという状況にある。その中の選択肢の一つがFDであり、FDの義務化とは最低限の質保証である。しかしその質保証で学生は来るのだろうか。教育力を上げたとしても、そのパフォーマンスを社会に認めさせ、出口を作らないと学生に魅力は無いのではないか。学生支援、企業研修制度に勝てるFDが求められる。

(山田) 四国の大学は、四国内の学生だけでは定員を満たせない。そういった状況下で、四国の学生は何で大学を判断するかというと、偏差値である。私の報告ではIRに注力するということであったが、FDとIRが現実的成果を上げられるかははなはだ疑問である。またIRでは中立性が重要であるので、FDという顔の見える支援的取り組みとは両立しにくい。もっとも、二つの部署を分ければ良いとも思わないが。

(大塚) それは広い意味での大学評価の課題と言えるだろう。ところで、拠点の認定が判明しない状況で、拠点の概算要求は可能なのか。そのスケジュールはどうなっているのか。先んじて組織改編にさらされると、仮に予算があっても事業の継続は不可能である。

(安部田) 通常のスケジュールでは問題があることについては認識しているので、切れ目がないようにしたい。特に特別経費の部分は、概算要求に支障がないようにするつもりである。拠点の制度はFDを推進するためのツールとして重要であると我々も考えているので、きちんと手当ができるようにしたい。

(夏目) せっかく出てきた芽なので、行政の方でもぜひ支援して欲しい。

(丹羽) 他大学への支援は大学の執行部から理解が得にくいので、やはり行政からのお墨付きは重要である。それから、文科省としては拠点の評価はどうしているのか。

(安部田) 評価の指標をどうするかが難しい。しかしながら、省内では評価をするようにとの議論がある。

(松下) FDの10-20年の見通しを文科省はどう考えているのか。

(安部田) 率直に申し上げて、それはFDが義務付けられた段階で各大学に委ねられたと考えている。ただし「大学改革加速プログラム」ではより発展的な支援を考えており、そこでは効果検証が可能な形でのFDが求められるだろう。

(杉原) 私のように若いときにFD委員長に携わると、それこそ10-20年間任期が続くと予想されるので、そういった状況を考慮してFDの支援を賜りたい。

文責：田中一孝（高等教育研究開発推進センター）

IV-4-2. 第6回FDネットワーク代表者会議を終えて

2013年9月13日（金）11:00～17:00、京都大学吉田南1号館106室において、全国から11のFDネットワーク、教育関係共同利用拠点の代表者が集まり、第6回FDネットワーク代表者会議（Japan Faculty Development Network：JFDN）が開催された。

本年度は、京大センター申請の特別経費プロジェクトが終了したことに伴い、昨年度までの報告者の招待という形はとれず、各FDネットワークの自主的参加としたことで、どの程度のネットワークが引き続き参加してくれるのか危惧されたが、全国11のFDネットワークの代表が参集してくれたことに、まずもって感謝の意を表しておきたい。また、それぞれのFDネットワークの活動の現状と課題の報告は、毎年、総体的に充実度が増してきているように思われ、今回も、参加ネットワーク互いのよい刺激の機会とすることができた。

FDが法制的に義務化されて5年が経ち、「FD」という言葉の逼迫度も一頃に比べて減退してきている印象もある昨今、FDネットワークも一つの曲がり角に来ているとも思われ、その活動を今後どう展開していけばよいのか、改めて原点に立ち返って考え直す時期に来ている。今回は、その意味で、持続可能なFDネットワークのあり方をJFDNの一つのテーマとした次第であり、そのことも含めて、貴重な情報交換、意見交換の場とすることができたのではないかと思う。

各ネットワークからの報告の後、安部田康弘氏（文部科学省高等教育局大学振興課学務係長）、東條正範氏（文部科学省高等教育局大学振興課大学改革推進室専門官）よりコメントをいただいた。

安部田氏からは、「FDを大学で担当されている方々の苦勞がわかった。今後の18歳人口減少の動向を考えると、大学の生き残りのためにFDは重要な手段であり、大学運営側がFDについて十分に理解していないのであれば、理解してもらうための仕掛けを打ち出す必要がある。また、今後の課題として、FDとIRの関係がどのようになっているのか、また、分野・領域別のFDを展開することはできないのかといったことが挙げられるように思う。同じ地域内で、同領域のFDを展開すると学生の奪い合いになるという点も考慮する必要がある、その点で、ICTを利用し地域を超えたFD活動の可能性はありえないか。OCW、MOOCsの伸長に対応するFDも考える必要がある。」といった趣旨のコメントがあった。また、東城氏からは、「FD・SDに関心のない教員と職員をどう振り向かせれば良いのか。」という課題が取り上げられた。

それに対して、以下のような意見交換が行われた。

① 地域では、各大学が学生を奪い合うという利害関係もあり、FDに関する情報共有も難しい点もあることから、全国すべての大学が参加するFD協議会を作ることはできないか。

② 現在はFD活動が成熟してきている一方で、フラット化して地域の特色が失われてきている。全国大会等で、最先端の本当に面白い情報を得るには、金銭的な負担が大きい。そこでICTを通じて、小さい特殊なFDコミュニティを多数作るのはどうだろうか。小さいコミュニティが連動して大きな流れを作れば面白い。

③ 外国人教員などが増加する方向性が見える中で、潜在的なニーズとして、外国人に対するFDはどうするのか。今までのFDでは全く対応できない大きな問題となる可能性がある。

④ 大学改革の流れの中で、部局改編などの動きが起こると、大学教員でFDを好む人はいな

いという状況もあり、FDなどを担当している小さなセンターは真っ先に不要という意見が主流となる。ネットワークを担当しているセンターなどについては、学外の行政等からのサポートが必要となる。

⑤ FDについてはどの教員も消極的である。そこからセンター不要論というものも出てくる。行政の方での支えなければ、せっかく芽生えた様々な動きが潰されてしまうだろう。拠点制度がある限り執行部はFDセンターの改編に手を出しにくいということも重要な事実である。FDが十分に広まったというのではなく、これからさらに発展させる必要がある、という認識を文科省には持って欲しい。

⑥ FDの義務化というのではなく、FDが教員の権利となるようなヴィジョンの転換が必要である。

⑦ コンソーシアムが予算を申請しなかった事例が紹介されたが、申請しても落選した事例もあることを承知いただきたい。

⑧ 定員割れの恐れがある中、多くの大学は何でもやるという状況にある。その中の選択肢の一つがFDであり、FDの義務化とは最低限の質保証である。しかしその質保証で学生は来るのだろうか。教育力を上げたとしても、そのパフォーマンスを社会に認めさせ、出口を作らないと学生にとっての魅力は出てこないだろう。その視点からFDを考えてみてはどうか。

⑨ 学生が受験する大学を選択するときに、最も大きなものは「偏差値」である。IRに注力することも求められているが、FDとIRが現実的成果を上げられるかははなはだ疑問である。IRでは中立性が重要であるので、FDという顔の見える支援的取り組みとは両立しにくいということもある。もともと、IRとFDの二つの部署を分ければよいということでもなく、それを以下に連携させていくかは大きな課題だろう。

⑩ それは広い意味での大学評価の課題とも言えるだろう。

⑪ 拠点の認定が判明しない状況で、拠点をベースとした概算要求は可能なのか。そのスケジュールはどうなっているのか。先んじて組織改編にさらされると、仮に予算があっても事業の継続は不可能という可能性もある。

⑫ 通常のスケジュールでは問題があることについては認識しているので、切れ目がないようにしたい。特に特別経費の部分は、概算要求に支障がないようにするつもりである。拠点の制度はFDを推進するためのツールとして重要であると我々も考えているので、きちんと手当ができるようにしたい。

⑬ 他大学への支援は大学の執行部から理解が得にくいので、行政からのお墨付きは重要である。文科省として拠点の評価はどうしているのか。

⑭ 評価の指標をどうするかは難しい課題であるが、それについての議論は続けている。

⑮ FDの10～20年の見通しを文科省はどう考えているのか。

⑯ 率直に申し上げて、それはFDが義務付けられた段階で各大学に委ねられたと考えている。ただし「大学改革加速プログラム」ではより発展的な支援を考えており、そこでは効果検証が可能な形でのFDが求められるだろう。

⑰ 若いときにFDに携わると、10～20年間任期が続くと予想されるので、そういった状況を考慮してFDの支援を賜りたい。

以上のように、ディスカッションでは、FDネットワークの存続に関わる問題も含めて、今後のFDのさまざまな課題が取り上げられた。

FDに関しては、方向性として、今後、時代の変化、ICTなどのテクノロジーの発展に伴って、

FD そのものはますます重要な役割を果たしていくであろうことは、この JFDN の場では少なくとも共有された。その中で、FD ネットワークという、そう簡単ではない取り組みをどのように継続させて行き得るのが問われることになるが、その際に、FD という、大学教員には基本的には敬遠されている取り組みにどう市民権を与えていくかということと、そういう状況にあって、どういう支援が求められるかという点が課題として取り上げられた。

前者については、グローバル化の中で、外国人教員を対象としたり、また、英語で授業を行うことに関する新たな FD の課題などが、切実に教員に突きつけられていく可能性は大きいし、また、MOOCs などに代表される遠隔授業の広がりも、大学教員に対するプレッシャーとなっていくことが予想され、大学教員が「研究」に関わっていさえすればよいということはなく、教育に関わる FD を敬遠してはいられない外的状況が身近に迫っているということは否定し得ないことであろう。

ただ、外的状況にのみ頼ることは持続可能性という点では心許ない部分もあり、それを機に、むしろ、FD そのものが自分にとって意義のあるものとして内発的に位置づけられるような FD 観を、この FD ネットワークの取り組みの蓄積などを通して共有していくということも意識しておきたいところである。そのためには、FD 講演会やワークショップ、授業評価など、定型的な FD 活動から一歩脱却して、MOOCs などのオンライン教材の共同制作であるとか、教材の共有化を図る何か新しい仕掛けを模索していくことも一法であろう。そのような新しい試みは現時点の通念では「FD」とは呼ばれないかもしれないが、「FD」を意識せずに教育力を醸成していくことのできる機会になるようであれば、我々が発展を期すのは「FD」ではなく、大学教育そのものであるわけでもあり、有意義な試みとなっていくと思われる。いずれにしても、まずは、日頃の FD 活動を地道に積み重ねていくことで、大学教員にとっての FD の内発的な意義を少しずつ浸透させていく以外にないであろう。

FD ネットワークへの支援という後者の点については、昨年の後記にも触れたように、少なくとも今の日本の大学の風土においては、継続的な予算的措置が必要不可欠であるということをも改めて強調しておきたい。何故、わが国において、十年一日のごとくに、大学教育改革が叫ばれてきているのは、何度も繰り返し出されている答申やまた GP の予算措置などによって、短期間では盛り上がりが見られたとしても、それが長続きもしないし、横にも広く普及していかないまま尻すぼみになったり、あるいは、制度的に形だけ導入されたりといったレベルで終わってしまっているところにその一因があると思われる。教育的な営みには適切な人材リソースの投入が不可欠であり、その下に、教育方法をも含んだ教育素材を創り出し (create)、それを蓄積・共有し (share)、さらに活用・評価していく (use) というサイクル (CSU サイクル) を回していく必要がある。それを継続的に蓄積し、活用していくためには、教育素材に関してはビジネスが成立するというわけでもないことから、その拠点となるべきところに、それなりの予算措置が必要とされることになる。わが国の大学では、教育の部分は二の次という風土もあって、予算措置のあり方も研究や開発プロジェクトを念頭に置いたものがほとんどであり、FD ネットワークの拠点に関しても、活動そのものよりも、常に、予算獲得をどのようにしたらよいかに精力が切り裂かれる現状である。これは、突き放してみれば、拠点のエゴと言われてしまうかもしれないが、もう一段上の視点から見れば、わが国の教育を実のあるものにしていくためにはそう簡単に切り捨てられないことでもあろう。そのように行政レベルを突き動かすためにも、その雰囲気作りが必要であり、昨年度テーマにした「評価」のあり方、言い換えれば、FD ネットワークの成果をわかりやすく示す努力も必要とされることになるだろう。

(大塚 雄作、田中 一孝、斎藤 有吾)

IV-5-1. 相互研修型 FD 共同利用拠点諮問委員会の概要

2013 年 2 月 28 日（木）14～17 時、京都大学楽友会館会議室にて、相互研修型 FD 共同利用拠点諮問委員会が開催された。

出席者は、委員として、諮問委員会委員長の館昭桜美林大学大学院大学アドミニストレーション研究科 教授をはじめ、天野郁夫東京大学名誉教授、絹川正吉新潟大学理事、羽田貴史東北大学高等教育開発推進センター教授、大塚雄作京都大学高等教育研究開発推進センター長、中崎明京都大学学務部共通教育推進課長の他、本センターからの陪席者として、松下佳代教授、飯吉透教授、溝上慎一准教授、田口真奈准教授、酒井博之准教授、田川千尋特定助教、高橋雄介特定助教、坂本尚志特定助教、田中一孝特定助教であった。なお、諮問委員の寺崎昌男立教学院本部調査役は所用のため欠席された。

本諮問委員会は、特別経費プロジェクト『大学教員教育研修のための相互研修型 FD 拠点形成』の最終年度にあたることから、そのプロジェクトの外部評価を兼ねて実施された。

そのベースとして、諮問委員の方々には、2012 年度の活動報告をまとめた『相互研修型 FD 拠点活動報告 2012（京都大学高等教育叢書 32）』と共に、拠点認定時に諮問委員の先生方にご登壇いただいたシンポジウムをまとめた『FD ネットワークの展開と大学教育改革の方向性を問う（京都大学高等教育叢書 30・2010 年 9 月 7 日開催）』を事前にお送りした。前者の活動報告には、5 年度間のプロジェクト日誌（p.25～p.33）などを含んでおり、あらかじめ、特別経費プロジェクトの全体の流れを諮問委員の方々には掴んでおいていただいている。

また、当日、特別経費プロジェクトの総括国際シンポジウム『ネットワーク時代の大学教育改善—学びと教えの相互深化を持続させる—（2013 年 1 月 27 日開催）』の資料集を配付し、そこに掲載されているスライド配付資料版『FD ネットワーク形成のこれまでとこれから—相互研修型 FD 拠点形成 2008～2012—』に基づいて、当該プロジェクトの概要が説明された。その配付資料版を、本年度の情報も若干追加して改訂したものを、【資料】として掲載しておく。

その説明の後、諮問委員から質問およびコメントをいただく機会を持ったが、その主な内容は以下のようなものであった。「→」以下は、本センターからの回答である。

① 国際レベルでのシンポジウム、学会（ISSOTL）参加などは、記録に残っているか。

→ 資料集、予稿集などに掲載されている。ISSOTL への参加は、相互研修型 FD と Scholarship of Teaching & Learning（SOTL）という考え方が一致しているため。

② ネットワークとは何か？国際連携は、シンポジウム、学会発表で連携と言えるか？学内から国際にわたって 4 つのレベルがあるが、それぞれネットワークの形は違っているのでは？また、ネットワークを通じて大学教育を改善していくとすれば、次の 5 年間に對するビジョンは何か？

→ ネットワークをどう捉えるかということは一言ではいえないが、少なくとも、ネットワークというからには一方向ではいけないと思うので、相互方向性ということの一つのポイントにしている。従って、国際連携については、ISSOTL で発表するだけ、国際シンポジウムで人を呼んで話を聞くだけ、というのにとどまらないように意識している。例えば昨年度ハーバード大学よりピア・インストラクションについてマズール先生をお呼びしたが、これは溝上先生が学内で同様のことを行っていて、共同研究の形をとって

いる。2008年のメアリー・ヒューバー、マギール大などとの連携も、共同研究の形をとっている。

③ ネットワークを強めるというのは、個別の大学が持っている視野の狭さをどのように広げていくか、ということだと思う。もう少し組織としてものを考えられるものに成長する必要があるのではないか。学内で認められないと何もできないというところがあるので、学内自体が大学全体の視野も持ってほしいと思う。

④ 全国レベルの代表者会議には、まったく違う組織が集まっていると思う。こういう形でもよいのだろうか、関西FDのようなタイプが全国にいくつもできていく、このようなイメージはあるのだろうか。文科省のするところは、特定のところにお金を出して、やりなさいという風であるが、ブロック制でやったほうがよいのではないか。理想型はどこに行くべきか。

⑤ 関西FDが成り立っているのはロケーションの良さがあるからだと思う。集まるための距離の問題がある。むしろ、各機関におけるFD組織の位置づけ（学長との関係等）がきちっとしていない限り、存続が危ないと思っている。自分の大学のことしか目に入っていない時に、全国でつながっていくことの難しさがあると思う。ネットワークの基盤となっている各組織の弱体化の問題。ごく一部の機関しかこのような議論ができないなかで、どのようにネットワークを作るのか。組織化はどうしたらいいのか。

⑥ FDネットワークができた頃は情報交換の重要性があった。しかし結局FDは大学個別の問題である。日本の場合は国立・私立が別の世界を作ってきた。特に私立の小規模校は自力でFDプログラムを組めない。こうした孤立した私立大学をどうするか。そうした問題もある。京大の取り組みは非常によいが、類似のものが各地にできるか難しい。

⑦ 四国のネットワークと関西FDとの差異は？ 各大学が組んだプログラムを共有していくというやり方という点では類似しているとも言えるが、四国の取り組みは一つのタイプであって、大学の組織的な取り組みで会費も高い。しかし関西の場合は個人参加の色彩がある。また、四国の場合は相互研修ではなくトップダウン型。二つの対照的な成功したFDネットワークと言える。大学間の共通項がだんだん消失していっているのは問題ではないか。

⑧ 大学教育研究フォーラムは京都で始められて、一種の学会、全国学会化している。これは京大がコスト負担をしているのか？

→ 特別経費を中心に京大のセンターの存在意義を示すものとしてやってきた。特別経費が切られて、来年以降は会費をとらざるを得ない。学会と異なり、年会費などもなくやってこれているので、毎年の参加に気安さがあると思われる。内容的には、大学教育学会、高等教育学会などとも近くなっているが、基本的には、教育実践者が自らの教育の場を研究対象としてその成果を共有する場という位置づけ。分野を問わずFD関係者がフォーラムに100名くらい全国から来られている。もう一つは、専門分野で大学教育学会や高等教育心理学・教育工学・外国語教育の方々が100名くらいいらしている。残りの400くらいは緩やかに他学会にもかぶっていると思う。

⑨ フォーラムのアウトカム(発表の質)をどう思うか。発表のレベルの低さが気になっている。

→ 申し込みの案内を出す時に、個人研究発表を設け始めた頃から、形式を設定すべきという話もあったが、分野がいろいろであったり、そこは深く求めないことにした。そのかわり、申し込みの案内を出すところで、発表の要件を5つくらい提示しており、そんなにひどいものはない。当初は、高校の先生が一言もの申すとか、現場を持たない人が高等教育に一言もの申したいという話があり、ご遠慮願うということもあったが、この7～8年はそのようなことはない。学生FDが進んで来て発表を希望する学生もいる

が、指導教員をつけるなどして、質の保証には配慮している。また、各セッションから、センターの教員が分担して、よい発表については推薦し、センターの紀要に投稿依頼し、査読を経て掲載するというものも行っている。

⑩ 他のネットワークとの関係はどうか？

→ 京都にはすでに大学コンソーシアム京都というネットワークがあるので、紛らわしい。さらに、私立大学のネットワークもあるので、関西 FD の特色を強調することが難しい。個々のネットワークの特色を出していくということが課題。

⑪ 概算要求書では、学内負担分が 6000 万ということで京都大学が負担している。そのぶん、学内のためだけにやりなさいという話になるのか？

→ 概算要求の書類上のことであるが、要は、申請するプロジェクトに対して、文科省からの運営費交付金のみではなく、京都大学もこれだけのリソースを割いて取り組むという意志表示の部分と考えたらよい。最近では、あまり意味があるとは思えないが、エフォート率などの記入も求められたりしている。学内的には、確かに、リソースを割いているのだから、学内のために有用であることも期待される部分もあり、学内の風あたりは厳しくないとは言えない。また、全学教育シンポジウムなど、学内的にリソースを出している部分も、学内負担分として含められている。

⑫ 私立の立場から考えると、国立大学というのは、日本の大学教育に対してもっとサービスすべきだと思う。6000 万、それは京都大学のためだけにあるのではないと思う。

→ 特に京大は全国の大学をリードしていく役割も担うべきと考えている。しかし、京大内の組織再編の委員会などで、センターのような小さな組織は矢面に立たされている。各部局で FD はできるようになってきたからセンターのミッションは終わっているのではないかという意見も出て来ており、センターの立場は共同利用拠点の認定を得たからといって安泰ではない。全国の FD、大学教育改革全体を見渡す立場が学内に必要であるという意識を持っている人は少ない。

⑬ アメリカの Higher Education センターもそうで、FD が重要という啓蒙活動を終えた後は各大学の教員の責任ということで学会ができたり、パブリケーションなどが出回ったりした。イギリスのように、専任を置くような方向へはいかなかったということではどうか？

アメリカは CTL (Center for Teaching & Learning) だが、そういった FD センターから部局に普及してしまうと、センターは何をすればよいかということがある。大学教育自体は課題がどんどん新しくなっていくこともあり、センターを大きくしていくという考え方もあれば、大きすぎるので機能別に分かれて分化させようという意見もある。

⑭ FD 全般のネットワーク論になっているが、相互研修型の FD としての報告がちょっと見えづかった。アメリカの学会でも Mutual Faculty Development というのが言葉として定着していると聞いているが。

コンセプトからいうと、田中先生が言っていた相互研修型という理念が拡散した感がある。particular だったのが、general になっているように思う。拠点形成ということからいうと、この 5 年でもかなり立派なことをしてきたと思う。拠点形成と、相互研修型 FD がどのようにつながっていくのか。お互いに利用し合う、という意味に相互研修型がずれていっていると思う。田中さんの言っていた本来の相互研修型は、教員の自立性、自立して解決していくということだったと思うが、今は営みそのものになってしまっている。

⑮ 諮問されている内容が相互研修型 FD の内容というようになっているので。多くの説明が FD の共同利用型拠点としてのものであり、相互研修型 FD についての理念がよくわからない。

田中先生のおっしゃったものがどのようにセンター内で展開されたのか、みなさんの共有財産となったのか。共同利用拠点としては、よくやりました、ということになると思うのだが、相互研修型についてはどうか？

→ スライド 4 に、相互研修型 FD のことがあるが、田中先生が最初におっしゃったのは、教員と学生の相互性だった。プロジェクト開始にあたって相互性という概念を拡張した。当初は学生と教員の相互性であった。それを FD に広げて教員同士の相互性という概念を作った。2008 年から拠点を開始するにあたり、組織間の相互性に概念を意図的に拡張した。愛媛を中心とする四国の SPOD は会費が 200 万であるが、関西 FD は 2 万である。確かに、大学間相互ということになると、SPOD ほどには相互的ではないということになるかもしれない。2008 年から FD が義務化される中で、経営基盤の弱い弱小大学がたくさんあり、関西 FD のイベントにでられる先生方はこのような大学の先生が多い。自分の大学では FD が行われていないところの先生方である。教育に関心を持つ仲間も大学にはいないが、関西 FD のイベントで仲間に出会い、連帯を深めているという意味で関西 FD はうまく機能している。京大が資金をだして運営しているが、関西地区、全国に共同研修の機会を提供し、日本の高等教育の質向上にそれなりに寄与している。だが、執行部にはなかなか理解されづらい。拠点の認定のあるあと 2 年間は大丈夫だろうがその後はわからない。

⑯ 相互性の拡張について。田中さんの概念の出発点は 50 ～ 60 年代のサークル活動だったのではないかと。これは運動だと田中さんに言った。それが初発だ。FD 義務化して状況が変わった。それと田中さんの運動とは違うレベルにある。フォーラムまでは話し合い、学び合いの活動であったが、それ以降は変質してしまった。使命が終わったと考えることもできるが、私としてはもう少し続けてほしい。関西はかなりできたが、全国的にはまだまだ。運動から政策へという移行で、違和感があるのかもしれない。

SOTL と京大のセンターの営みの類似性をどのようにはおさえているのか。SOTL の場合はそれぞれの教員がそれぞれのディシプリンを踏まえて参加している。フォーラムもよく似ている。そのあたりの整理は？カーネギーが手を引いても SOTL が壊れるわけではない。京大と SOTL を比べると、京大は手を広げすぎているのではないかと。SOTL はディシプリン基盤。フォーラムではそういうわけにはいかない。そこが課題。日常性ということは、つきつめればディシプリンが根底にある。

→ フォーラムでの発表が学会発表となるかは各大学によっては違うだろう。教育研究活動を発表する場としてフォーラムは機能している。SOTL の場合、各学会に働きかけ、教育研究活動を学会誌に掲載、学会発表を奨励。カーネギー財団だからできたことで、京大には難しい。相互研修型 FD を今後どう展開するかというなかで限界があるだろう。カーネギーでも、グローバル対応のための教養を構築するために、インターディシプリンに対する問題意識があり、SOTL でも論じられてきた。現在ディシプリンの枠を超えるという試みに発展しつつある。フォーラムの場合は出発点がすでにディシプリン横断的だった。

⑰ ディシプリンと日本語の専門は違う。日本の学問、特に人文系はディシプリンがない。相互研修型がいくら広がってもいいが、それが相互研修型でないものに対してどのような効果を与えているのかが重要。原点としては学び合の相互性だが、そうでないものに対して成果を上げているということを明確にしなければならない。

フォーラムはその部分で成果を上げていると言えるかもしれない。

個々のレベルの活動で得られた成果について、データをもとにまず内部で評価するべきだろう。フォーラムの重要性は会費がないことだけでなく、他の学会にないティーチングとラーニングに関する知見やケース・スタディも集まっている。だが、参加していない教員にインパクトを与えるためにはレビューなどの仕組みが必要。相互研修を集まって話して満足するだけでは国の経費をもらってやる意味がない。向上を目指さねばならない。聞いているとそのあたりが出てこないので心配になる。

いちばん人が集まるのは大学教育研究フォーラムと大学生研究フォーラム。後者についても少し説明を。

→ 大学生研究フォーラムは学生調査を行って、それをもとに教育改善、学生の成長について考えてきた。調査から出てくる学生の問題点と実践をつなぐ試み。大学教育研究フォーラムと形式が異なり、個人研究発表はない。こちらで企画したセッションを行う。キャリアについて焦点を当てて、大学教育との関係について考えている。2年前より東大も主催に加わった。電通育英会には諸費用を拠出している。

相互研修型FDの成果について。成果についてのエビデンスが見せられていないという課題は認識しているが、問題はFDの成果とは何か、ということ。たとえばSPODの成果は何なのか。SPODとの大きい差異には研修プログラムの設定方法がある。SPODはトップダウン式。われわれは資料1の10にあるように、関西FDの取り組みの中にはライティングのワークショップなど、各大学が事例を持ち寄って行う形式があり、ポスターセッションなどのピアレビューもある。文学研究科プレFDでも同様である。こちらから目標を押し付けるのではなく、場を提供し、それぞれの経験を持ち寄り出し合い、お互い研鑽しあうという構造をとっている。学会であればこれは当然であるが、SPODのプログラムと比べると、相互研修型という形で取り組んでいると思う。それが独自の成果になっているのか、結局FDの評価に帰着するのではないか。

⑮ すでにあるFDの成果に関する指標ではだめなのか。大学教員は自分の学会、授業の最適解にしか一般的に関心を持ってない。たとえば研究倫理の問題などは、教員が集まっても出てこない。トップダウンでしかできない。そういう面をどう組み込むのか。日本の高等教育全体の課題について取り組むために、機関相互の関係の中で日本の高等教育を改革するという目標を設定しないといけないのではないか。この課題が落ちているのではないか。

→ 日本の高等教育改革は、我々としては常にその視点をもつように心がけている。大学と社会の接点で出てくる新しい課題は、アクティブ・ラーニングや学習とキャリアとの架橋のような問いは、トップダウン的にテーマ化しないと広まっていけない。相互研修型で取り組んでいるプログラムもあるがトップダウン的に行っているプログラムもある。

⑯ 4つのレベルにわたる事業の結果として、どの程度センターとしては達成感があるのか、それが見えにくい。大学院生のための教育実践講座や文学部プレFDは相互研修型FDの大きな成果ではないかと思う。それをPRする視点が必要だろう。もう一点は、地域レベルについて。ここでの実践も重要だろう。こういう実践が他の地域のモデルになりうるのか。どこに問題があるのか、何が成果か、自己評価が必要だろう。外に向けたアピールが必要。

→ ご指摘の通り。叢書に自己評価の文章を入れなければいけないとは考えていたが報告だけで終わってしまった。手ごたえがあるのはプレFDであったり大学院生の教育実践講座。これらはプロジェクトの間にうまく成長してきた。新任教育セミナーについては始まったばかりでまだわからないが、今後の発展が期待できる。関西FDも、参加者の

間には情報交換だけでなく、共感を共有でき、自分の大学に戻ってそれを活かすことができる。だからこそ、こうした研究会への参加校が増えている。また、事務職員の参加も大きい。これも一つの成果。ただ、関西 FD には達成感、手ごたえがない。関西 FD で助かっているという大学の声がなかなかない。

ただ、小規模校からの肯定的な反応はかなりある。大規模大学たとえば阪大、関大などが、大規模大学の使命として研修提供の重要性を認識し始めている。これは継続の成果だろう。小規模校からのアンケート結果がこうした成果の大きな要因。プレ FD も、相互研修型でなければ文学研究科は絶対参加しなかった。相手の文化を尊重しながら行ってきた。

文学研究科のプレ FD については、自分の日常から話を始めている。決して日常性、ローカリティをトップダウンにおいては無視しているのではない。伝えたいことをうまく伝えられる仕組みを作ってきたからこそ、4年間を通じて進歩してきている。フォーラムについてもテーマ設定によって発表が増えるなど、単なるボトムアップでなく、価値づけもしている。

⑳ 刊行物にできる成果以外の戦略性など重要であり、それを提示してほしい。

外部から見ると、相互研修型 FD の成果を、自分たちで認識して、箇条書きでいいので示してほしい。そしてそれが拠点の、センターの働きかけの成果だと明確にしてほしい。

4年間努力してきたが、努力のレベルで終わっている。自分たちで立体的に問題構造を把握してもらわないと、評価する方も難しい。時間がないのはわかるが、頑張してほしい。

→ PDCA 的な議論は毎年合宿で行っているが、外部の形に見えるようになっていない。

㉑ 自己評価とは自己主張である。センターとしての自己主張をはっきりさせなければならない。5年間でこれだけのことをやったのは大変なことだ。

資金がなくなって消えるのはもったいない。

文科省としてはコストパフォーマンスがよかったのではないか。

プロジェクトにおいては人材育成も重要なミッション。人材の再生産サイクルの確立が重要。どれだけリーダーが育ったかも考慮しないといけない。

ここ5年、大学教育関係の出版物が飛躍的に増えた。啓蒙的な活動は増加している。学会も大きく変質している。

→ ローカリティが重要な要素であることは自覚して相互研修型としてやっているわけだが、その共有もわれわれの使命である。それぞれのローカリティが大きな流れのなかに位置しているのだから、普遍的な視点も重要になる。そういう意味でローカリティと普遍的なものの融合を大学教育学、高等教育学の中で行うことをわれわれの使命として努力していきたい。スタッフがミクロなアプローチをする傾向にあるので、マクロな視点からご意見をいただけるのはありがたい。

以上

(大塚 雄作、田中 一孝)

2013.2.28@京都大学楽友会館
相互研修型FD拠点諮問委員会資料

特別経費「大学教員教育研修のための相互研修型FD拠点形成」プロジェクト総括シンポジウム『ネットワーク時代の大学
教育改善—学びと教えの相互進化を継続させる—』資料より

FDネットワーク形成の これまでとこれから

京都大学高等教育研究開発推進センター
大塚雄作

1. 相互研修型FD拠点形成プロジェクト



- 2008年度
 - 大学設置基準の改定により
FD (faculty development) 義務化
 - ↓
 - 5年間の特別経費プロジェクト『大学教員
教育研修のための相互研修型FD拠点
形成』(2008～2012)を高等教育研究開
発センターが開始
(予算約1億円/年度・
プロジェクト期間の任期付きの特定教員採用)

2

◆相互研修型FD

- 高等教育のユニバーサル化時代
 - 教育ニーズの多様化
 - 一般的な教育方法やFD活動の限界
 - 個々の大学・学問領域等のローカルティという考え方
- 相互研修型FD:

それぞれの教育実践の改善のために、ファカルティ同士が教え合い学び合い、また、学生・教職員と協力すること。

トップダウンで一律のFD活動ではFDが実質的に機能しない。



3

2. FDネットワーク形成の意義

- アカウンタビリティ

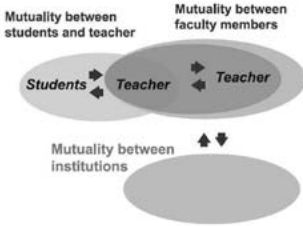
相互研修型FDは、日常的に行われることで、表面的に見えにくく、アカウンタビリティを示しにくい。

 - FDネットワークにより、相互研修型FDの重要性を共有する必要がある
 - 相互研修型FDの組織化を試みる

4

◆FDネットワークのレベル

- ファカルティ同士の個人的つながり (FDの同僚性)
- 組織同士のつながり (学部同士・大学同士)
 - 小規模の大学はFD活動をどのように進めたらよいかわからない場合も少なくない。
 - 共同してFD活動(授業評価なども含む)を実施する方がコストパフォーマンスがよい。



5

3. FDネットワークとしての取組

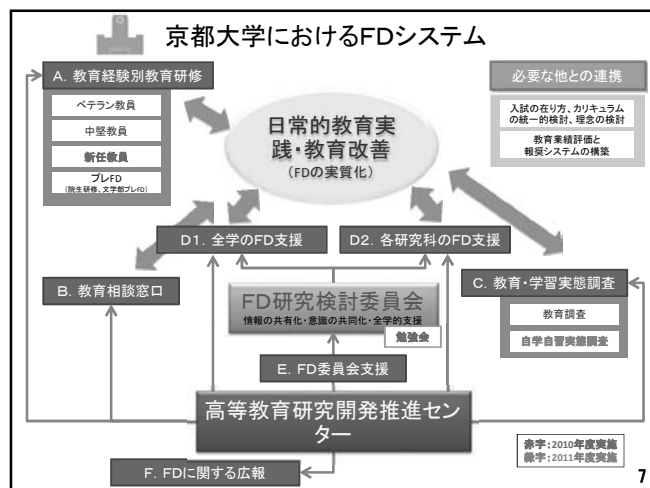
- ① 学内レベル (京都大学内)
- ② 地域レベル (関西地域)
- ③ 全国レベル (日本国内)
- ④ 国際レベル



■学内拠点

学内拠点

- 新任教員教育セミナー
- 大学院生のための教育実践講座
- 文学研究科プレFD
- 自学自習実態調査



◆FD研究検討委員会

それぞれの部局におけるFD活動について情報交換したり、一般のFDや大学教育の動向に関わる情報共有を行う。高等教育研究開発推進センターは、それらの活動の支援を行う。

◆新任教員教育セミナー

- 2011.9.1: 新任教員57名を対象
「京大の教育サポートリソース」パンフ配付

- 2012.9.7: 新任教員88名参加
- 2013.9.10: 新任教員89名参加

◆プレFD

- 大学院生のための教育実践講座
 - 2011.8.4 第7回
 - Basicコース: 55名
 - Advancedコース: 17名
 - 2012.8.7 第8回
 - Basicコース: 32名
 - Advancedコース: 16名
 - 2013.8.5 第9回
 - Basicコース: 55名
 - Advancedコース: 18名
- 文学研究科プレFD
 - 2012.2.23 16名修了書授与
 - 2013.2.23 12名修了書授与

◆自学自習実態調査

- ・ 各部局のFD活動の状況に関する情報交換会
- ・ FDに関する勉強会
- ・ 学生の学習実態に関する調査実施

Q7-1「自学自習をどの程度おこなっていますか？」(1/2)

■ かなりおこなっている
■ まあまあおこなっている
■ どちらとも言えない
■ あまりおこなっていない
■ おこなっていない

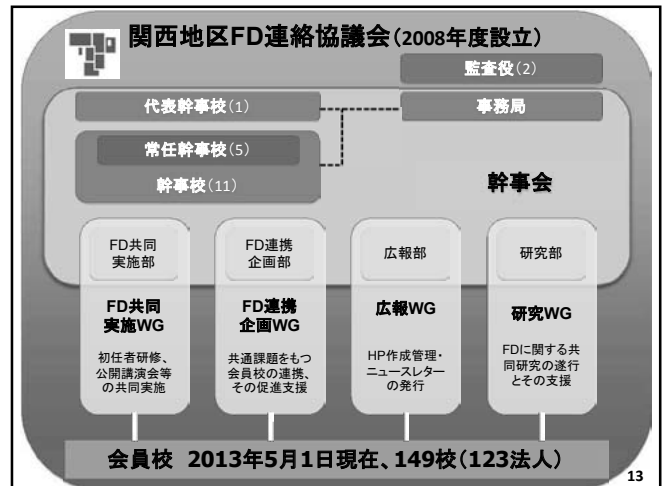
■地域拠点

➤ 関西地区FD連絡協議会

地域拠点

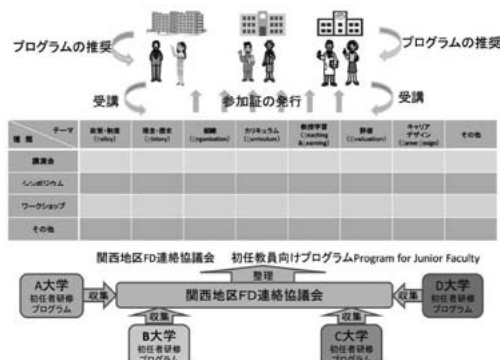
- FD共同実施WG・・・初任者研修(カンジュニ)
- FD連携企画WG・・・『思考し表現する学生を育てる』シリーズ・パイロット校
- 広報WG・・・ニュースレター・HP
- 研究WG・・・FDメディア研究SG・FDデザイン研究SG・FD実態調査
- FD活動報告会

12



13

◆FD共同実施WGによる 初任者教員向けプログラム



14

◆FD連携企画WGによる 『思考し表現する学生を育てる』シリーズ

- 2008年11月29日(土)14:00~17:00 『思考し表現する学生を育てる 一書くことをどう指導し、評価するか?』立命館大学衣笠キャンパス
- 2009年12月12日(土)13:30~18:00 『思考し表現する学生を育てる 一書くことをどう指導し、評価するか? II』関西大学千里山キャンパス 第2学舎
- 2011年1月8日(土)13:00~18:00 『思考し表現する学生を育てる 一書くことをどう指導し、評価するか? III』京都大学吉田南1号館
- 2011年12月17日(土)13:00~18:00 『思考し表現する学生を育てるIV ライティング指導の方法』立命館大学以学館



15

◆FD連携企画WGによる関西FDパイロット校

関西FDパイロット校: 関西FD会員校の多くに共通する教育改善に関わる問題の解決の方途をパイロット・ケースとして探っていくという大学(短大)・学部・学科のこと。会員校間の連携・協働による支援を受けることができ、その成果は会員校間で共有する。現在の「関西FDパイロット校」と本WGが支援するFD活動は以下の通り。(平成24年1月現在)

パイロット校	支援するFD活動
神戸常盤大学・ 神戸常盤大学短期大学部	FDの学科間連携
藍野大学 医療保健学部理学療法学科	学生の学習成果の評価(OSCE)にもとづく授業改善や科目間連携
京都ノートルダム女子大学	授業・授業外の学習、インターンシップなどの活動が学生の成長に及ぼす影響についてのアセスメント
大阪府立大学	IR(Institutional Research)にもとづく授業・カリキュラム改善、学士の質保証

16

◆広報WGによる ニュースレター



<http://www.kansai-fd.org/publications/newsletter/8.html>

17

◆研究WG…二つのサブグループ

➤FDメディア研究SG

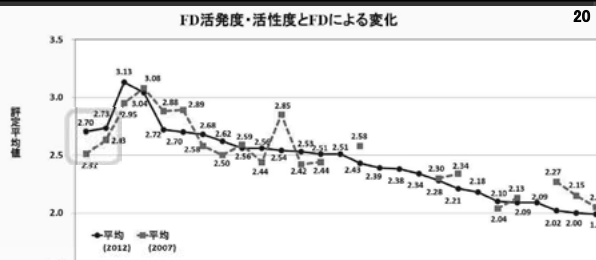
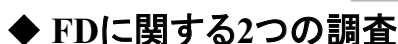
ケータイを利用した授業アンケート・出欠確認
LMSの活用 *etc.*

(ケータイを利用した出欠確認の見学会 →)

➤FDデザイン研究SG

各大学のFD取組事例の共有

(公開研究会 →)

FDに関する各種調査 *etc.*[illegible]

➤「FDに関する実態およびニーズ調査(2007)」

関西FD設立に向けて2007年6～7月に実施
対象:関西地区の大学・短大等

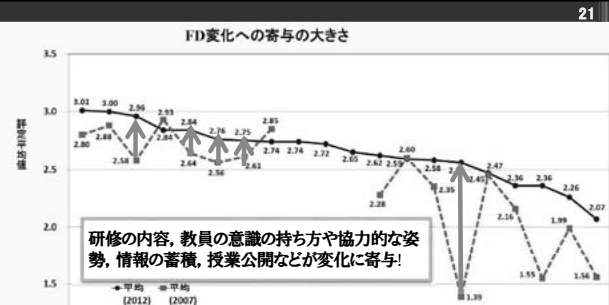
➤「FDに関する実態調査(2012)」

2012年2～3月に実施

対象：関西地区の大学・短大等

郵送、Web (REAS)、e-mail返信を利用

5月7日現在回収の348件を分析対象



研修の内容、教員の意識の持ち方や協力的な姿勢、情報の蓄積、授業公開などが変化に寄与!

Category	2012 (%)	2007 (%)
1. 専攻科の学生で専攻の分野について明確なキャリアプランを有している学生	1.39	1.39
2. 専攻科の学生で専攻の分野について明確なキャリアプランを有している学生	1.55	1.39
3. 専攻科の学生で専攻の分野について明確なキャリアプランを有している学生	1.56	1.39
4. 専攻科の学生で専攻の分野について明確なキャリアプランを有している学生	1.39	1.39
5. 専攻科の学生で専攻の分野について明確なキャリアプランを有している学生	1.39	1.39
6. 専攻科の学生で専攻の分野について明確なキャリアプランを有している学生	1.39	1.39
7. 専攻科の学生で専攻の分野について明確なキャリアプランを有している学生	1.39	1.39
8. 専攻科の学生で専攻の分野について明確なキャリアプランを有している学生	1.39	1.39
9. 専攻科の学生で専攻の分野について明確なキャリアプランを有している学生	1.39	1.39
10. 専攻科の学生で専攻の分野について明確なキャリアプランを有している学生	1.39	1.39

◆FD活動報告会

・・・FD相互評価の機会として

➤ 関西FD総会時にポスターセッション

↑

作成にMOSTを活用

➤ポスター発表に対してポストイットでコメントを付す

➤ 冊子・HPで公表

(http://www.kansai-fd.org/activities/meeting/20120519_peer-review.html)



■全国拠点



▶大学教育研究フォーラム

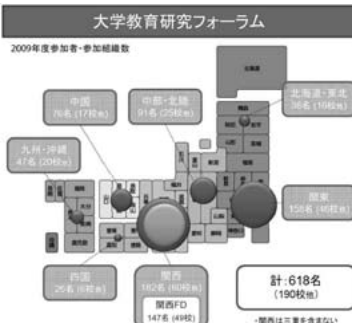
➤ 大学生研究フォーラム

➤FDネットワーク代表者会議（JFDN）

24

◆大学教育研究フォーラム

- 第16回(2010年):618名
- 第17回(2011年):439名
- 第18回(2012年):578名
- 第19回(2013年):682名
- 第20回(2014年)
3月18日・19日開催予定



25

◆大学生研究フォーラム

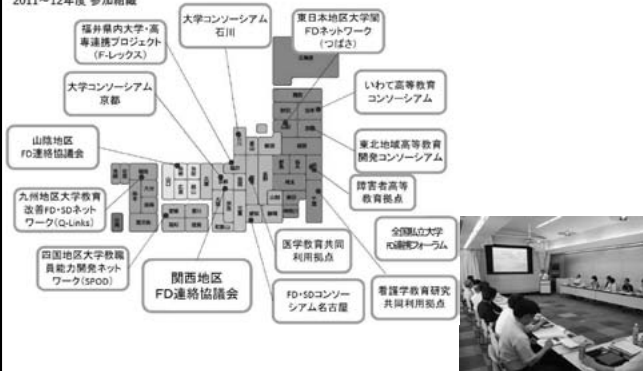
- 2011年8月1日(月)・2日(火) 427名参加
京都大学高等教育研究開発推進センター
東京大学大学総合教育研究センター
公益財団法人電通育英会 共催
- 2012年8月19日(日)・20日(月) 約500名



26

◆FDネットワーク代表者会議 (JFDN)

2011~12年度 参加組織



27

◆ MOST (Mutual Online System for Teaching & learning)

- コースポートフォリオ
- 組織的FDポートフォリオ
- スナップショットギャラリー

MOST: 大学教員の相互研修の場をコンセプトとする招待制のコミュニティサイトです。

28

■ 国際拠点

- 海外研究者招聘
 - 国際シンポジウム
 - 公開研究会
- 海外調査
- 成果発信
 - ISSOTL参加
 - 国際シンポジウムに関する書籍刊行



29

◆国際シンポジウム (公開研究会)

- ①2011年12月1日
フェレンス・マルトン
(ヨーテボリ大学名誉教授)
「Deep Learningにもとづく
大学教育のあり方」 76名参加
- ②2012年2月12日
ダニエル・バーンスタイン
(カンザス大学・次期ISSOTL会長)
「大学教育におけるポートフォリオの活用
—授業改善からカリキュラム改善へ—」
137名参加
- ③2012年3月1日 センター内研究会
クリス・ゴールディ (スタンフォード大学)
「大学院教育のあり方について
(カーネギー財団のCIDプログラムを中心に)」



30

◆国際シンポジウム

①2012年10月10日
エリック・マズール(ハーバード大学・物理学)
「ピア・インストラクションによる
アクティブ・ラーニングの深化」
ピア・インストラクションを通して学生の深い学習を促す授業や
学習評価のあり方について考える
ハーバード=京大 共同研究より
京大 ピア・インストラクション活用授業 →
「自己形成の心理学(溝上慎一)」

②2013年1月27日
ランディ・パース(ジョージタウン大学) &
エリザベス・バークレイ(フットヒルカレッジ)
「ネットワーク時代の大学教育改善」
学びと教えの相互進化をいかに持続させるかについて議論

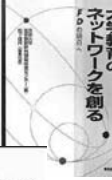
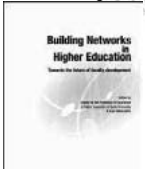



31

◆国際連携の成果の出版・発表

①出版
・2008年1月の国際シンポ(「日本のFDの未来—Building the Core in Faculty Development—」)
↓
・センター編『大学教育のネットワークを創る—FDの未来へ—』(東信堂, 2011年3月)
・"Building Networks in Higher Education: Towards the future of faculty development" (Maruzen Planet, 2011)

②発表
・ISSOTL 2011、他に参加・発表

32

4. FDネットワークのこれからと FDの課題

- ・財政的問題により、FDネットワークの維持にとって
は困難な状況が到来している。
- ・その困難な状況にあって、教育改善やFD活動をど
のように推進していくかが問われている。
- ・FDネットワーク自身も、資源の限界があるなかで、
どのようにその機能を果たしていくかが大きな課題
となってきている。

33

◆教授から学習へ

- ・FDの目標は教育を活性化し、学生の学習に寄与す
ること。
- ・世界的に「教授から学習へ」というシフトが、高等教
育にも顕著に見られるようになっている。
- ・FD活動は、そのような流れのなかでも、学習を活性
化するための重要な位置づけがされるべきもの。

34

◆FDに関する知識や経験の積み重ね

- ・関西FDなどに参加してくる各大学の委員は、3年程
度で代わっていき、常にFDに関しては、ほとんど経
験ないところから始めることが少なくない。
- ・教育関係共同利用拠点として、京都大学高等教育
研究開発推進センターは、その点で、FDに関する
知識や経験を積み重ね、それに経時的に関わるス
タッフによって、常に共有を図る努力が望まれる。

35

◆FD評価の課題

- ・大学教育やFDに関する評価のあり方や具体的な
方法について明らかにしていくことが今後の重要な
課題の一つ。
- ・FDネットワークは、難しい情勢のなかで、その機能
を十全に果たしていくために、重要な岐路に差し掛
かっている。

了



IV-5-2. 相互研修型 FD 共同利用拠点運営委員会の概要

2013 年 9 月 12 日（木）15 時から、京都大学吉田南 1 号館 106 室において、文部科学省教育関係共同利用拠点「相互研修型 FD 共同利用拠点」の平成 25 年度の運営委員会が開催されている。参考のために、その議論の概要を記載しておく。

なお、出席者は、学外から、伊東千尋和歌山大学システム工学部教授、圓月勝博同志社大学文学部教授、大久保敦大阪市立大学大学教育研究センター教授、田中俊也関西大学文学部教授、夏目達也名古屋大学高等教育センター教授、学内他部局より、前平泰志京都大学大学院教育学研究科長、八尾誠京都大学大学院理学研究科教授、センターから、大塚雄作京都大学高等教育研究開発推進センター長、松下佳代同教授、飯吉透同教授、溝上慎一同准教授、その他、酒井博之准教授、田中一孝特定助教、センター事務局が陪席した。

大塚委員長より、拠点の平成 24 年度活動状況報告、決算報告、また、平成 25 年度活動実施計画、予算報告があり、引き続いて、委員の意見交換が行われた。主な質疑・コメントは以下の通り。



（伊東）概算要求についての厳しい状況は、文部科学省の判断としては、FD は定常活動となり喫緊の課題ではないとのことか、それとも活動計画自体の問題か。

（大塚）震災対応の側面があるかもしれないが、詳細は不明である。おそらく、すでに共同利用拠点に選ばれているということが影響し、新規プロジェクトの予算を獲得するのが難しくなっているのかもしれない。文科省が FD に注力しなくなったという雰囲気は感じない。

（伊東）河合塾との追跡調査の連携事業は、FD とどのような関係があるのか。

（大塚）キャリア教育が設置基準に盛り込まれたことで、長期間にわたる学生のデータを集める必要がある。そうしたデータに基づき、新たな計画を FD の計画を提案することができる。

（溝上）大学生を対象とした近年の調査を通じて、多くの学生において、大学 1 年次の学力や学習態度がそのまま 4 年間変わらないことがわかってきた。したがってそういった結果を高校に伝えることが重要である。さらに、大学生だけの調査では限界があり、高校生も含めて調査を実施しなければならない。

（夏目）そこから得られる知見はなにか。

（溝上）多角的に言えるが、関心としては学習や様々な活動が個人の成長にどうつながるかを見るつもりだ。自分の将来の姿を確実に思い描いている学生ほど勉強をしていると言われるが、高校でどういう学習をしてきた学生が、どういう大学に入るのかを調べる。

(大塚) 今年の11月に高校2年生のデータを取り、彼らが大学1年になったときにさらにデータを取る。

(溝上) 大学入学後は予測がつくところが多いので、10年後を待たず3年後には多くのことがわかるだろう。

(夏目) 進学先の学部によって状況は違うのでは。

(溝上) たとえば医療系ではキャリア意識が高い。ただそういった違いがあっても、主体的な学びの姿勢などについては、分野などに限らない一般的な結論が導き出されると予想される。

(伊東) 工学部では産業界との連携が求められる。工学部では学生は全く勉強せず、会社に出たから実務を通して知識・技術を習得し始めるという傾向がある。この状況について企業から大学の教育に不満がある。そこで企業の実務に就いた学生が、大学の教育を振り返ってどうなのか、こういう視点からの調査も必要ではないか。

(溝上) 大学生研究フォーラムにおいて、東大での窓口の先生は、大学教育のみならず企業の人材開発も専門としている。その先生には昨年、今回の縦断調査の予備調査として、ミドルマネージャークラスの社会人に高校・大学を振り返ってもらう調査を実施してもらった。その中でわかってきたことは、組織で仕事するために一番外してはならないのは対人関係や活動性である。その上に勉強という活動が乗ってくるのであり、勉強だけをするとはかえって負の効果としてはたらくことがわかった。この二つに、将来という三つ目を加えると三項パフォーマンスとなる。



(田中) たとえば短大からの大学編入者などは、調査のサンプルになるのか。

(溝上) 基本的に高大接続に焦点を当てているが、様々な層を調査していきたいし、検討はする。

(八尾) 高専からの編入者もいる。京大でも工学部学生は勉強しないとされており、学生の社会における将来像を想定した上で、大学のFDを検討するのは有意義である。ところで、たとえばスマートフォンなどに熱中になっている人間はちゃんと将来就職できるのか、興味がある。

(溝上) メディアの発達した時代あるいは公共の感覚が低下した時代に、学生のどのような生活態度が、どのような将来に結びつくかというのは、重要な視点である。

(夏目) 大学1年と3年の成績の相関が高いと言っていたが、優秀層は常に良く学び、そうでない層は学ばないということか。

(溝上) 企業の観点からすると、いい学生と中間の学生、欲しくない学生と3～4層程度に分類できる。とりわけ上位層と下位層は学業成績のみならずチャレンジ精神等、様々な面で変わらないままである。

(夏目) 教育が有効性を持つとすれば、それを変えなければならない。

(溝上) どの点を変えることができ、どの点ができないのか、より限定的な視点から調べる必要がある。

(夏目) 工学部学生の生活に関する認識が極めて単調である。

- (溝上) 自分の将来像や社会が前提となって今の自分がある、という感覚は今の学生には無い。日常を単に楽しむことで単調性が生まれる。これはまずい状態であるが、どこまで大学が関われるかは問題である。
- (伊東) 文科省より、近年社会人が持つべき基礎知識を教えるという、リニューアル教育が大学は求められている。その点でもこの調査は重要である。どの点がリニューアル教育に足りないのかを盛り込んで欲しい。
- (圓月) 運営委員会として問題であるのは、概算要求などの支援が減っていることである。高大接続は教育の大きな問題であるので、たとえば来年の中期計画に中心的に盛り込み、もう一度概算要求の回復を図ったほうが良い。今回の資料を見て、プロジェクトの緊急性についてのインパクトがない。
- (大塚) 概算要求に加え、拠点プロジェクトも来年度に終わるので、その申請もする。このチャンスを活かす必要がある。
- (松下) 補足すると、資料5の概算要求の緊急性、必要性の欄については申請時から変えられない部分である。よって、現在から見れば仕方のない部分がある。新規プロジェクトについてはトランジション調査の内容を踏まえて、教育イノベーションを起こすというものであった。これまでは内容の切り分けが難しかったが、27年度からは1本化した内容で申請書を書ける。
- (圓月) これまでの大変な蓄積があるので、今後の予算のための戦略をもっと発展させて欲しい。
- (大塚) センターとしてはミッションを再定義し、共同利用拠点をより発展させていきたいと考えている。
- (大久保) 拠点プロジェクト終了後の見通しを聞かせて欲しい。
- (大塚) 拠点のリソースを継続する必要がある。
- (大久保) たとえば10年単位の長期的見通しが必要ではないか。
- (大塚) たとえば関西FDにしても、特別経費が落ち続けると会費を値上げせざるを得ない。京大が下支えするためにも、そうした見通しを持ちながら、27年度以降の予算を申請していきたい。
- (田中) 27年度以降はパンフレットを新たに作り変えるのか。
- (大塚) むしろ、学内の組織改編を踏まえて、適切な時期に作り変える必要がある。
- (松下) 配布したのは拠点のパンフレットだが、それ以外にもセンターのパンフレットもある。拠点の継続性、センターの組織改編の可能性、二つの意味でパンフレットを新たに作りにくい状況にある。
- (大塚) 各大学のFD担当者は年度ごとに変わりがちなので、拠点の継続性は重要であると考えている。この点についての評価が文部科学省から得られたらと思っている。
- (夏目) SDに関してはどうか。
- (大塚) コンソーシアム京都や私大のネットワークとの住み分けを明確にするために、本拠点はSDを前面に出すことは考えていない。
- (夏目) 少なくとも見せ方として、それらのネットワークと連携を出してもいい



いのでは。

(大塚) 事務職員と教員の連携は重要であるのは無論だが、拠点のミッションとして前面に出すのは避けている。

(夏目) プレ FD は興味深く発展しているが、プロジェクトとして負担になっているのではないか。またポスドクについては京大の担当部署に任せても良いのではないか。

(大塚) 「大学院生のための教育実践講座」は現在、大きな負担になっていない。文学研究科プレ FD プロジェクトについては、予算も含めて、次第にセンターから自立し定着している。他の部局からの要望も今後出てくる可能性があるので、その際には我々が対応できる体制を整えていきたい。

(夏目) 学内の潜在的なニーズを拾うことも重要である。

(大塚) 学内の FD 研究検討委員会がまさにそうした場になっているが、委員の入れ替わりが激しく、難しい状況である。

(飯吉) MOST などのコミュニティを通じて新たな FD の課題や興味深い知見を共有しているが、京大の教員は参加していないという現実がある。京大にも MOST に参加を希望するような教員がいるかもしれない。ただ「相互研修型」の弱点として、参加を強制できないという問題がある。

(圓月) FD 活動の自立化は理想的だが、拠点の必要性が希薄化するという危険性もある。予算が減るということを理由にして関西 FD の会員費の値上げをすることは、脱会を招くだろう。今後はより普遍的なミッションを提示して、会員校の執行部を説得する必要がある。

(大塚) 様々なネットワークがある中で、この拠点特有のミッション提示する必要はあるだろう。

(田中) JFDN は関西 FD が中心になって、他大学に声をかけている状況か。

(大塚) JFDN は関西 FD にかぎらず、全国の FD ネットワークの代表者会議である。

(前平) そもそも FD とは何なのか、その定義がよくわからない。パンフレットに記して欲しい。また学内の実践に生きるように、もっと活動をアピールして欲しい。

(大塚) FD については様々な考え方があるが、基本的には大学設置基準にある FD を前提としている。その上で我々の FD を提示している。

(飯吉) FD が日本で出てきた経緯は、最低限の大学質保証であるだろう。そしてそれは達成されたかもしれない。今後は FD が将来への大きな投資になるという視点を打ち出し、ブレイクスルーをする必要がある。

(大塚) 課題は様々であるが、大久保委員の指摘にもあったように、今後、長期的視点をもって我々の活動を展開していく必要がある。今後ともご指導を賜りたい。

以上

記録：田中一孝

(大塚 雄作、田中 一孝)